



弘田柵跡調査事務所年報 1981

弘田柵跡

—— 第38～45次発掘調査概要 ——

秋田県教育委員会
弘田柵跡調査事務所

序 文

弘田柵跡の昭和56年度発掘調査は、第2次5ヶ年計画の第3年次として、第38次～第45次発掘調査まで8地点実施し、一応の成果をおさめることができました。

ここに発掘調査の概要を刊行するにあたり、御指導・御鞭撻を賜わっている顧問、文化庁等の関係各位に深く感謝申し上げます。

昭和57年3月31日

秋田県教育委員会

教育長 畠山芳郎

例 言

1 本年報は、調査の速報を編集方針とし、全所員が発掘調査と整理作業にあたった。発掘調査概要の作成にあたり、次のとおり分担し、佐藤健・小西秀典が全面的に協力した。

船木義勝 II・V・VIII.4・XI 山崎文幸 III・IV・VI・VIII.2・IX 栗沢光男 VII・VIII.3・X

2 発掘調査および整理・概要作成にあたって、顧問・文化庁のほか、宮城県多賀城跡調査研究所および下記の方々から指導助言等の御協力をいただいたので、記して感謝の意を表したい。（敬称略）

仙北町役場 伊藤喜四郎・後藤八郎・佐藤久之助・竹村隆雄・竹村省吾・牛山喜八郎 仙北町教育委員会 後藤稜太郎・長沢豊太郎・寺門恵造・小西秀典 千畑村教育委員会 高橋弘・藤嶋辰治 現場作業員・整理作業員 大河喜栄・茂木福太郎・杉沢毅・菅原龍助・高柳竜太郎・菅原謙蔵・菅原道明・熊谷道宏・熊谷之広・伊藤晴康・村田嘉一・古屋学・山崎敬子・佐々木聡美・草薙弘子 土地所有者 後藤剛・後藤道和・後藤繁・山崎精・後藤清治・長瀨龍徳・長瀨哲雄・菅原龍助・吉川清逸・新田信夫・後藤清・後藤宏・熊谷功輝・高柳達美

3 土色の記載については、小山正忠・竹原秀雄編著『新版 標準土色帖』（1976.9）を参考にした。

4 実測図は、国土調査法第X座標系を基準に作成した。詳細は『払田柵跡調査事務所年報1977』を参照されたい。

5 第XI章には、第35次発掘調査で出土した鉄滓分析について、東京工業大学製鉄研究会の後藤忠俊・高塚秀治・阿久津久各氏から御寄稿を頂き収録した。

目 次

I	はじめに	1	1	調査経過	
II	調査計画と実績	2	2	発見遺構	
III	第38次発掘調査	6	3	出土遺物	
IV	第39次発掘調査	9	4	小 結	
V	第40次発掘調査	11	IX	第44次発掘調査	36
VI	第41次発掘調査	14	1	調査経過	
VII	第42次発掘調査	17	2	発見遺構	
	1 調査経過		3	出土遺物	
	2 発見遺構		4	小 結	
	3 出土遺物		X	第45次発掘調査	43
	4 小 結		XI	「鍛冶炉」における科学分析	46
VIII	第43次発掘調査	24	XII	調査成果の普及と関連活動	49

表 目 次

第1表 発掘調査計画表

第2表 発掘調査実績表

挿 図 目 次

第1図	払田柵跡発掘調査地域図	第12図	西壁土層図
第2図	第38次・第39次発掘調査地形図	第13図	第42次発掘調査地形図
第3図	第38次・第39次発掘調査実測図	第14図	第42次発掘調査遺構配置図
第4図	Aトレンチ西壁土層図	第15図	東壁土層図
第5図	Bトレンチ北壁土層図	第16図	S F 459 築地実測図
第6図	第40次発掘調査地形図	第17図	S B 458 - 1 建物実測図
第7図	第40次発掘調査実測図	第18図	S K 455・457土壌実測図
第8図	第40次発掘調査遺構配置図	第19図	出土土器
第9図	Bトレンチ東壁土層図	第20図	第43次発掘調査地形図
第10図	第41次発掘調査地形図	第21図	第43次発掘調査遺構配置図
第11図	第41次発掘調査実測図	第22図	F I・04ライン断面図

第23図	S B 430 建物実測図	第31図	44 - 2 A トレンチ北壁土層図
第24図	S B 444・445建物実測図	第32図	44 - 4 A トレンチ東壁土層図
第25図	S B 446 建物実測図	第33図	44 - 6 B トレンチ東壁土層図
第26図	S D 433・442溝実測図	第34図	出土土器
第27図	S D 438・439溝実測図	第35図	第45次発掘調査地形図
第28図	S X 431・432実測図	第36図	第45次発掘調査実測図
第29図	出土遺物	第37図	南壁土層図
第30図	第44次発掘調査地形図		

図 版 目 次

図版 1	第38次発掘調査 (1)調査区全景 第39次発掘調査 (2)調査区全景 (3)S L 398 河道跡
図版 2	第40次発掘調査 (1)調査区全景 (2)S L 401 河道跡 (3)S L 402 水路跡
図版 3	第41次発掘調査 (1)調査区全景 (2)調査区全景
図版 4	第42次発掘調査 (1)調査区全景 (2)調査区全景
図版 5	第42次発掘調査 (1)S F 459 築地跡 (2)東壁土層
図版 6	第42次発掘調査 (1)S B 458 建物跡 (2)S B 458 建物跡
図版 7	第42次発掘調査 (1)S B 458 - 1 建物・柱 (2)S B 458 - 1 土層
図版 8	第42次発掘調査 (1)S K 455・457土壌 (2)S K 457 土壌土層
図版 9	第43次発掘調査 (1)調査区全景 (2)S B 430 建物跡
図版10	第43次発掘調査 (1)S B 444・445建物跡 (2)S B 444 - 8 建物・柱
図版11	第43次発掘調査 (1)S B 445 - 3 建物・柱 (2)S B 446 - 5 建物・柱
図版12	第43次発掘調査 (1)S D 433 溝 (2)S D 433・442溝
図版13	第43次発掘調査 (1)S D 434・443溝 (2)S D 438・439溝
図版14	第43次発掘調査 (1)S D 439 溝 (2)S X 431・432
図版15	第43次発掘調査 (1)S X 437 (2)S X 441
図版16	第43次発掘調査 (1)A トレンチ (2)B トレンチ
図版17	第44次発掘調査 (1)3-A トレンチ (2)6 B トレンチ
図版18	第44次発掘調査 (1)6 B トレンチ (2)6 C トレンチ
図版19	第44次発掘調査 (1)土器出土状況 (2)出土土器 (14) (3)出土土器 (20)
図版20	第45次発掘調査 (1)調査前全景 (2)調査区全景 (3)A トレンチ

I はじめに

弘田柵跡調査事務所は、本年度第2次5ヶ年計画の第3年次として、第38次から第45次発掘調査まで8地点の調査を実施いたしました。この内訳は、現状変更届出に伴う調査が5地点、学術調査が3地点であります。

本年度の調査は第1に内・外郭間の広大な範囲のなかに官衙ブロックを把握する試みを開始すること、第2に内郭線南側の築地土堀跡の確認と建物群の追跡、第3に第2次5ヶ年計画の基本計画である外郭線位置の確認を実施したことであります。第1の調査は第43次発掘調査として実施しましたが、検出された掘立柱建物群が古代の遺構である可能性があり、掘立柱建物の変遷を考えるうえの一つの資料になるものと存じます。第2については、第42次発掘調査で手がかりをつかむことができました。第3については、外郭線南東部を発掘調査いたしました。残された北側の外郭線の位置については仙北町教育委員会が確認調査を実施いたしましたので、本年度をもつて終了することができました。

今、本年度の発掘調査概要をまとめ、当事務所の年報として刊行することになりましたが、これが今後の考古学研究上並びに遺跡保存の一助となればたいへん幸いであります。

なお、調査研究にあたりまして顧問秋田大学教育学部教授新野直吉氏、文化庁・宮城県多賀城跡調査研究所・東北歴史資料館より御指導・御助言を賜わり心から感謝を申し上げますとともに地元仙北町・同教育委員会、千畑村・同教育委員会および土地所有者・作業員の皆様の御協力に対しまして厚く御礼申上ます。

昭和 57 年 3 月 31 日

秋田県弘田柵跡調査事務所

所長 梶原忠郎

II 調査計画と実績

昭和56年度の発掘調査は「払田柵跡発掘調査要項」に基づく、第2次5ヵ年計画の第3年次にあたる。さいわい発掘調査費については秋田県の要求額どおりの国庫補助金の内示（総経費1,300万円のうち、国庫補助額650万円）を得たので、次のような「昭和56年度払田柵跡発掘調査計画(案)」を立案した。

第1表 発掘調査計画表

調査次数	調査地区	調査予定積面	調査期間	備考
第38次	外郭東部地区 (大谷地70)	125㎡	4月20日～4月30日	
第39次	外郭東部地区 (69-1, 70-1, 71-1)	250㎡	5月1日～5月20日	
第40次	外郭南西部地区 (92-3, 93-3)	175㎡	5月21日～6月10日	
第41次	真山南麓地区 (森崎143)	50㎡	6月11日～6月20日	
第42次	外郭北西部地区 (森合2号線)	100㎡	6月21日～6月30日	但し、国庫補助対象外事業
第43次	外郭南部地区 (館前)	1,500㎡	7月1日～10月30日	
第44次	外郭線南東部地区	800㎡	11月1日～12月10日	
合計	7地区	3,000㎡		

本年度の発掘調査は、地域内居住者から申請のあった現状変更に対応すること、第2次5ヵ年計画に基づく外郭線の位置確認調査を実施すること、内・外郭間の主要官衙遺構の検出につとめること、などを中心に第1表のように計画した。調査期間途中、第42次発掘調査は一時事業中止となったため、計画にはなかった新地点の調査を実施したが、その後急遽事業が再び実施されることになり第45次発掘調査として施行したものである。このため調査次数の名称については第2表のとおり訂正した。

史跡 払田柵跡



第1図 払田柵跡発掘調査地域図

第38～40次発掘調査は、土地買上げ事業に伴う移転先の事前調査、あるいは、住宅新築・増築・埋立工事など指定地内居住者から依頼のあった事業であり、さいわい古代遺構の発見はなかった。第42次発掘調査は、内郭線南側の位置確認と内郭内の主要官衙遺構の検出をめざしたものであり、今後さらに継続してゆきたい。第43次発掘調査は、内・外郭間の広大な地域をどこから手をつけるか手がかりを得るため実施した。第44次発掘調査は、外郭線南東部の位置を確認した。第45次発掘調査は、道路拡幅と水路整備に伴う事前調査で、地域内生活道路の確保として対応したものである。

昭和56年度の発掘調査の実績はつぎのとおりである。

第2表 発掘調査実績表

調査次数	調査地区	発掘面積	調査期間
第38次	外郭東部地区(大谷地70)	120m ²	4月8日～4月10日
第39次	外郭東部地区(69-1, 70-1, 71-1)	300m ²	4月8日～4月15日
第40次	外郭南西部地区(92-3, 93-3)	150m ²	4月16日～4月23日
第41次	真山南麓地区(森崎143)	50m ²	4月23日～4月25日
第42次	長森南麓地区(長森12-1)	155m ²	9月19日～11月7日
第43次	外郭南部地区(館前)	1,210m ²	5月8日～9月18日
第44次	外郭線南東部地区	200m ²	11月9日～12月4日
第45次	外郭北西部地区(森合)	54m ²	12月14日～12月16日
合計	8地区	2,239m ²	

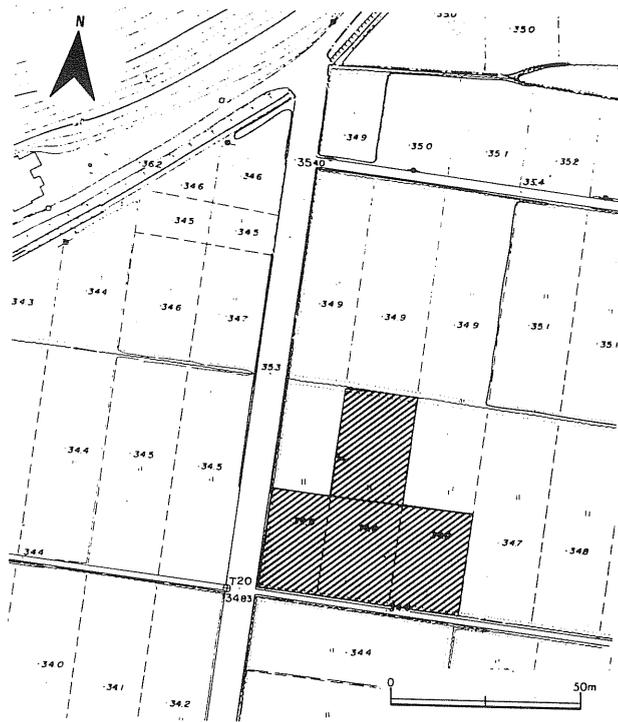
なお、年間を通して出土遺物・資料の整理をおこなった。

III 第38次発掘調査

1 調査経過 (第2図)

管理団体仙北町あて、昭和56年3月30日付仙北郡仙北町払田字長森23～6番地後藤剛氏より、住宅新築のための現状変更許可申請書が提出されたので、秋田県教育委員会を經由し、昭和56年4月8日付秋教文収第830号にて文化庁へ進達された。

これに対し、文化庁から申請者あて、昭和56年3月30日付委保第4の310号にて「工事の着手は秋田県教育委員会による発掘調査終了後とすること。発掘調査の結果、重要な遺構等が発見された場合は、その保存を図ること。その他、実施に当っては秋田県教育委員会の指示を受けること」との通知があった。



第2図 第38次・第39次発掘調査地形図

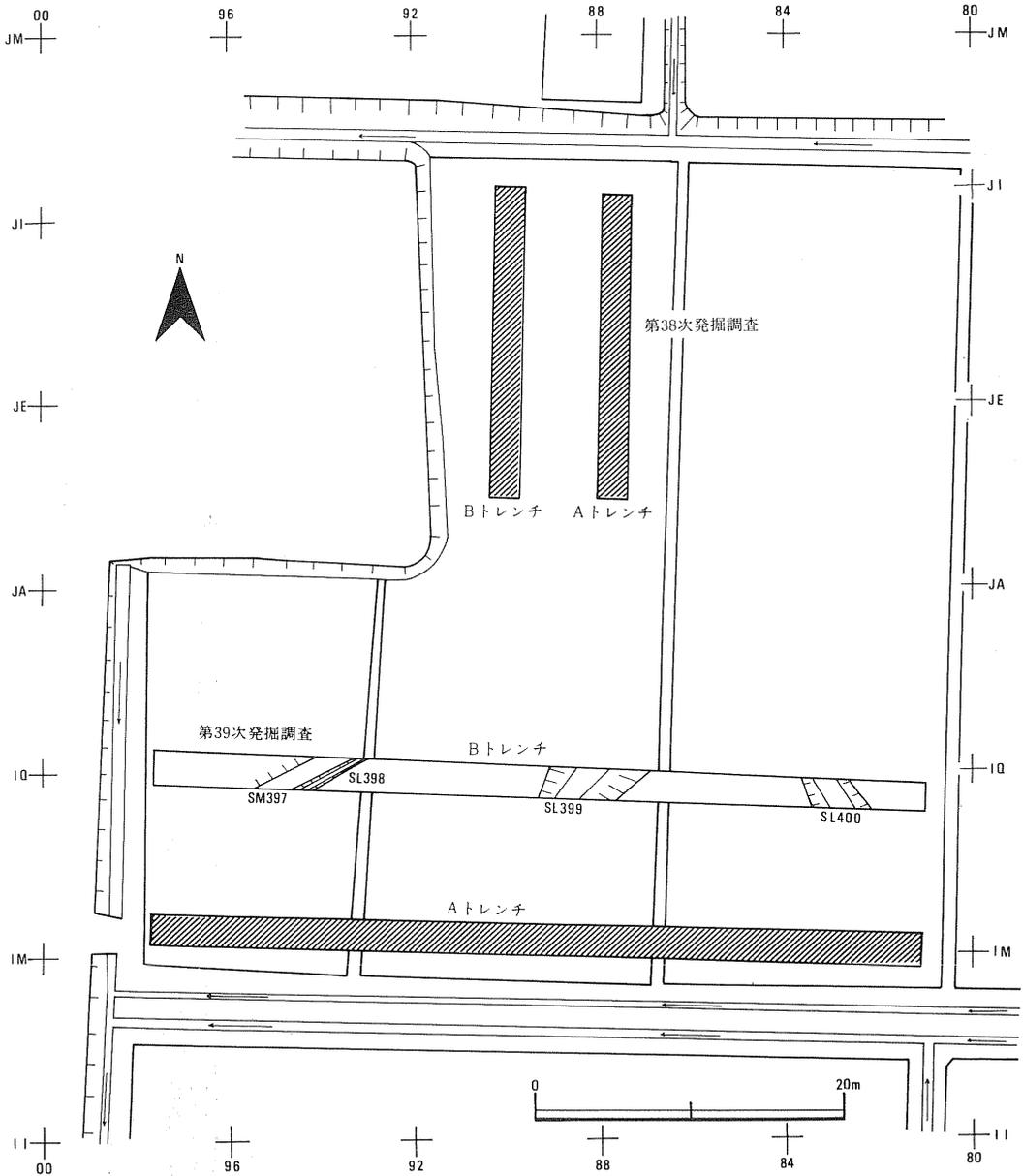
当事務所は「第38次発掘調査」として申請地面積 500 m² (建築面積159.88 m²) にトレンチ2本 (東側Aトレンチ・西側Bトレンチ) の発掘調査を実施した。

2 発見遺構 (第3図・4図, 図版1)

遺構は検出されなかった。

調査区の土層はA・Bトレンチともに第1～6層よりなり、第1層黒褐色土、第2層黒色土 (黄褐色土を20%含む)、第3層は黒褐色土 (褐色土を10%含む)、第4層は暗褐色土 (黄褐色土を30%含む)、第5層オリーブ黒色土 (黄褐色土を20%含む)、第6層は黒色土と黄褐色土の

混合層である。第1, 2層は盛土層で第3~6層は粘質土でグライ化している。



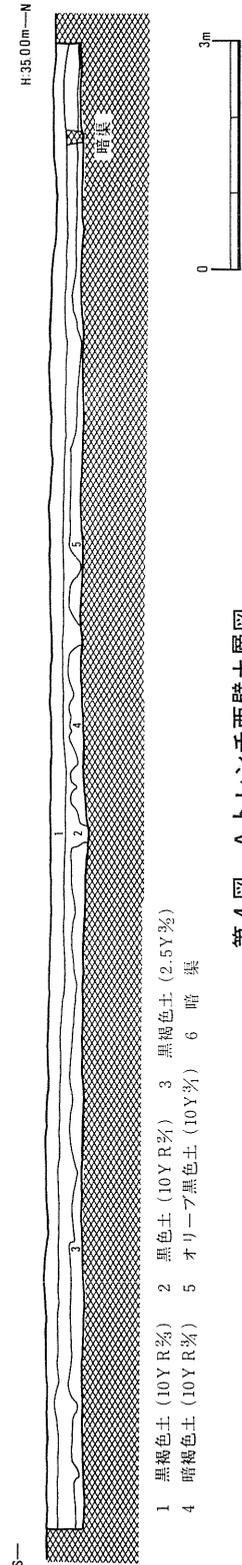
第3図 第38次・第39次調査実測図

3 遺物

Bトレンチ2層より、鉄製品（近代）1点、木製品（性格不明）3点の計4点出土した。

4 小結

土層観察によると第1・2層は耕地等により攪乱を受けたと推察され、第3層は古代の包含層に相当すると思われるが、遺構は検出されなかった。



IV 第39次発掘調査

1 調査経過

管理団体仙北町あて、昭和55年12月仙北郡仙北町払田字仲谷地2番地後藤道和氏より住宅火災のため、仙北町払田字大谷地70の1番地(地目田)に住宅新築のための現状変更許可申請書が提出されたので、秋田県教育委員会を経由し昭和56年2月17日付秋教文収第743号にて文化庁へ進達された。

これに対し、文化庁から申請者あて、昭和56年3月20日付委保第4の153号にて「工事の着手は、秋田県教育委員会による事前発掘調査の終了後とすること。発掘調査の結果重要な遺構が発見された場合は設計変更等により、その保存を図ること。その他実施に当っては秋田県教育委員会の指示を受けること」との通知があった。また同氏より昭和56年3月30日付で上記申請地の東側に隣接する仙北町払田字大谷地69-1番地の追加申請書が提出されたので、前記申請と一括して取扱うことにした。

当事務所は「第39次発掘調査」として申請地面積1,410㎡(建築面積283.89㎡)を対象とし、調査区南側をA地区、北側をB地区とし、発掘調査を実施した。

2 発見遺構 (第5図、図版1)

A・B両地区の基本層位は、第1層暗褐色土、第2層黒色土、第3層オリーブ黒色土、第4層黒色土、第5層暗褐色土、第6層オリーブ黒色土(にふい黄橙色の砂粒が板状に30~40%混入)である。第1・2層は耕作土で第3層は粘質土でグライ化している。第4~6層は高梨村耕地整理事業以前の遺構に伴うものである。

(1) A地区

遺構は検出されなかった。

(2) B地区

遺構は第1・2層を完全に除去した段階で確認された。

SM 397 調査区西寄りに東北~南西方向に走る旧道路跡である。道路幅員約1mで両側に深さ0.3~0.5mの側溝が伴うものである。

SL 398 SM397両側に接する水路状の遺構である。SM397と同一面で確認され、幅0.5~0.7m、深さ0.3~0.5mでU字型を呈している。SM397に伴う遺構である。

S L 399 幅5.10m, 深さ0.12~0.18mの用水路の遺構である。土層観察によれば底部には灰白色の砂粒が板状に堆積している。

S L 400 幅 2.0m, 最深部 0.2mの用水路遺構である。土層観察によれば底部には灰白色の砂粒が板状構造をなして堆積している。

3 遺物

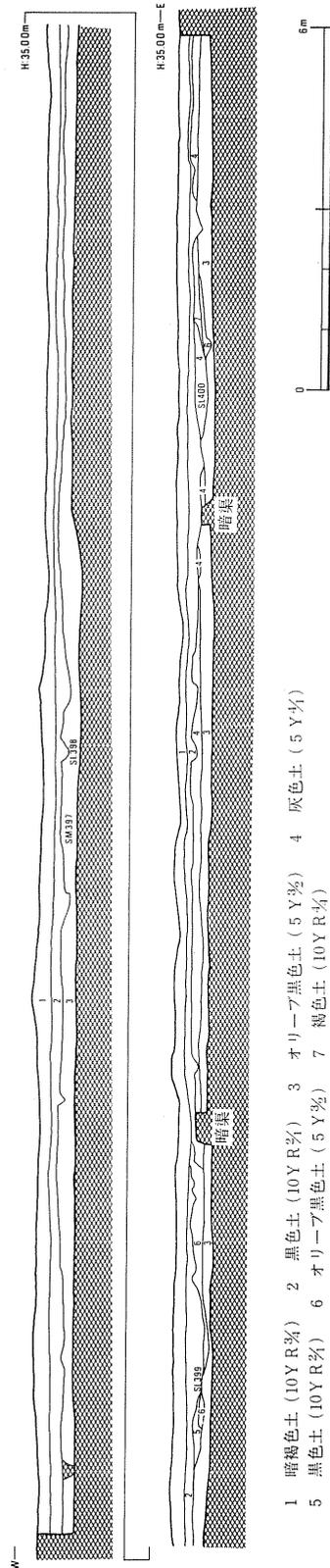
A地区 土師器1点, 須恵器3点, 木製品3点の計7点出土したが, いずれも小破片で詳細は不明である。

B地区 遺物の出土はなかった。

4 小 結

土層観察によれば第1・2層は耕作や, 耕作地整理等によって攪乱を受けていると考えられ, 第3層は古代の包含層と推察されるが遺構は共伴しなかった。

S M 397 (旧道路跡)・S L 398~400 (旧用水路跡)は古代の遺構ではなく, 明治初期の高梨村耕地整理以前の道路・畦畔・用水路等と考えられる。

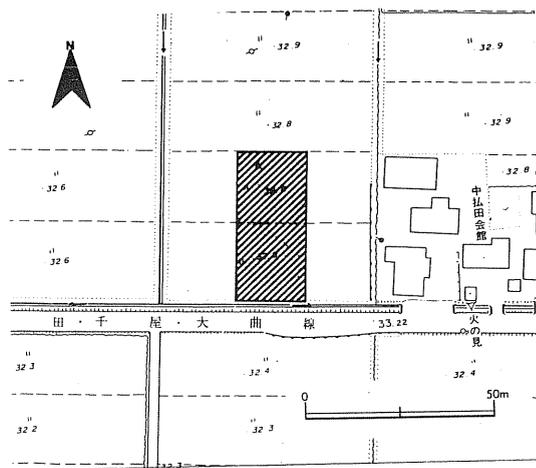


第5図 Bトレンチ北壁土層図

V 第40次発掘調査

1 調査経過 (第6・7図)

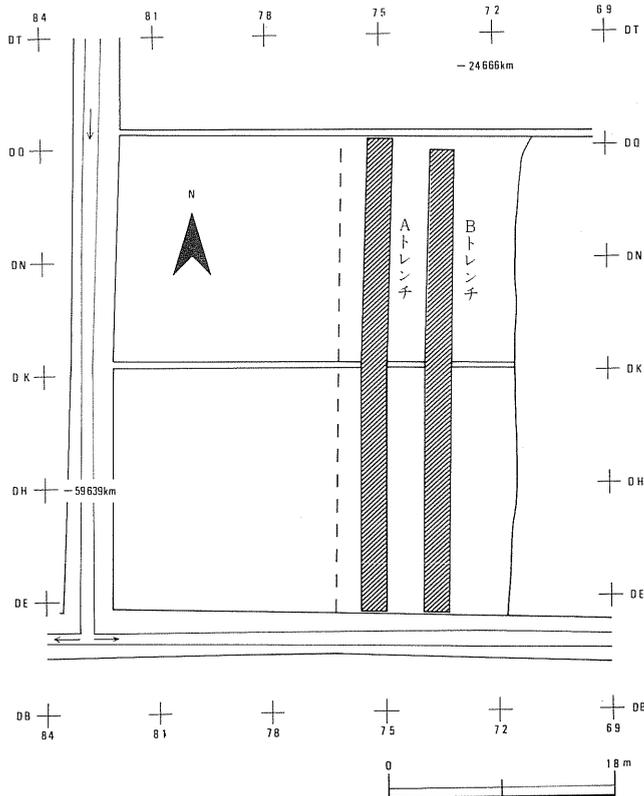
管理団体仙北町あて、昭和56年4月23日付仙北郡仙北町払田字館前91番地後藤繁氏より資材置場造成のための現状変更許可申請書が提出された。これに対し文化庁から申請者あて、昭和56年6月9日付、委保第4の356号にて「申請地は地下遺構の存在が予測される場所であり、事前発掘調査を行い、その結果を待って処理することが適当である。」



第6図 第40次発掘調査地形図

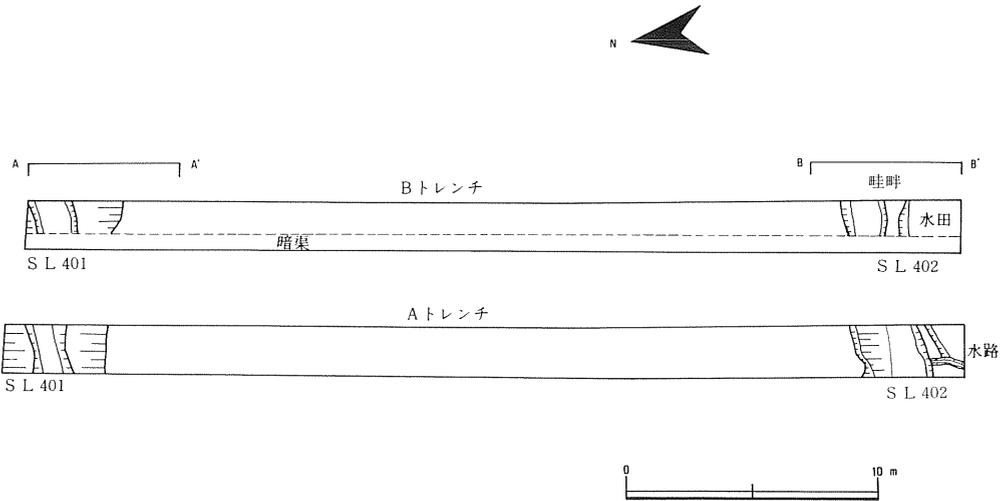
との通知があった。
このため、当事務所は「第40次発掘調査」として、申請地面積661㎡のうち150㎡を発掘した。

4月16日、T27から基準点の移動を開始するとともに、調査区西側に幅2m・長さ38mのAトレンチ、東側に幅2m・長さ37mのBトレンチを併列して設定した。17日、Bトレンチ西側に暗渠があることがわかった。両トレンチの北側には、



第7図 第40次発掘調査実測図

東西に走る河道跡が、南側には、東西に走る水路跡、畦畔水田跡を検出することができたが、トレンチの中央部においては遺構の検出はなかった。4月18日平板測量、土層図を作成し、4月23日埋戻しを完了した。

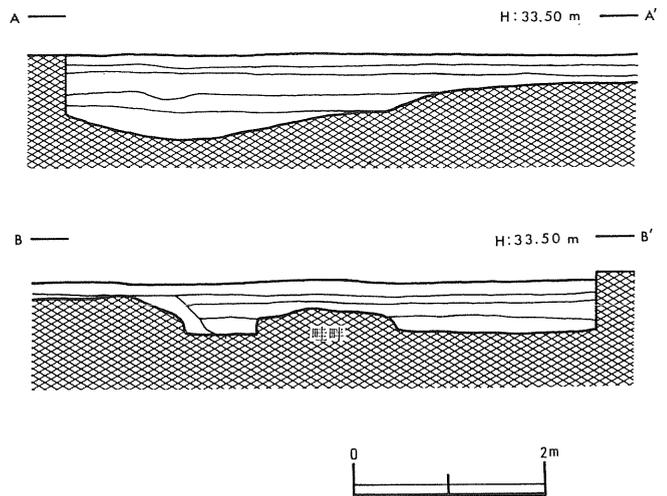


第8図 第40次発掘調査遺構配置図

2 発見遺構 (第8・9図, 図版2)

S L 401 河道跡 A・Bトレンチ北端にあり、東西に走る河道である。河道の南肩は地山(青灰色粘質土)である。河幅は推定約5m, 肩から河底面まで、中央部で約0.48m, 河底は東から西に向ってゆるやかな低い傾斜をもち、わずかに蛇行しているように見える。河道内には、灰黄褐色土・黒色土が堆積し、停水していたことがわかる。

S L 402 水路跡 A・Bトレンチの南端にあり、東西に走る水路跡である。水路の北肩は地山(青灰色粘質土)である。水路幅は約1.4~2.5m, 深さは約0.42mであり、東から西へ流



第9図 Bトレンチ東壁土層図

れていたであろう。水路と接するように、畦畔跡があり、S L 402 水路から水を引く細い水路も検出できた。

3 出土遺物

S L 402 水路と水田跡から近代の陶器片が出土、A・Bトレンチ内から土師器の細片が出土しているが、図示できるものはなかった。

4 小 結

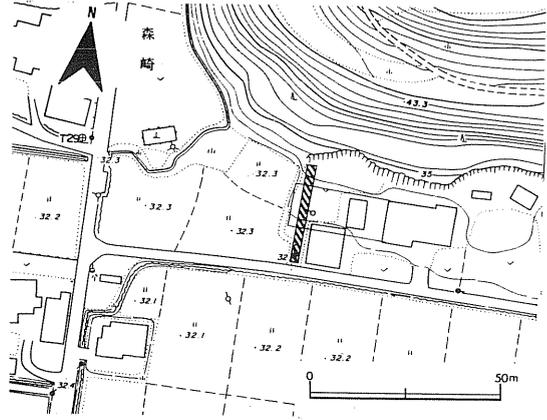
- (1) S L 401 河道跡は、古老の証言によれば、長森・真山の間から南流する1本の河道で、調査区の北側で西方向に変わるとのことである。
- (2) S L 402 水路跡および畦畔・水田跡は、近代の陶器片の出土などを考えると、明治39年10月から昭和9年までに実施された高梨村耕地整理事業以前の痕跡と見なすことができる。

VI 第41次発掘調査

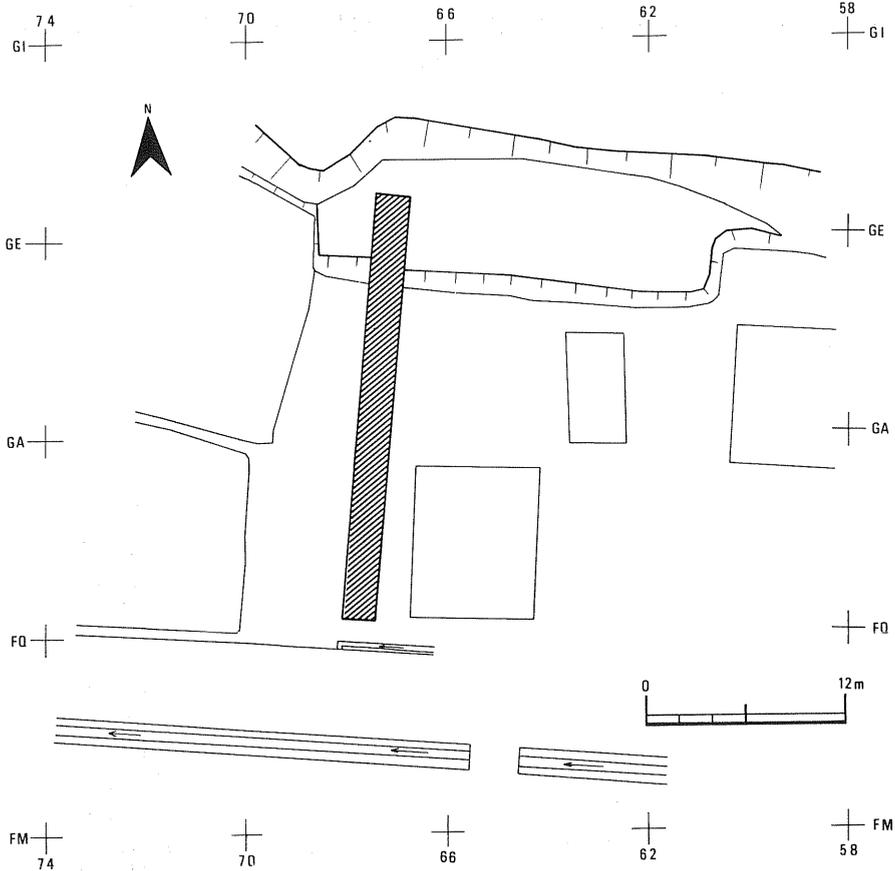
1 調査経過

(第10・11図, 図版3)

管理団体仙北町あて、昭和56年4月23日付仙北町払田字森崎143番地山崎精氏より、住宅増築のための現状変更許可申請書が提出されたので、秋田県教育委員会を経由し、昭和56年5月7日付秋教文収第125号にて文化庁へ進達された。



第10図 第41次発掘調査地形図



第11図 第41次発掘調査実測図

これに対し、文化庁から申請者あて、昭和56年6月9日付委
 保第4の357号にて「工事の着手は秋田県教育委員会による発
 掘調査の終了後とすること。発掘調査の結果重要な遺構等が発
 見された場合はその保存を図ること。その他、実施に当たって
 は秋田県教育委員会の指示を受けること」との通知があった。

当事務所は「第41次発掘調査」として申請地面積80㎡（建
 面積 111.273㎡）のうち、50㎡の発掘調査を実施した。

2 発見遺構 (第12図)

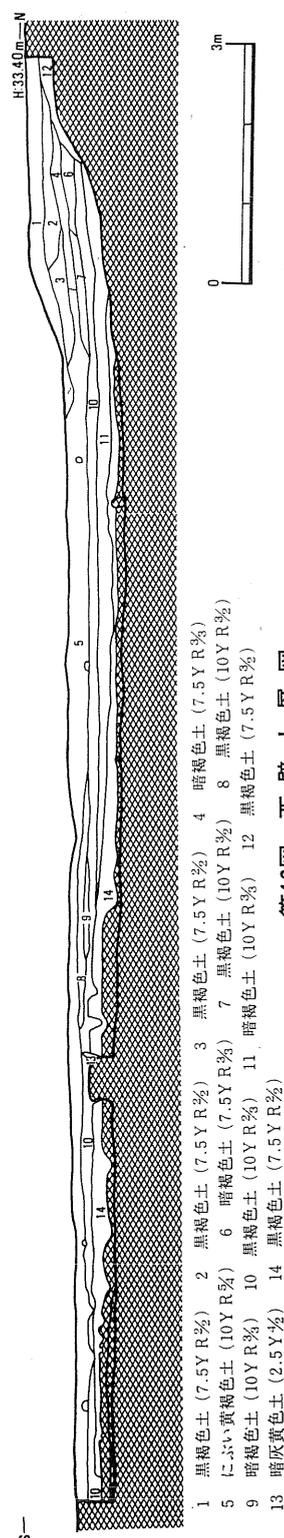
SD293 真山南裾で発掘区全域にわたって周堀（環濠）が
 検出された。周堀の南側は今回の調査では確認できなかった。
 周堀の上面幅・底面幅は計測できないが、深さ（現地面より）
 は約1mである。北側の削出し面は比較的しまりのある黒褐色
 土でゆるやかに立上る逆台形をなしているが、上部は削平をう
 け、底部でわずかに確認できる程度である。第1層にぶい黄褐
 色土、第2層黒褐色土、第3層暗褐色土、第4層黒褐色土、第
 5層灰白色土で、第1層は近年の盛土層、第2・3層は整地作
 業部分を除けば堆積状態はほぼ水平である。（第27次発掘調査
 参照）

3 出土遺物

遺物は9点出土した。石製品は砥石1点で3面使用されてい
 る。木製品は箸1点と下駄1点、他用途不明5点の計7点である
 る。竹製品は1点で用途不明である。

4 小 結

本調査では、周堀の幅を確認することができず、第27次発掘
 調査において検出された周堀南側の土塁（SF294）も検出さ
 れなかったため、その規模構造等を明確にすることができな



第12図 西壁土層図

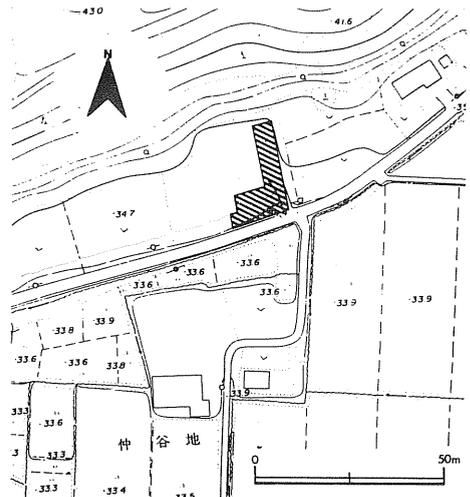
った。しかしSD 293 堆積層中において植物遺体を含む層や、下部の砂粒を含む層がほぼ水平であることから、周堀の水は常時流れていたものではなかったと考えられ真山の外堀としての防御的機能性格をもつものであったろう。

真山南麓地区は、第16・26・27次発掘調査と本調査と合わせて4地区の調査を実施した。真山は中世城館でもあり、外側の周堀の位置をほぼ確認できたことになる。同地区の東西に走る道路は、周堀外側の土塁を利用したものであることも実証されたことになる。

VII 第42次発掘調査

1 調査経過

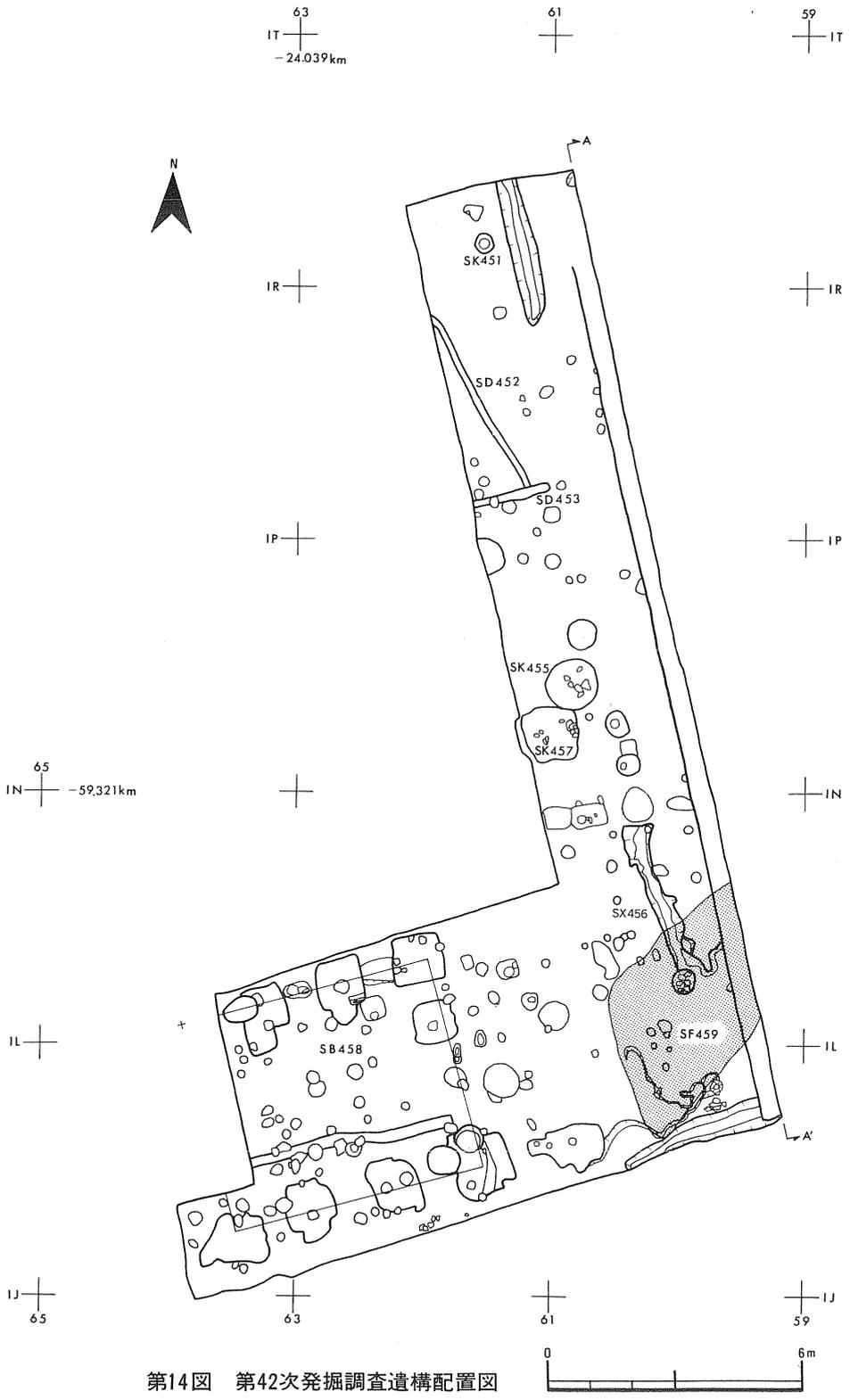
第42次発掘調査は、仙北町払田字長森12の1番地のうち約155㎡を対象とした。当地域は第13次発掘調査地区から東へ100m程のところに位置し、想定内郭線長森丘陵の南麓の一部にあたる。現況は宅地跡でやや北側から南側へ傾斜する平坦地である。当遺跡の内郭線については、第3次発掘調査で長森丘陵端の東・南・西側で築地状遺構が、第9次・第13次発掘調査で築地がめぐることが実証されている。しかしながら、調査範囲が狭く、とくに長森丘陵南側については、推定の範囲を出



第13図 第42次発掘調査地形図

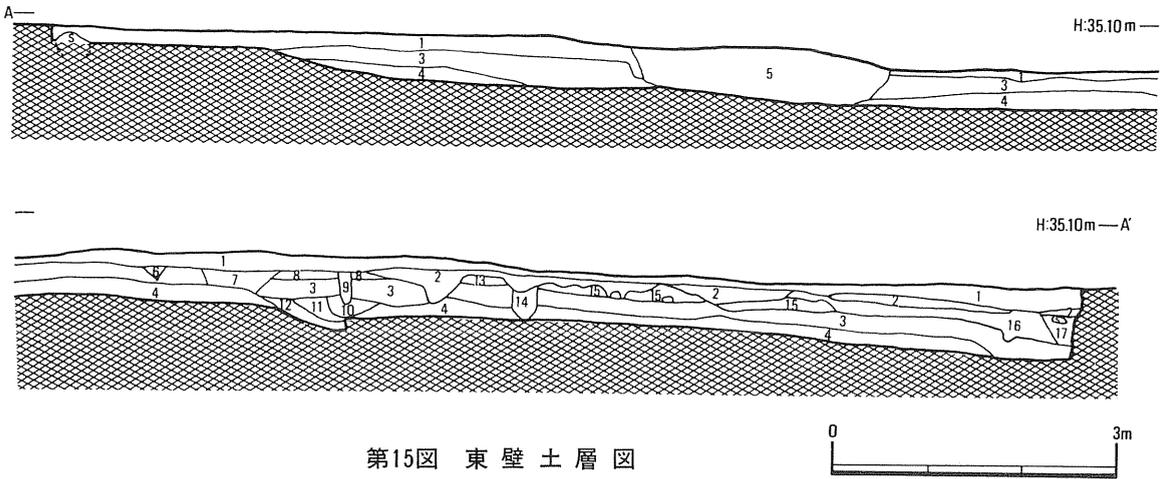
ていないのが実態である。このため第2次5か年計画の基本計画の一つである内郭線の位置について基礎調査を進めることになった。本調査は、①内郭線の位置を確定すること、②築地の実態と構造の把握および重複の有無、③内郭内の主要建物の存在などを目的に実施した。

9月19日～22日まで、T22から調査区に基準点の移動を行ない、遣り方基準杭を埋設し、調査区の平板測量を行なった。9月24日テント・発掘器材の搬入後、調査区北端部から表土の除去を開始し、翌25日には土層観察と排水を行なうため、調査区東端に南北トレンチを入れた。それによると、第1層は砂利・礫などが多く混入する近代の盛土層であり、第2層は掘り返された攪乱層であったが、第3層は自然堆積土であり、この上面で築地痕跡を確認した。この観察結果をもとに26日から調査区の全域を第3層上面まで掘り下げることにした。9月29日グリット杭を埋設した。9月30日掘り下げが進むなかでSF459築地を検出したが、築地本体が破壊されているため築地範囲がはっきりしない。このころになると、土師器・須恵器などの出土も多くなってきた。10月1日には、SK451・SD452・SD453などと共に多くの柱穴を検出した。同日調査区東端の基本土層図を作成した。10月5日掘り下げ作業もほぼ終えて、調査区の精査を開始したところ、調査区の中央でSK455・SK457と築地を切っているSX456を検出した。また、調査区の南側に位置する築地遺構跡の範囲をつかむことができた。西側ではSB458建物を確認した。10月8日は遺跡の全景と近景の写真撮影を行なった。10月12日から平面実測のため遣り方を設定し、10月15日～30日まで、各遺構・その他の細部実測及び写真



第14図 第42次発掘調査遺構配置図

撮影を行なった。この間10月16日～21日まで、SB 458 の規模確認のため建物跡北東隅柱の北側延長上にトレンチを入れ、南側柱列の西側の拡張をし、さらに西側奥にトレンチを入れた。その結果、北側と西側トレンチには柱穴跡は検出されなかった。しかし、西側拡張部では柱穴跡を1個確認できた。なお、北側柱列の西側はコンクリートの施設が残っていて掘り下げることができなかった。以上のことから、SB 458 建物は東西3間×南北1間の規模と考えられる。11月1日は、主要遺構の補足調査を行ない、2日から埋戻し作業を開始し、7日にテント・器材等を搬出し、すべての発掘作業を終了した。



第15図 東壁土層図

2 発見遺構

本調査においては、築地1・建物1・土壌3・溝2・その他1の遺構を発見した。

調査区は宅地跡であったため、表土中には砂利が混入し固くしまっているところもある。第1層は砂利・礫などが混入する近代の盛土層で、第2層は掘り返しを受けている攪乱層である。第3層・第4層は自然堆積層である。なお、SF 459 築地は第3層直上において確認することができた。調査区内の北側と南側の比高差は0.57mで南側へ緩傾斜している。以下、遺構の説明を行なう。

(1) SF 459 築地跡 (第16図, 図版5)

SF 459 築地は調査区の南東側に位置し、遺存状態は良好ではない。東壁土層の観察によれば、第3層黒色土の上面を整地する基礎地業を行ない、その上に基底幅約3.20m、厚さ約0.10m～0.20mの築地本体を築いている。築地本体の積土は極暗褐色土・明褐色土・黒褐色土が互層に版築されている。平面における確認範囲は長軸4.05m、短軸3.28mに及びかなり固くしまっている黒褐色土である。

(2) SB 458 建物跡

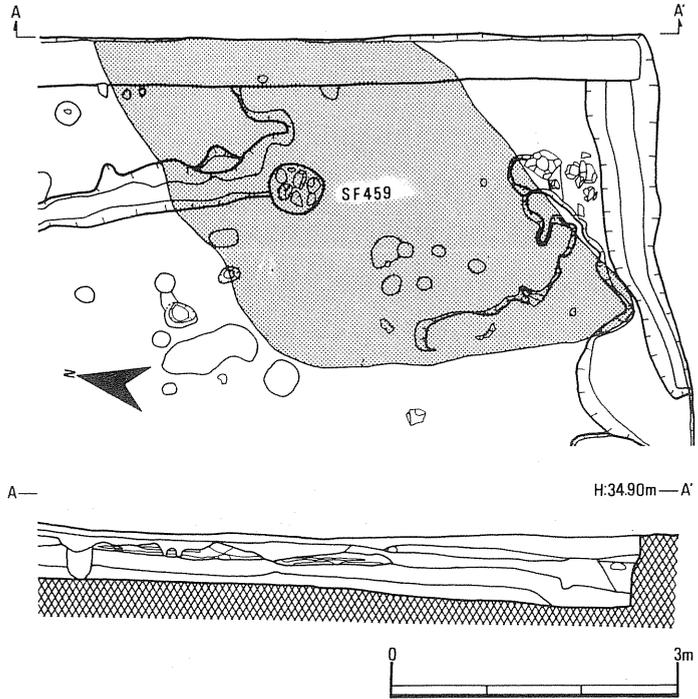
(第14図, 図版6・7)

調査区の南西側には、赤褐色土を呈し坪地業と思われる平面プランを確認した。平面での土色観察では重複を確認できず、北東隅柱の立割りを行なった(第17図)。この結果、これらの地業痕跡は掘立柱建物1棟の抜き取り痕跡であることがわかった。今回発見した柱穴全体の立割りを実施していないので正確を記すが、次のような建物跡に復原できる。

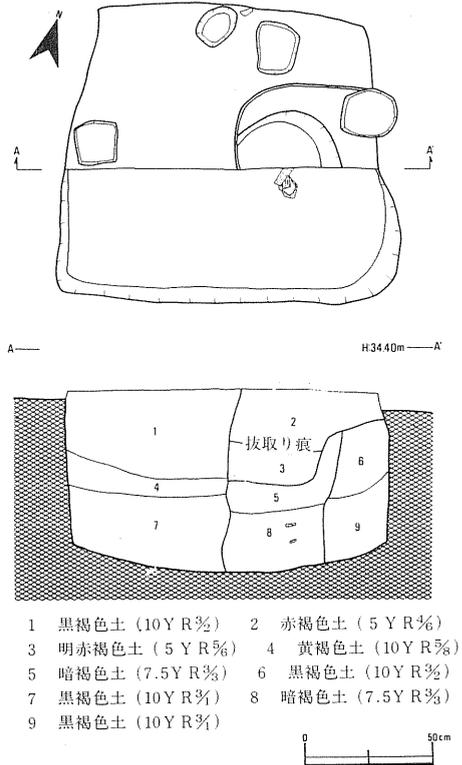
東西棟桁行3間×梁行1間の掘立柱建物跡であろう。柱間平均距離は桁行6m(東から2.1+2.1+1.8m)、梁行5.1mであり、計画尺による桁行20尺(東から7+7+6尺)、梁行17尺であろう。建物方位は梁行でN15°Wになる。北東隅柱の柱掘形は長軸1.27m、短軸1.19mのほぼ方形を呈し、深さ0.89mで柱痕は直径0.37mである。埋土は黒褐色土が主で、柱痕は暗褐色土である。また、柱痕の抜き取り跡が認められている。埋土は、赤褐色土・明赤褐色土である。

(3) 土 壌 跡

SK 451 土 壌 遺跡の北端部に位置する。平面は楕円形、断面形はほぼ逆台形を呈し、東西0.44m、南北0.50m、深さ0.16mである。



第16図 SF 459 築地実測図



- 1 黒褐色土 (10Y R%)
- 2 赤褐色土 (5Y R%)
- 3 明赤褐色土 (5Y R%)
- 4 黄褐色土 (10Y R%)
- 5 暗褐色土 (7.5Y R%)
- 6 黒褐色土 (10Y R%)
- 7 黒褐色土 (10Y R%)
- 8 暗褐色土 (7.5Y R%)
- 9 黒褐色土 (10Y R%)

第17図 SB 458-1 建物実測図

壁面は急傾斜で立ち上り、底面はほぼ平坦である。堆積土第1層には破損している鉄製品と木片、扁平な自然石が1個と礫などが混入している。

S K 455 土壙 (第18図, 図版8) 遺跡中央部に位置し, S K 457 土壙に南辺を切られている。平面は円形, 断面形は逆台形を呈し, 直径1.22m, 深さ0.19mである。壁面は垂直に近く立ち上り, 底面は平坦である。堆積土は第1層で土器片・礫が混入している。

S K 457 土壙 (第18図, 図版8) S K 455 土壙を切って南側に位置する。平面は不整形, 断面形は逆台形を呈し, 東西1.39m, 南北1.38m, 深さ0.56~0.64mである。壁面は急傾斜で立ち

上り, 底面は若干凹凸である。堆積土第1・2層には礫が多く混入しているが, 第3層ではさほど礫は混入していない。

(4) 溝跡遺構

S D 452溝跡 S D 453 溝の北側に位置し, 西壁から南東へ走る溝で, 南東端を S D 453 溝に切られており, ここまでの長さは4.53mである。上面幅は0.16~0.18m, 底面幅は0.08~0.12m, 深さ0.3~0.32mである。埋土は極暗褐色土である。

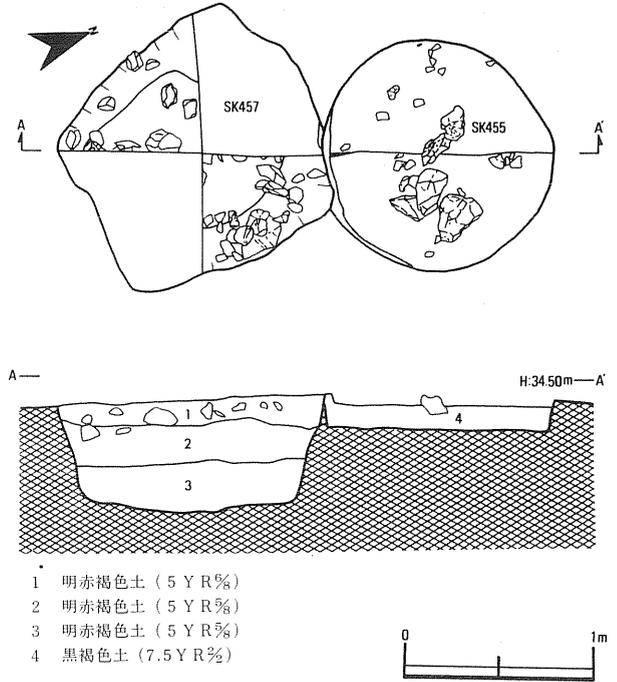
S D 453 溝跡 西壁から東へ長さ1.88mで, S D 452 溝を切っている溝である。上面幅は0.19~0.25m, 底面幅は0.12~0.21m, 深さ0.17mである。埋土は黒褐色土である。

(5) その他の遺構

S X 456 S K 457 土壙の南東側に位置し, S F 459 築地跡を切っている。南北の長さ2.45m, 上面幅0.27~0.72m, 底面幅0.08~0.33m, 深さ0.46mの溝状を呈する。埋土は暗褐色土である。

3 出土遺物

本調査において出土した遺物の多くは, 土師器・須恵器であるが, ほかに瓦・陶器・鉄製品



第18図 S K 455・457 土壙実測図

などが出土している。以下、主な遺構・層序の遺物について述べる。

(1) 建物跡出土遺物

S B 458 建物跡の柱抜き取り穴から土師器が1点出土したが小破片のため図示できなかった。

(2) 土壌跡出土遺物

S K 451 土壌 堆積土の第1層から鉄製品と木製品が出土したが、両遺物ともかなり破損しており、詳細不明である。

S K 455 土壌 (第19図) 須恵器 杯 (1・2) は内外面ともにロクロナデ調整であるが、底面切り離しは1が回転ヘラ切りで、2が回転糸切りでありともに再調整はない。

土師器 杯 (3) は内外面ともにロクロナデ調整で、底面切り離しは回転糸切りである。この他にも土師器・須恵器・縄文土器の小破片が計27点出土している。

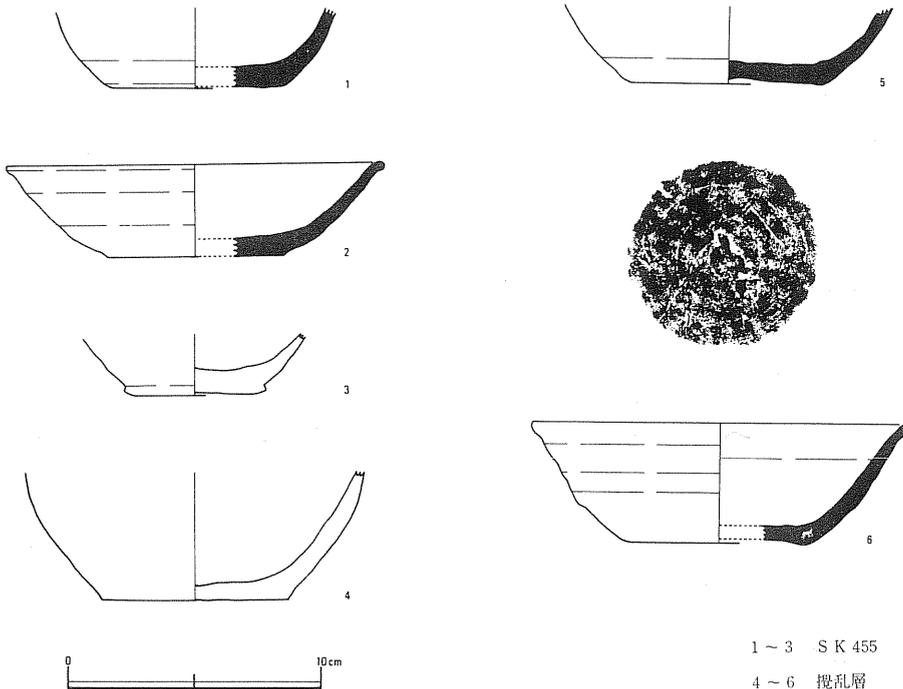
S K 457 土壌 土師器や陶器などの小破片が出土した。

(3) その他の遺構出土遺物

S X 456 から土師器・須恵器などの破片が9点出土した。

(4) 各層出土遺物

第1層からの遺物は少なく、土師器・須恵器・近代の陶器などの破片が出土している。第2層では土師器・須恵器の小破片が若干出土している。第3層は遺構確認面で、土師器・須恵器



第19図 出土土器

・瓦・縄文土器・陶器など多く出土したが、大部分が小破片で図示できるものはなかった。また、木の根による攪乱をうけている第5層からは、内外面ともにロクロナデ調整で、底面切り離しは回転糸切りである土師器の杯（4）および内外面ともにロクロナデ調整で、底面切り離しが回転ヘラ切り（5）と回転糸切り（6）である須恵器の杯が出土している。

4 小 結

(1) 内郭線の位置について

当遺跡の内郭線の位置については、第3・9・13次発掘調査において、長森丘陵の東・南・西端を走ることが実証されている。しかし、内郭線の全体からみれば点の確認にすぎなかった。本調査では、長森丘陵南端を東西に走る町道の北側の垣根となっている地点に発見、もう一つ確認点を増し、想定内郭線の精度をあげることができた。

(2) 築地について

本調査の築地版築土層は、南北幅約3.2 m・厚さ 0.1～0.2 mを確認したにすぎない。土層観察によれば、第3層上面を整地して築成しているようである。検出した版築土層は、築地本体であると思われるが、本体の基礎地業としての盛土整地層の一部である可能性もある。また当遺跡の内郭線は2時期の所産であるが、どの時期に伴うかについても確認することができなかった。築地は削平が激しく、4.05×3.28mの範囲にすぎなかったが、さらに東西方向へ延びていくことは確実である。

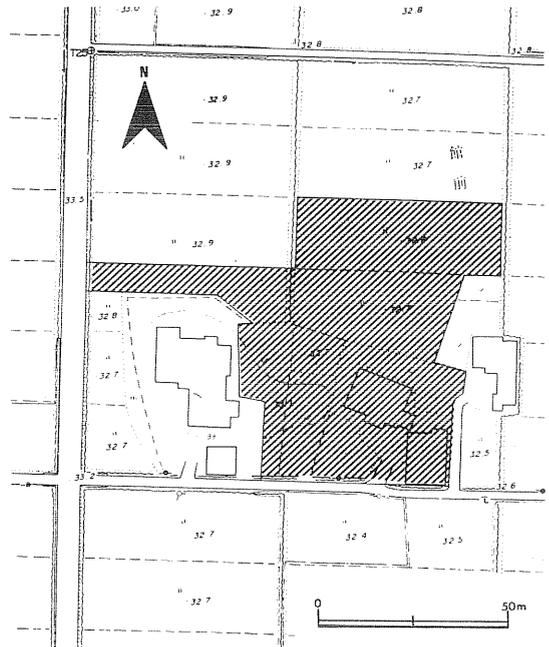
(3) SB 458 建物について

調査地区内の攪乱が著しく、近代の遺構・SB 458 建物・SF 459 築地などの遺構検出面がほぼ同一レベルであるため、各遺構の造営年代の決め手に欠ける結果となった。建物SB 458 柱抜き取り痕跡内から、土師器の破片1点を出土したが、時代決定はできなかった。SB 458 は建物構造から復原すれば、古代の櫓と呼称している建物に近いといえよう。また、SB 458 建物が、SF 459 築地を跨ぐのかについては検証できなかった。いずれにしても、近代以降の削平が著しく、全柱穴の立割りができなかったため、詳細な観察ができなかったので、近い将来再調査を行って全貌を明らかにしたい。

VIII 第43次発掘調査

1 調査経過

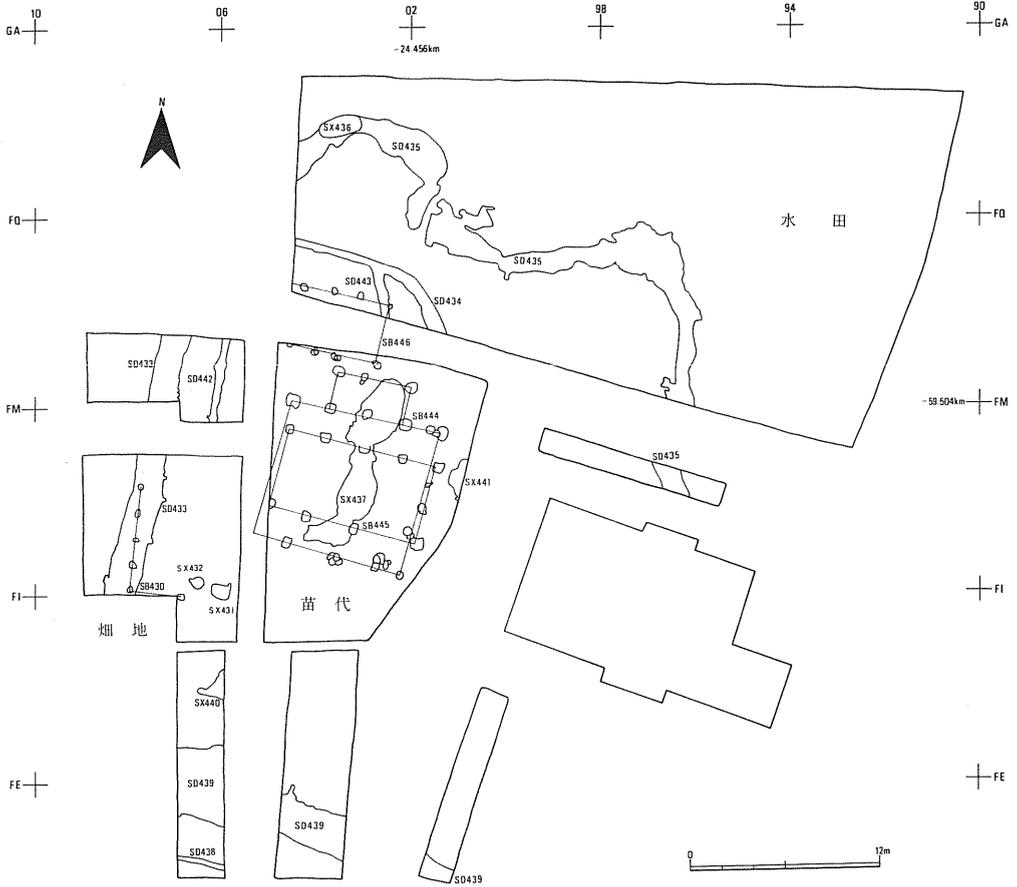
第43次発掘調査は仙北町払田字館前23・24-1・26-1・27・49-1～2番地を対象として実施した。この地区は外郭南部地区で、長森丘陵の西端に近い内・外郭間のほぼ中央部にあたり、昨年度の第32次発掘調査地区に隣接する西側である。現況は水田・苗代・畑地となっていて、熊谷家住宅と畑地がわずかな微高地を形成している。標高で見ると水田・苗代と宅地・畑の比高差が明瞭である。当遺跡では内外郭間における古代の遺構は、第32次発掘調査のSB 320 建物跡、第6次発掘調査のSI 27 竪穴住居跡が確認されているのにすぎない。本調査は内外郭間



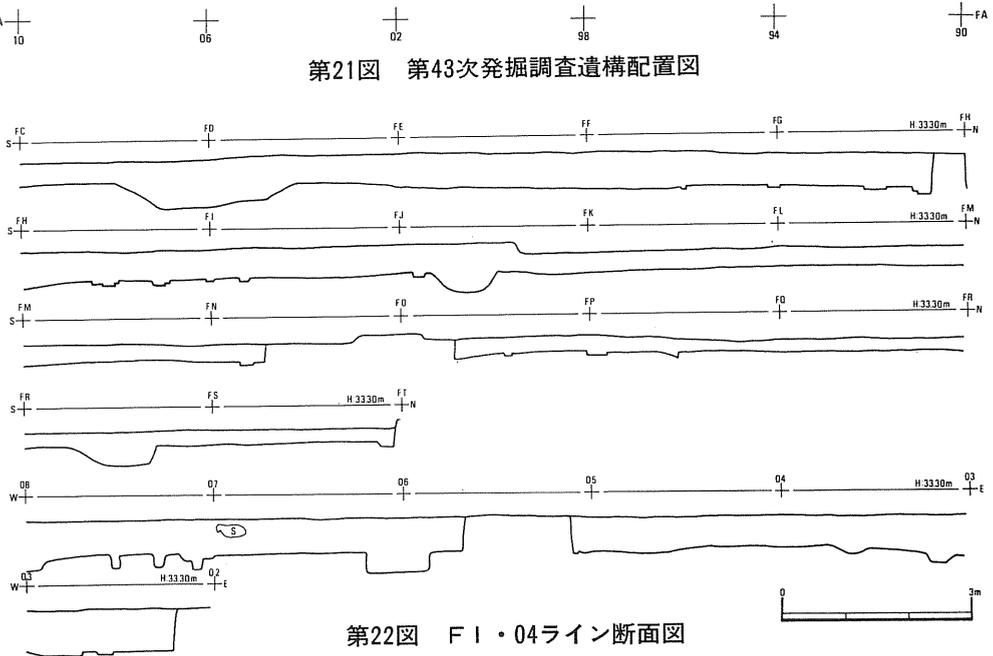
第20図 第43次発掘調査地形図

に存在すると思われる官衙ブロックの単位をおさえることを目的に実施した。

5月14日～28日間、測量基準点T24・T25から原点移動を行い、遣り方基準杭の埋設とともに平板測量をおこなった。5月26日ベルトコンベアーを搬入したが、水田の排水が悪く、地盤軟弱なため発掘開始を延期。6月3日第32次発掘調査地区の西側、本調査区の東端から西方向に取りかかった。掘り下げ作業は水田の耕作土と床土で約0.2～0.25mで青灰色粘質土（地山）に達する。FL 93からFT 93まで、93ラインの基本土層図を作成する。6月5日水田部分の耕作土、床土剥ぎが進行するなかで、SD 435 溝を検出したが、漠然とした広がりしかおさえられない。水田の南西端では、SD 434 溝・SD 443 溝とSB 446 建物跡の一部分が見えてきた。SD 434 とSB 446 との切合関係から建物跡の方が新しいことがわかる。また、SD 443 とSB 446 は、相対する空間的位置にあり、同一期の可能性が出てきた。FJ 03からFT 03まで、03ラインの基本土層図を作成する。6月8日苗代・畑地部分にグリット杭を埋設する。6月17日秋田県文化財保護審議委員現場視察。熊谷家住宅と高柳家住宅に囲まれた畑地部分の表土剥ぎを開始したところ、近代の盛土整地土が厚く堆積していることが判明してきた。畑といって



第21図 第43次発掘調査遺構配置図



第22図 F1・04ライン断面図

も砂利が多く、盛土整地層中にS B 430建物の大きな礎石が頭をのぞかせていた。

調査区中央にS B 444建物跡・S B 445建物跡の全体が明確になる。S B 444には北側に東西2間×南北1間の付属建物を取り付くらしい。これらの建物群の柱穴を観察すれば、掘形が一辺約0.5～0.8mの方形ないし長方形、深さ約0.4～0.5m、柱の直径約0.2～0.3m、礎板を持つことがわかった。これら建物群の建立年代はいつごろなのだろうかはっきりしないので、柱穴を徹底的に立割ることにする。建物の東側には近・現代の水屋の痕跡(S X 441)があり、建物に伴うものだろうか。S D 443はS X 441の引水路であると判明した。S X 441からは近代の陶磁器が廃棄されたように出土している。

S D 433・S D 442としたのは水路跡であり、外側には土留め護岸施設の杭や杭列跡が並んでいる。これらの杭列は冬囲い用の長木杭列と理解する考えも出された。S D 442の痕跡はきわめて浅くはっきりしないが、S D 433は堅固な施設である。S D 433の方向と建物群の方向とは若干の差はあるが、一定の規制を受けた位置にあるのではないとも考えられる。このように建物群の造営年代が近代である可能性が出てきた。

7月23日から実測のため遣り方を設定し、7月25日から8月17日まで平面実測およびレベルの測定を行った。8月18日～26日まで全体の写真撮影を行い、その後細部写真の撮影、主要遺構の補足調査、土層図作成などを行った。掘立柱建物跡の柱穴からは出土遺物の共伴はなく、時期決定がむずかしくなった。8月28日から水田部分に農業暗渠排水路を掘り下げビニールハウス、板材敷詰作業を進めた。この間高柳家住宅の北側にAトレンチ、南側にBトレンチを完掘した。9月10日までに精査完了、11日から埋戻し作業を開始し、18日にはすべての作業を終了した。

2 発見遺構 (第21図)

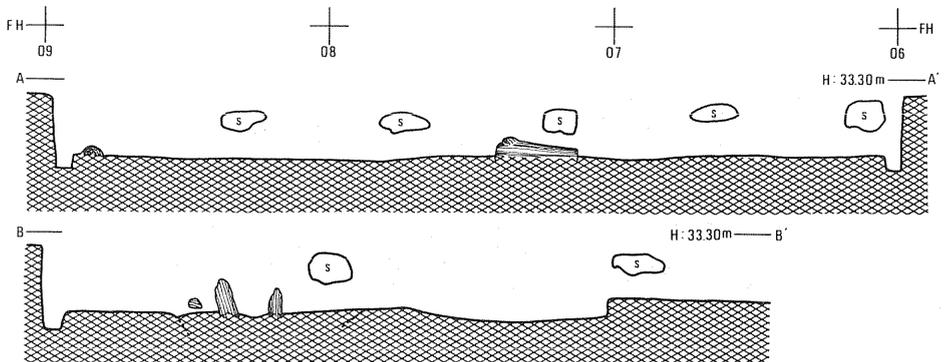
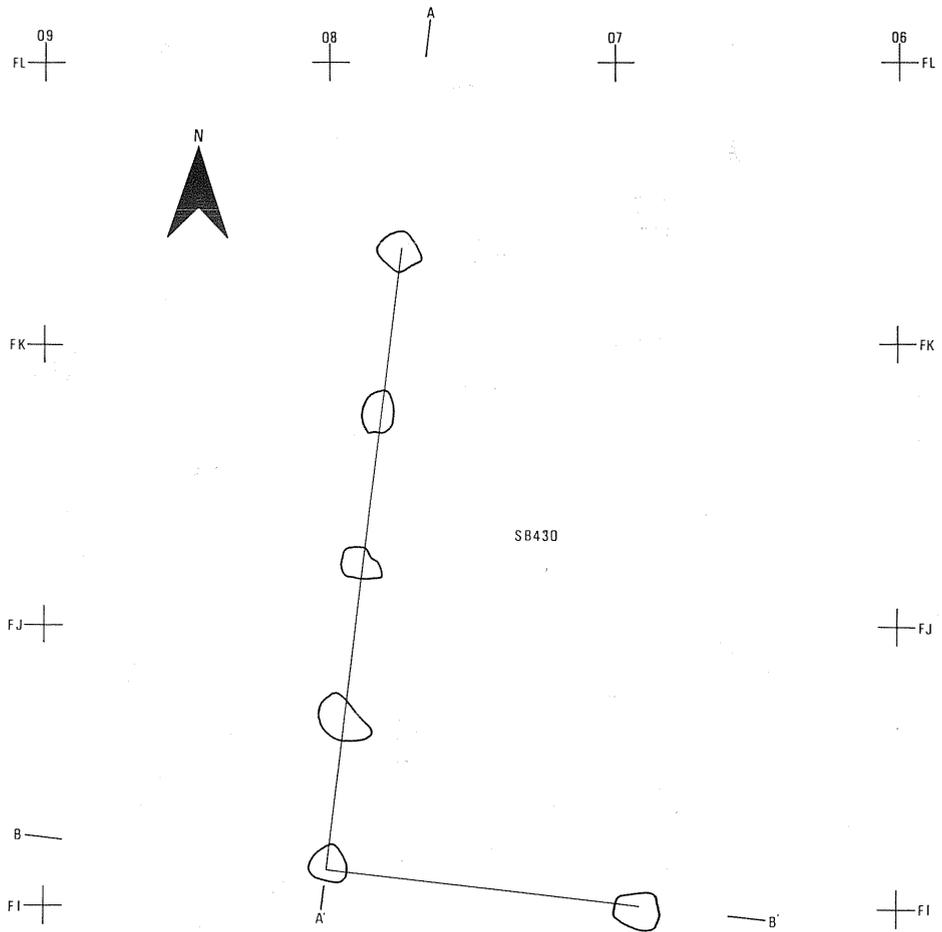
本調査をいいて、建物4・溝7・その他6を発見した。調査区は水田と畑地で、水田部分は表土が約20cmと浅く、畑地は耕作等による攪乱が著しい。水田と畑地の表土の比高差は約20cmである(第22図)。以下遺構の説明をおこなう。

(1) 建物跡

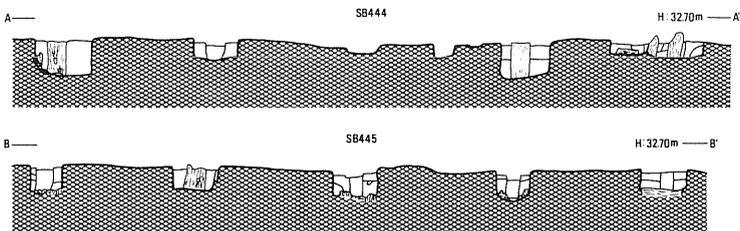
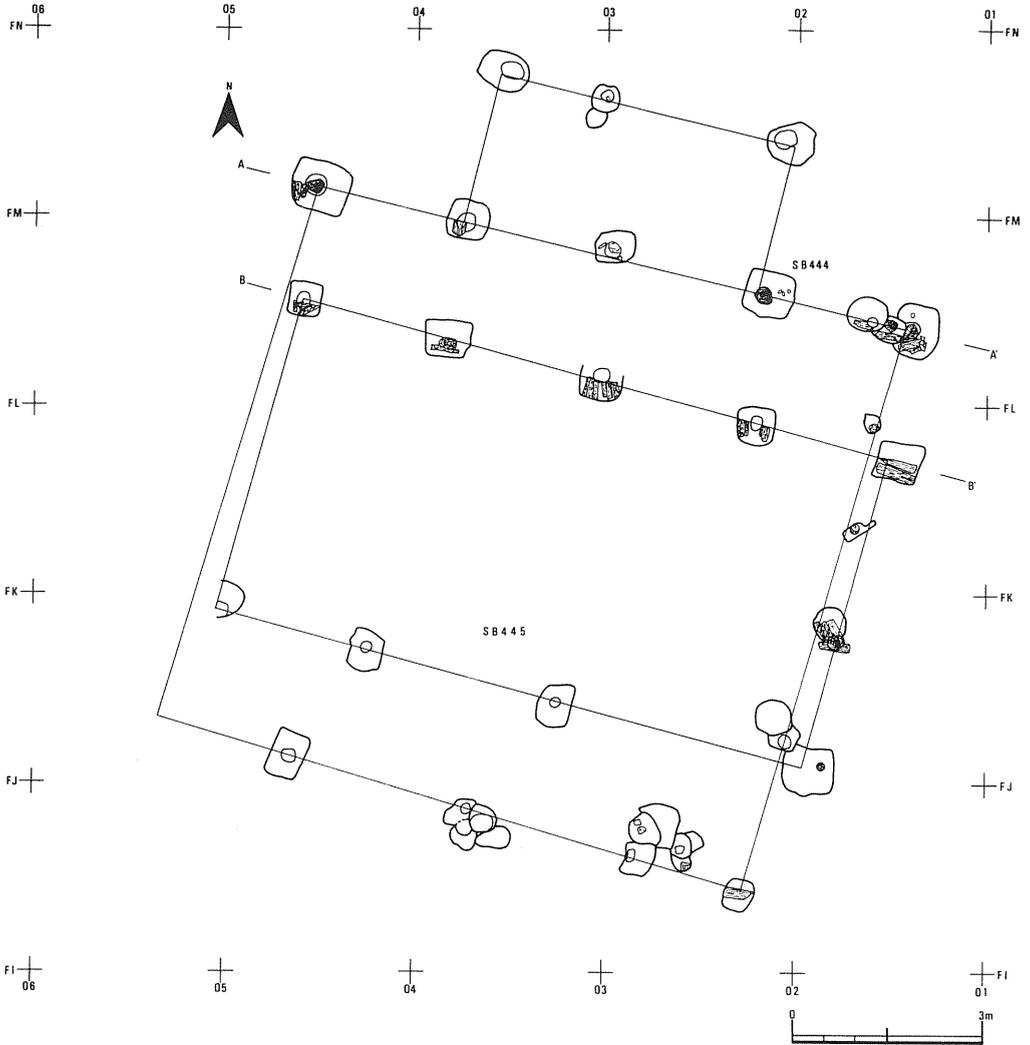
畑地北西部に礎石建物跡1棟(S B 430)、苗代部において掘立柱建物跡3棟(S B 444・445・446)を発見した。

S B 430 建物跡 (第23図, 図版9)

近代盛土整地層中より南北4間×東西1間の礎石6個に伴なう建物跡である。礎石は河原石である。礎石は南西隅部しか現存しておらず、建物の規模をつかめなかったが、その後の調査



第23図 S B 430 建物実測図



第24图 SB 444・SB 445 建物実測图

で昭和5年10月測量の地形図中に記載されている家屋と同一であると判断した。柱間平均距離は現状で南北6.63m（北から1.71+1.62+1.71+1.59m）東西3.33mであり、昭和5年当時の地形図による柱間距離9×9mも加味すると、計画尺による桁行30尺（6尺等間）、梁行30尺（6尺等間）と復原できるようである。礎石上面レベルの差は12cmである。建物方位は梁行でN8°Eである。

S B 444 建物跡 （第24図，図版10）

東西棟桁行4間×梁行3間を確認した掘立柱建物跡である。北側中央に東西棟桁行2間×梁行1間の張り出し部分がある。母屋の柱間平均距離は桁行9.6m（東から2.4+2.46+2.28+2.46m）、梁行9.1m（北から3.3+3.28+2.52m）であり、計画尺による桁行32尺（8尺等間）、梁行30尺（北から11+11+8尺）である。張り出し部分の柱間平均距離は桁行4.74m（東から2.46+2.28m）、梁行2.5mであり、計画尺による桁行16尺（8尺等間）、梁行8尺である。1尺は平均30.0cmである。建物方向は梁行でN12°30'Eである。柱掘形は、長軸0.51～0.92m、短軸0.45～0.7mの隅丸方形を呈するのが主体で、他は後世の攪乱によって明確ではない。深さは0.15～0.58mで、柱痕は直径0.24～0.3mである。埋土は黒褐色土が主で柱痕は黒色土を主とする地山シルト質土（緑灰色）との混合土である。掘形底面において長さ約60cm、幅約9cm、厚さ約6cmの礎板が確認された。S B 444 - 11 柱掘形はS B 445 - 8 柱掘形の一部を切っている。

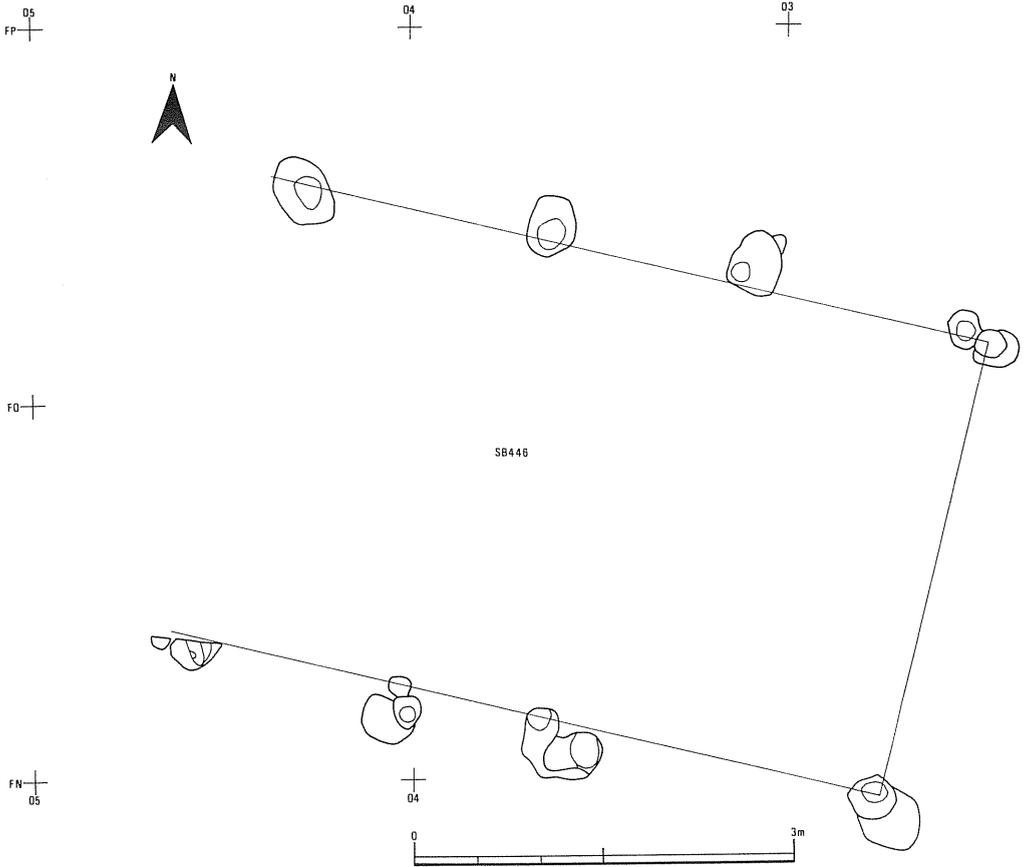
S B 445 建物跡 （第24図，図版10・11）

東西棟桁行3間×梁行2間の掘立柱建物跡である。柱間平均距離は桁行9.56m（東から2.17+2.54+2.45+2.40m）、梁行5.08m（北から3+2.08m）であり、計画尺による桁行32尺（8尺等間）、梁行17尺（北から10+7尺）である。1尺は平均30.0cmである。建物方位は梁行でN13°Eである。柱掘形は長軸0.48～0.85m、短軸0.45～0.75mの隅丸方形を呈するものが主体で、直径0.4～0.5mの不整円形を呈するものもある。深さは0.35～0.5mで柱痕は0.21～0.3mである。埋土は黒褐色土と地山シルト質土（緑灰色）の混合土である。掘形底面において長さ約45cm、幅約9cm、厚さ約6cmの礎板が確認された。S B 445 - 8 柱掘形はS B 444 - 11 柱掘形によって柱掘形の一部が切られている。

S B 446 建物跡 （第25図，図版11）

西側を現用水路のため削られている可能性を残す掘立柱建物跡で、現状では東西棟桁行3間×梁行1間を確認できる。柱間平均距離は桁行5.49m（東から2.04+1.53+1.92m）、梁行3.72mであり、計画尺は桁行18尺（東から7+5+6尺）、梁行12尺（6尺等間）であるが、西側が水路によって削られているため桁行がさらに延びるであろう。1尺は平均30.8cmである。建物方位は梁行でN14°Eである。柱掘形は直径0.3～0.6mの円形ないしは不整円形を呈してい

る。深さは0.05～0.12 mで、柱痕は直径0.15～0.25 mである。埋土は黒褐色土を主とし、暗褐色土・暗オリーブ灰色シルト質土が混入している。



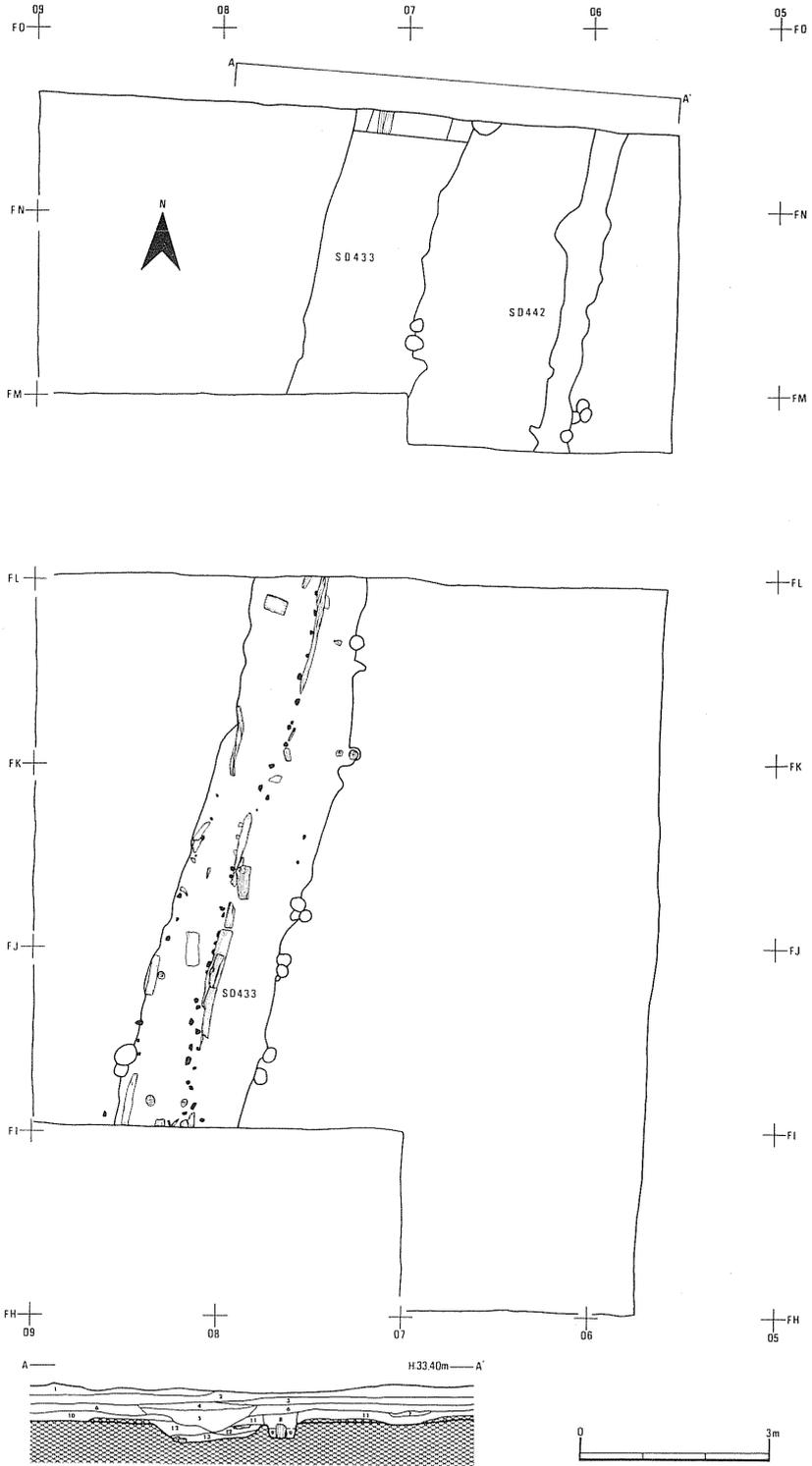
第25図 SB 446 建物実測図

(2) 溝跡遺構

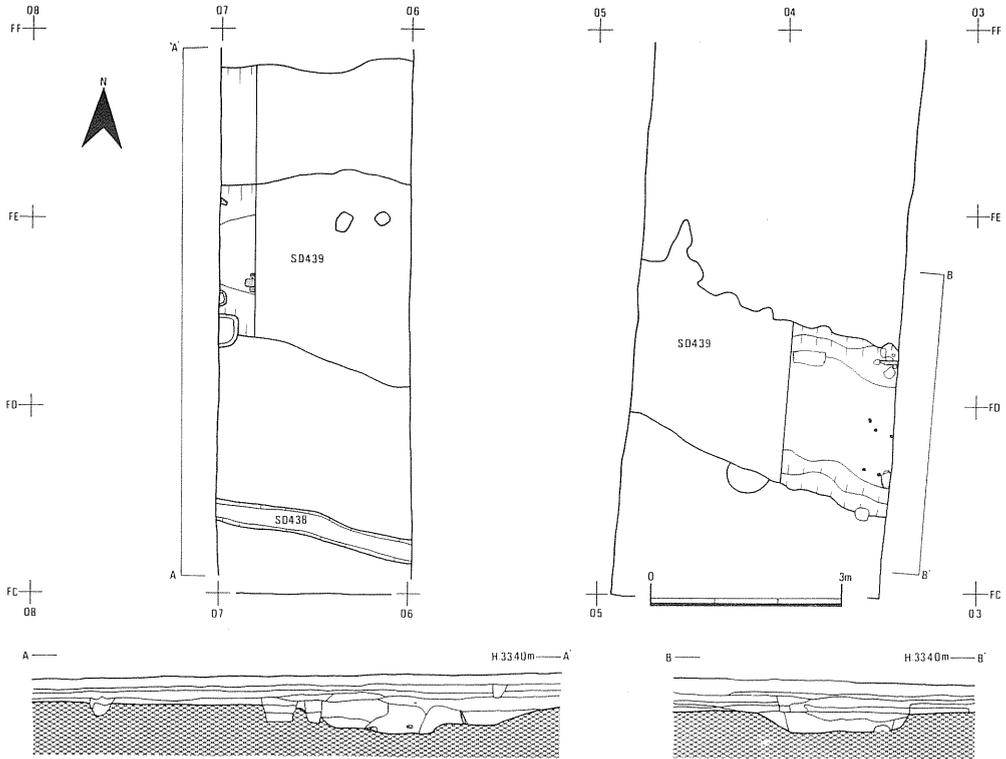
調査区北部において3条 (SD 434・435・443)、西部において2条 (SD 433・442)、南部において2条 (SD 438・439) の計7条を発見した。以下順に説明する。

SD 434 溝跡 (図版13)

SB 446 建物の北側からSB 444・445建物の東側へ弧を描いて走る溝で、SX 441に接続する。溝は上面幅0.67～1.05m、底面幅0.22～0.36m、深さ0.1mである。溝内には直径5～6cmの杭が列をなしており、SX 441 (水屋跡) に水を引くための堅固に補強された溝であったと考えられる。覆土は褐色土に地山シルト質土 (緑灰色) が混入している。



第26图 SD433・SD442溝実測図



第27図 SD438・SD439 溝実測図

SD 435 溝跡

SD 434 の北側から高柳氏住宅東側へ弧を描きながら蛇行して走る溝である。溝上面幅は0.72~3.38m、深さ0.07mである。覆土は褐色土である。

SD 443 溝跡 (図版13)

SD 434 溝と重複して東にふくらみながら南北に走る溝である。溝は上面幅0.48~0.75m、底面幅0.14~0.40m、深さ0.12mである。覆土は、褐色土に地山シルト質土(緑灰色)が混入している。SB 446-1柱、SD 434 溝に切られている。

SD 433 溝跡 (第26図, 図版12)

SB 444・445 建物の西側に位置し南北に走る溝である。溝は上面幅1.64~2.15m、底面幅1.2~1.5m深さ、0.35mである。覆土は黒褐色土が中心で溝内には直径5~10cmの杭が平行しており、長短の板材で組まれている。これは護岸工事がなされていたと考えられる。また溝に平行してかなりのピットを確認できたが、性格は不明である。建物SB 430 礎石上面とのレベル差は約0.6mである。

S D 442 溝跡 (第26図, 図版12)

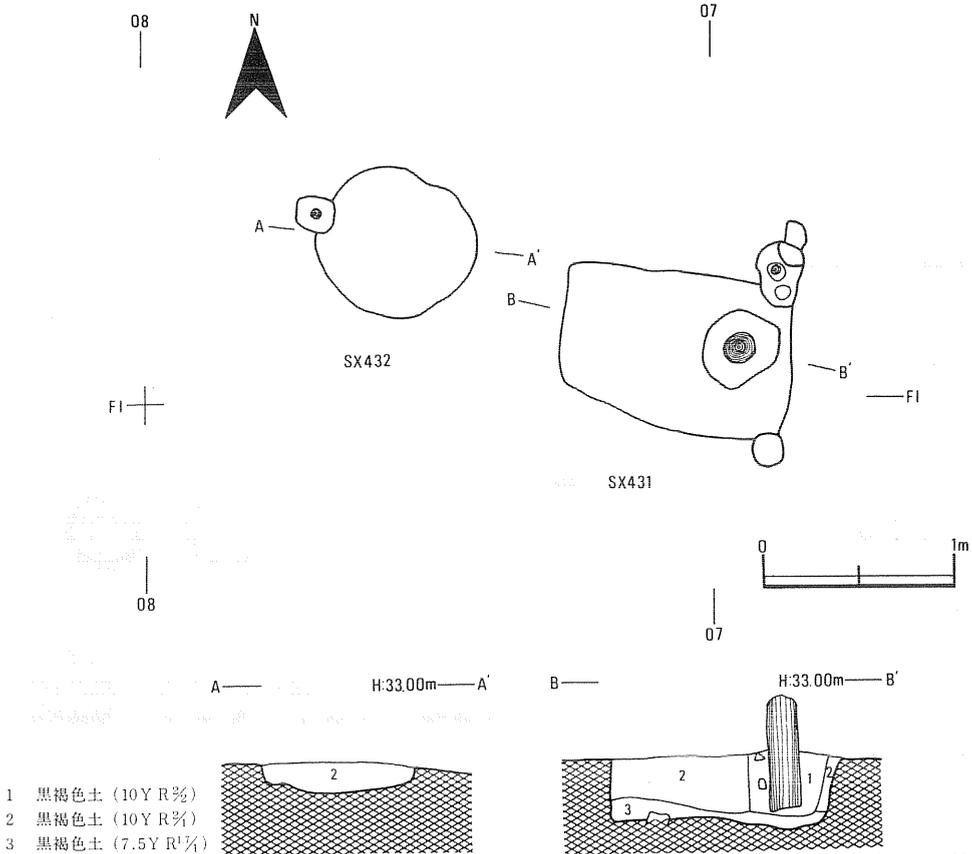
S D 433 と平行して南北に走る上面幅約0.45m, 深さ約0.08mの溝である。覆土は黒褐色土である。

S D 438 溝跡 (第27図, 図版13)

S D 439 の南側を東西に走る溝で, 上面幅約0.4m, 深さ約0.25mである。覆土は第1層が黄褐色シルト質土第2層が黒褐色土である。

S D 439 溝跡 (第27図, 図版13・14)

S D 438 の北側を東西に走る溝で, 上面幅2~3.25m, 底面幅0.4~1.3m, 深さ0.47mである。覆土は黒褐色土が主で, 最下層では植物遺体が認められる。直径5~6cmの杭や板材・樹皮等が両岸に認められ, 護岸工事がなされていたと考えられる。



第28図 S X 431・S X 432 実測図

(3) その他の遺構

S X 431 (第28図, 図版14)

S D 433 溝, S X 432 の東側に位置し, 東西幅約1.25m, 南北幅約0.85m, 深さ約 0.4mの長方形を呈する遺構である。覆土は第1層が黒褐色土で後世の柱穴である。第2層は鉄滓が9割を占め, 隙間に黒色土が入り込んでいる。第3層は鉄滓をわずかに含む黒色砂質土である。

S X 432 (第28図, 図版14)

S D 433 の東側に位置し S X 431 の西隣りである。東西幅約0.85m, 南北幅約0.80m, 深さ約0.15mの円形を呈する遺構である。覆土は S X 431 の第2層と同じく鉄滓が主体である。

S X 436

S D 435 覆土内にある東西幅約2m, 南北幅約1.3mの不整楕円形の遺構で, 酸化鉄を多量に含んでいる。

S X 437 (図版15)

S B 444・445 建物と重複する遺構で, 南北幅に11.78mと長く東西幅1.14~3.15m, 深さ0.48mの不定形遺構である。覆土は黒色土で植物遺体等を多量に含んでおり, 堆積状態も水平であることから, 停水状態に近かったと考えられる。S B 444・445 建物の柱掘形に切られている。

S X 440

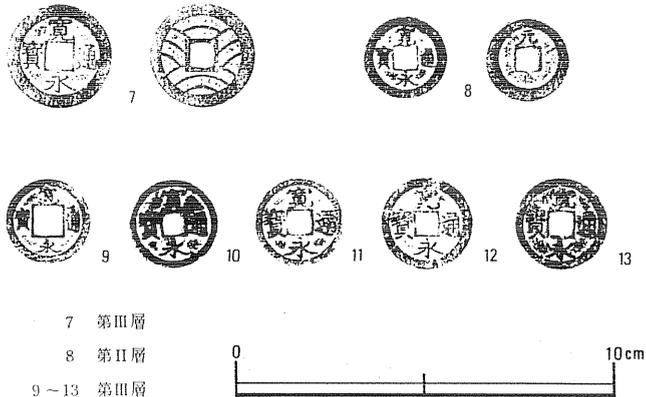
平面形は不定形で, 深さ0.31m, 覆土は黒褐色土である。

S X 441 (図版15)

S B 444・445 建物の東側に位置し, 西側が板で補強されている。S D 434 溝を引水路としていた水屋であったと考えられる。S B 444・445 建物のどちらかに伴うものなのか, または両者に伴うものなのか不明である。

3 出土遺物

遺構内出土は S X 431・432 の鉄滓と S X 441 からの陶器・古銭類であるが, いずれも近現代のものである。遺構外の遺物はすべて小破片のため復原図示できなかった。古銭については拓本図示した。



第29図 出土遺物

4 小 結

本調査の目的は、内外郭間における古代遺構の確認であった。

建物4棟について検討してみる。S B 430 礎石建物は現代の建物である。建物 S B 444 掘形が建物 S B 445 掘形を切っているので、S B 444 が後出の建物である。S B 444・445建物の柱掘形は、長軸0.48～0.92m、短軸0.45～0.75mの隅丸方形で、礎板をもっている。柱痕・柱根直径は0.24～0.3mで、掘形埋土には混入物がなく丁寧な仕事である。建物方位はN12°30'E・N13°Eで同一としてよい。S B 446 建物は、S B 444・445建物とは性格を異にする建物であり、柱掘形・柱根直径も一回り小さい。建物方位はS B 444・445建物とほぼ同方向であり、建物位置からS B 444と併存するであろう。建物の変遷を図式表現すれば、S B 445 → $\begin{matrix} S B 446 \\ S B 444 \end{matrix}$ となる。これらの掘立柱建物の造営時期はいつであるかが問題である。

本調査の掘立柱建物と第32次発掘調査のS B 320建物と比較検討してみる。建物320柱掘形は、方形ないし隅丸方形の平面形をもちS B 445・446建物と近似するが、礎板は用いず、建物方位も約10°の開きがある。また、想定される復原建物とは異なるものがある。しかしながら、地下に刻まれた掘立柱建物の柱穴の痕跡には、共通する様式を見出すことができるし、同時代性をもつもののように思う。

土地所有者の熊谷家は、現主人功輝氏で7代目だそうである。熊谷家のお話をまとめると掘立柱建物を発見した場所には、明治37年頃焼失した家屋があったはずであり、S B 446 建物は蔵だったと思うが確信はないとのことであった。この焼失家屋が礎石建物なのか掘立柱建物であったかは証言を得なかったが、S X 441 を利用していたことは出土遺物からみてまちがいない。当該地の包含層はすでに破壊され、現在は苗代・畑地であり、建物と近代遺物は地山面で検出されたことにも注意が必要である。もし、焼失家屋が礎石建物だったとすれば、この建物はすでに消失してしまったことになるであろう。また、掘立柱建物だったとすれば、S B 444 建物の可能性が残ることになる。仮に後者の場合には江戸時代から、明治37年頃までの建物ということであろうか。

本調査で検出した掘立柱建物の造営時期が問題となるが、決定的な確証は得られなかった。隅丸方形か方形に近い掘形、礎板を見るかぎりでは、古代の痕跡のように見える。古代の建物にはS B 444 建物のような母屋の北側に一間×二間の張り出す部屋をもつ様式があるのだろうか。また、官衙ブロックだとすれば、関連する遺構が皆無であることも気がかりであり、建物の性格などについても究明していかなくてはならないであろう。外郭内の官衙施設については、まだ手をつけ始めた段階であり、他の城柵・官衙遺跡との比較検討しながら、再検討を重ねてゆきたい。

IX 第44次発掘調査

1 調査経過

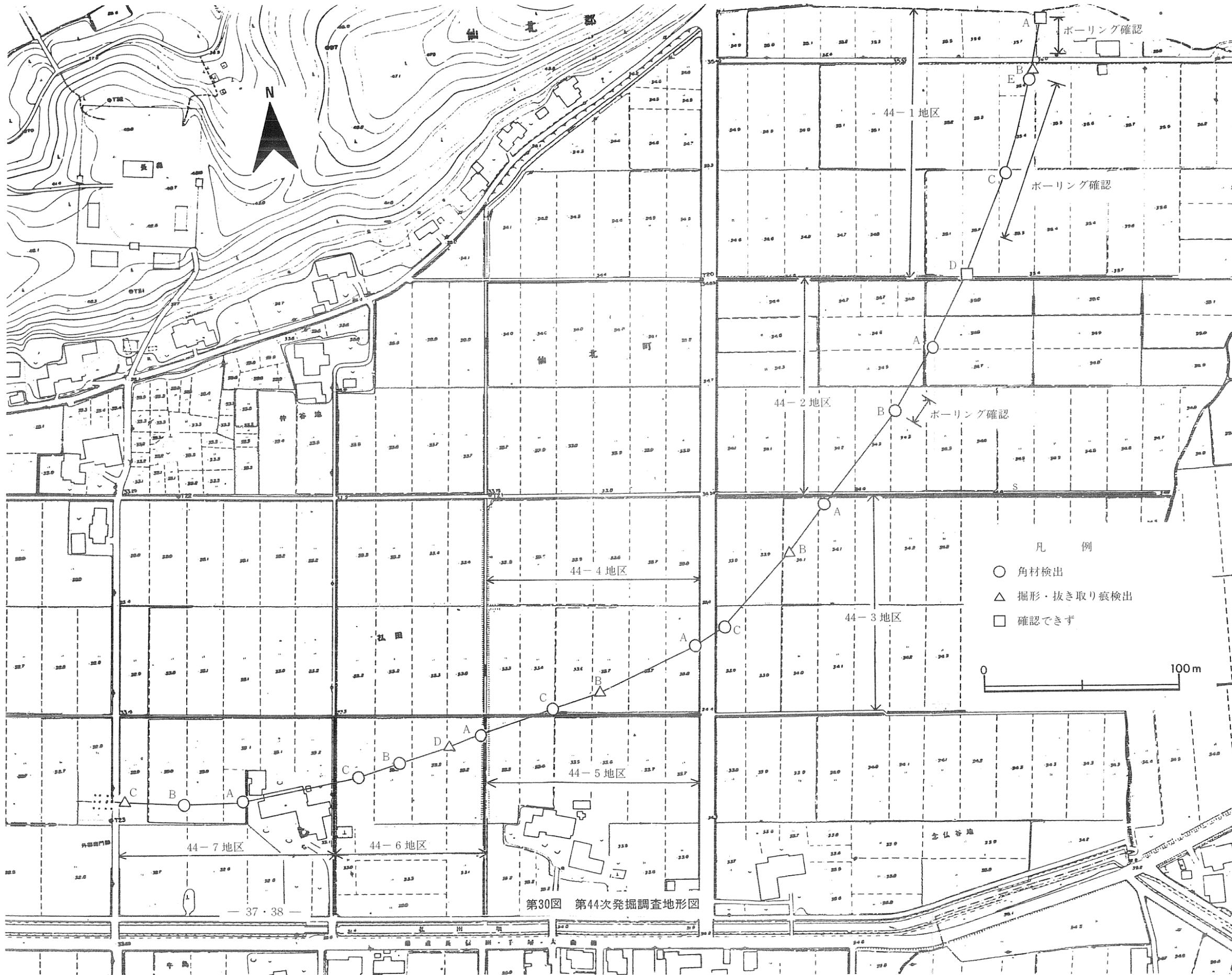
第44次発掘調査は、外郭南門より東へ約800m、発掘対象面積500㎡とした。調査対象地域は大半が水田地帯で一部畑地と住宅を含んでいる。本調査は(1)外郭線角材列位置の再確認(2)外郭線角材列のゆるやかな弧線部における構築方法の確認を目的として実施した。発掘調査区は便宜上7地区に分けて44-1～44-7地区と呼称した。(第30図参照)

4月25、27日に外郭線角材列の位置をボーリング探査し、現存図面位置と照合作業を行なった。11月6日から基準点の移動・基準杭の埋設を開始し、7日にはテント・器材の搬入を行なった。10日調査区西側からトレンチ調査を開始したが、遺構確認面が浅いために角材が抜き取られている部分も少なくなかった。また断続的に降る雨のため調査は思うように進まず、当初計画していた全面発掘は断念せざるを得なかった。11月26日に44-2Bトレンチ掘形内より土師器完形品(杯)が出土した(第34図14・15)。この他にも44-4B・4Cトレンチより遺物が集中的に出土し、他遺構の存在をうかがわせた。実測・写真撮影はトレンチ掘り下げと併行して実施し、12月2日にテント・器材を撤収して調査を終了した。

2 発見遺構

S A 460 角材列 (第30～33図, 図版17～19)

トレンチ設定20ヶ所中、18ヶ所で遺構を確認した。12ヶ所で角材を確認したが、残り6ヶ所では腐食、耕作による攪乱、抜き取りのためプラン確認、抜き取り痕跡の確認にとどまった。角材は数cmの間隔をもって並置していて、頂部は耕作等による破損、腐朽のため極端な相異はない。角材の大きさは外郭南門西側のものと大差なく一辺が約20～22×24cmであった。角材の設置方法は土層観察によると上面幅平均60cm、底面幅46cmの布掘り後、その壁際に寄せたものと中央に据えたものの2通りがあるが、規則性をつかむには至らなかった。一部においては添木・横木・礎板を用いて角材を据えている。角材コバ面は手斧の幅約5cmの面取り加工が施されており、基部は工具によって2方面より削ったり平坦に整えたりしている。



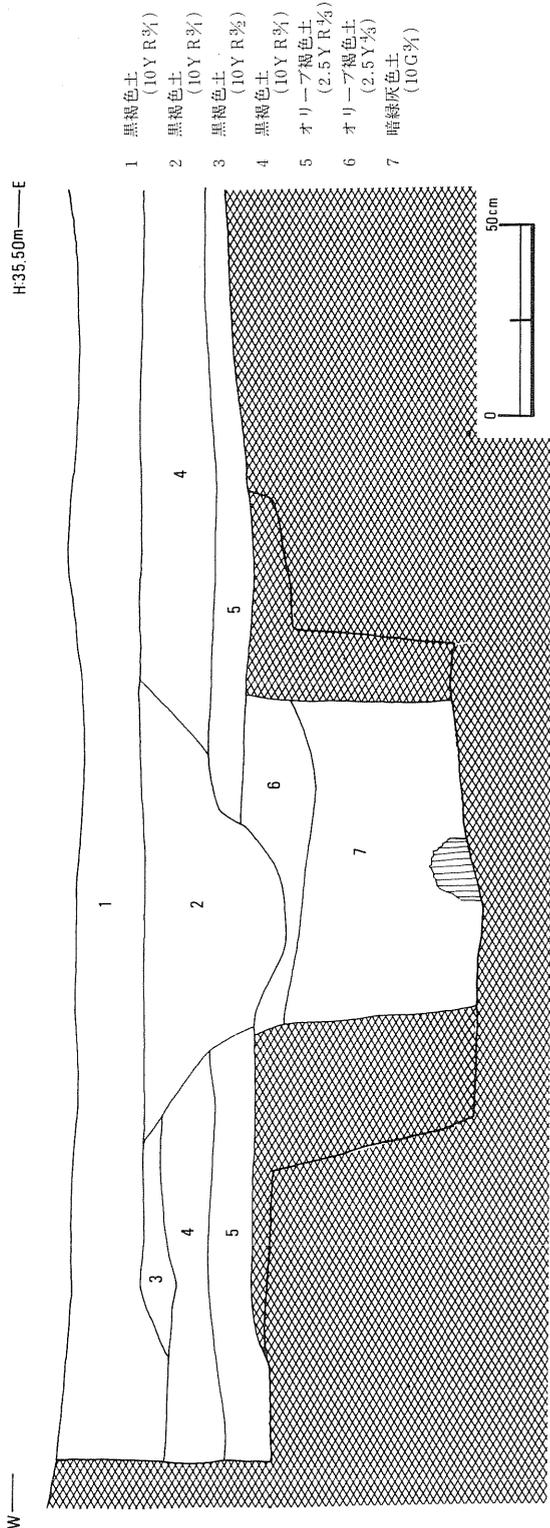
第30図 第44次発掘調査地形図

3 出土遺物 (第34図, 図版19)

44-4地区を中心に多数の土器片が出土したが、小破片が多く復原・実測できたものは9点にすぎなかった。14・15はS B 460掘形内より出土したものである。16~22は表土~地山間の層より出土した土器を一括したものである。14~20は土師器, 21・22は須恵器である。

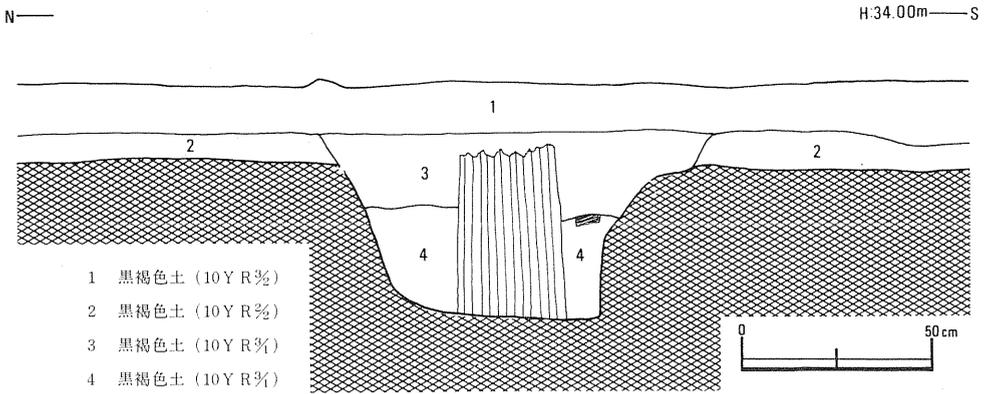
土師器 (第34図14~20, 図版19)

14は杯の底部破片である。底部切り離しは回転糸切り無調整である。底部と体部の境界は丸味をおびてははっきりしない。胎土は砂粒及び白色粒子を含むが緻密である。焼成は良好で、色調は内外面共に灰白色である。15は44-2 BトレンチのS B 460掘形内より出土した鉢で完形品である。底部切り離しは回転糸切り無調整である。胎土は砂粒を含むが緻密で、焼成も良好である。色調は外面が淡黄色、内面は灰白色で炭化物が付着している。法量は口径11cm, 底径5.4cm, 器高5.2cmである。16~18は杯で、いずれも底部破片である。16は胎土が緻密で焼成も良好である。底部切り離しは回転糸切り無調整である。色調は内外面共ににぶい橙色である。法量は

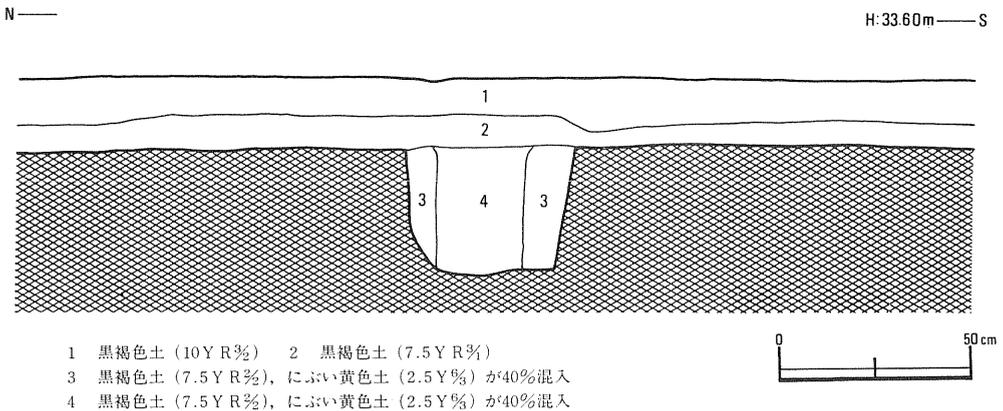


第31図 44-2 A トレンチ北壁土層図

底径5.4cmである。17は体部が内湾気味に立上る。胎土は緻密で焼成も良好である。底部切り離しは回転糸切り無調整である。色調は外面が灰白色、内面は黒色処理されている。法量は底径4.8cmである。18は胎土が砂粒を含みやや荒い。底部切り離しは回転糸切り無調整である。色調は外面がにぶい橙色、内面は灰白色である。法量は底径6cmである。19は高台付椀である。外面はロクロナデのあと体部中央のみヘラミガキを施し、内面はロクロナデのあとヘラミガキの調整がある。底部は回転ヘラ切り後高台を付け、ロクロナデをしている。胎土は緻密で焼成も良好である。色調は内外共に灰白色である。法量は口径17.4cm、底径10cm、器高6cmである。20は鉢の底部破片である。底部切り離しは回転糸切り無調整である。胎土は砂粒を含むが緻密で、焼成は良好である。色調は外面がにぶい褐色、内面は橙色で炭化物が付着している。法



第32図 44 - 4 A トレンチ東壁土層図

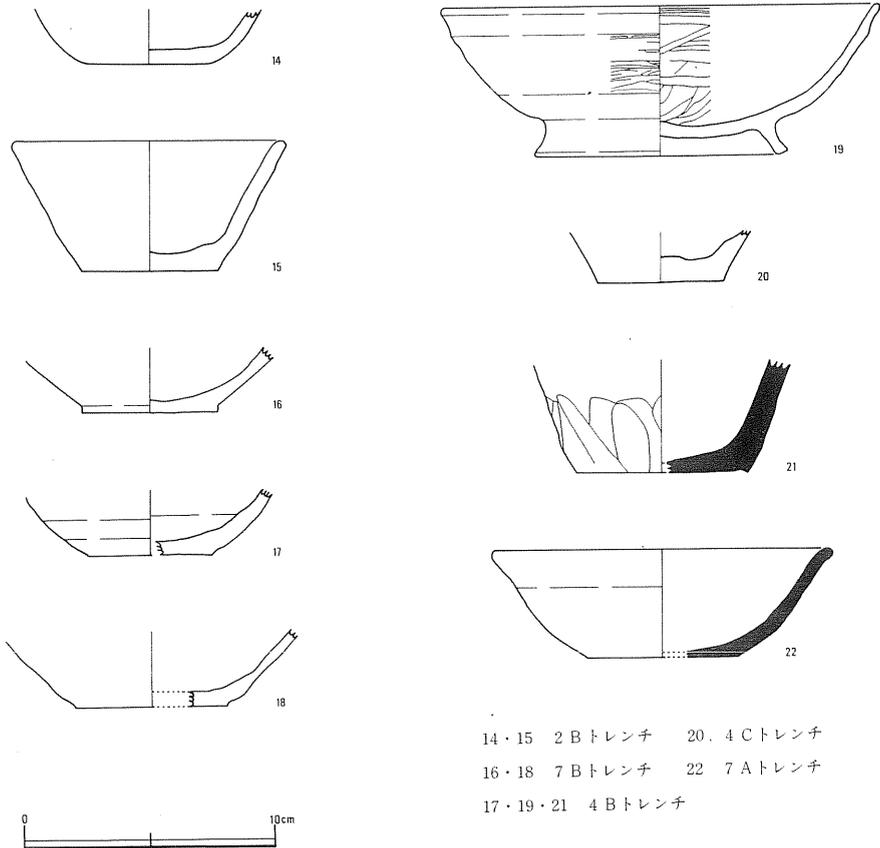


第33図 44 - 6 B トレンチ東壁土層図

量は底径5 cmである。

須恵器 (第34図21・22)

21は体部から口縁部にかけてゆるやかに立上り、口唇部がわずかに外反気味である。底部切り離しは回転糸切り無調整である。胎土は緻密で焼成も良好である。色調は内外面共に灰色である。法量は口径13.6cm、底径6 cm、器高4.3cmである。21は瓶の底部破片である。外面は体部下端にヘラケズリを施しさらにロクロナデ、内面はロクロナデ調整である。底部切り離しは不明である。色調は内外面共に灰色である。法量は底径9 cmである。



14・15 2 Bトレンチ 20、4 Cトレンチ
 16・18 7 Bトレンチ 22 7 Aトレンチ
 17・19・21 4 Bトレンチ

第34図 出土土器

4 小 結

外郭線角材列の発掘は、外郭線南東部の外郭南門跡から外郭東門跡に向って延長約800mを20本のトレンチによって200㎡を調査した。本調査は、水田下暗渠施設には一切傷をつけないという土地所有者の要望に基づく制約などがら十分な内容とはならなかったが、一応の成果を得ることができたと思う。

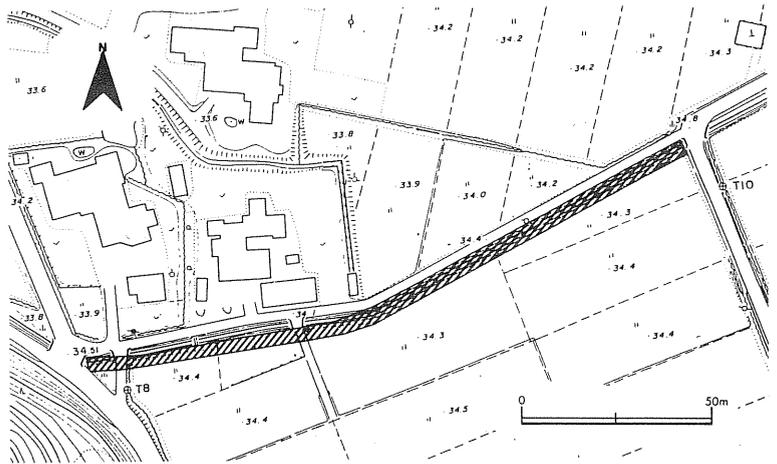
調査の過程では、第30次発掘調査に引き続いて、外郭線角材列に堀・櫓・寄柱が伴うのか、角材列が重複しているか等の諸問題点に取り組んだ。調査の結果、外郭角材列には堀・櫓・寄柱は伴わず、重複もしていない。しかし、44-4地区においては、遺物の集中出土したB・Cトレンチ周辺に遺構の存在をうかがわせる。これは今後の内外郭線間の空間利用究明に関連すべきものであろう。外郭線角材列弧線部における構築方法の確認は平面発掘調査を断念した段階において今後の課題とした。

X 第45次発掘調査

1 調査経過 (第35図, 図版20)

昭和55年10月8日付け、仙北郡仙北町高梨字田茂木10番地、仙北町長伊藤喜四郎氏より町道森合2号線の拡幅・舗装工事に伴う水路付け替え工事の現状変更許可申請書が文化庁に提出された。

これに対し文化庁から、昭和55年12月10日

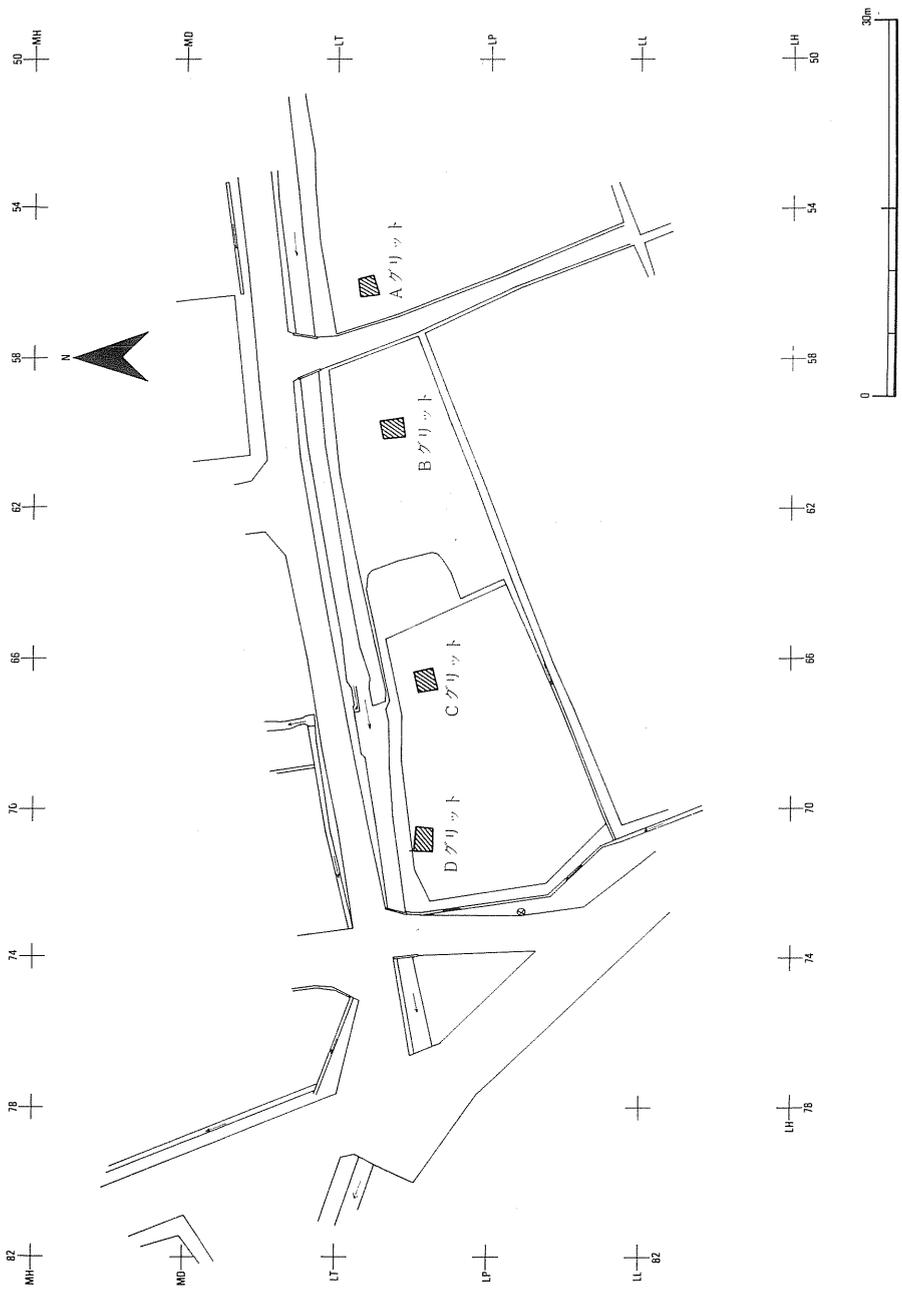


第35図 第45次発掘調査地形図

付け委保第4の1009号をもって、①工事の着手は秋田県教育委員会による発掘調査の終了後とすること、②重要な遺構が発見された場合は設計変更等によりその保存を図ること、③その他実施に当たっては秋田県教育委員会の指示を受けることを条件に許可する旨の回答があった。これを受けた管理団体仙北町は、当払田柵跡調査事務所に発掘調査担当の依頼をしてきた。このため当事務所では、第45次発掘調査として昭和56年12月14日～16日の3日間にわたって発掘調査を実施した。調査地区内は積雪量が多いので水路工事区域内の全区間(全長60m・幅1.5m)を発掘するのは、非常に困難であるため工事区域内の4ヶ所に1.5×2.0mのグリットを設定し、遺構・遺物の有無を確認し、遺構等が検出できたら全面発掘することにした。グリット番号の名称は東よりA・B・C・Dとした。

1日目は現場視察をし、器材の搬入をした。2日目は発掘地点の雪寄せをして、A・B・Cグリットの3ヶ所を地山面まで掘り下げて、平板測量、土層堆積状況を写真撮影した。3日目は残りの発掘地点のDグリットを掘り下げ、測量と写真撮影を行った。又、A・B・C・Dグリットの土層を実測、遺跡全景の写真撮影をした。その後補足調査を実施した。

発掘及び補足調査の結果、A・Cグリットに暗渠があっただけで、古代の遺構は検出せず、遺物もまったく出土しなかった。このため全面発掘はせず、器材を撤収し調査を終了した。本調査の発掘面積は54㎡であった。



第36図 発掘調査実測図

2 発見遺構 (第36・37図, 図版20)

遺構の発見はなかった。なお土層観察によると第1・2層は耕作土であり、他の層は暗渠設置および耕作時による攪乱層であった。

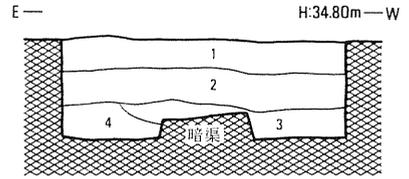
3 出土遺物

遺物の発見はなかった。

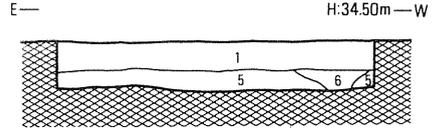
4 小 結

当地点は、長森・真山に挟まれた、外郭内の南北に通じる場所であり、推定内郭西門の位置にも近いところにある。結果としては、遺構・遺物を発見できなかった。

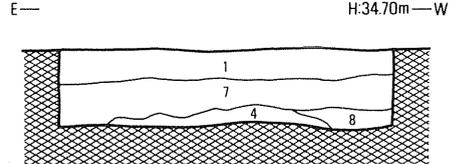
A グリット



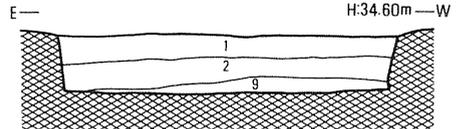
B グリット



C グリット



D グリット



- | | |
|-------------------------------|--------------------------------|
| 1 黒褐色土 (2.5 Y ₅) | 7 灰黄褐色土 (10 Y R ₅) |
| 2 黒褐色土 (10 Y R ₅) | 8 灰黄褐色土 (10 Y R ₅) |
| 3 オリーブ黒色土 (5 Y ₅) | 9 暗灰黄色土 (2.5 Y ₅) |
| 4 黄灰色土 (2.5 Y ₅) | |
| 5 緑灰色土 (5 G ₅) | |
| 6 オリーブ黒色土 (5 Y ₅) | |
- 0 1m

第37図 南壁土層図

XI S X 363 工房跡の分析

東京工業大学製鉄史研究会

後藤 忠俊（福島県立会津短期大学教授）

高塚 秀治（東京工業大学工学部人文社会群技官）

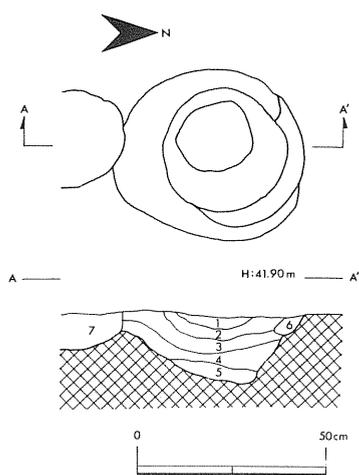
阿久津 久（茨城県立歴史館研究員）

S X 363 工房跡についてはすでに『払田柵跡—第31～37次発掘調査概要—』「払田柵跡調査事務所年報1980」（秋田県教育委員会払田柵跡調査事務所）で報告されているので、詳細は省く。S X 363 工房跡は、S X 368 工房跡と南北に並んでいる。両方とも方形の竪穴遺構である。S X 363 工房跡は東西約6m、南北約7m、深さ35～40cmで壁に沿って柱穴がある。竪穴遺構内については報告者の観察をみると「焼土1の平面観察によれば直径45～50cmの楕円形を呈する。中央部に直径約18cmの黒色土、灰色土があり、外側に約4～11cmのにぶい赤褐色、暗褐色の焼土があり、その外側に幅5～14cmの暗褐色粘土が環状に認められる。土層観察では深さ16cmの逆台形の掘形をし、第1～3層は平面観察と同様でまるく落込み、第4・5層は褐色土が詰っている。この観察から遺構を復原すれば、掘込みの後埋土を入れ粘土で炉壁を形成したと思われる。」と述べている。竪穴に掘り込み、再び埋土をする事業は、当然目的をもつものと思われる。これまで各地で確認されている製鉄炉は、地下構造をもつものが多い。これは防湿効果を目的としたもので、鉄製錬にとっては重要な部分である。鍛冶炉においても当然考慮されるもので、S X 363 工房の地山を掘り込んで直接に炉を床に設置せず、一部埋土してからその上に炉を形成することで防湿効果をもつものと判断する。炉の断面を報告では、1層—黒色土・灰色土、2層—暗褐色粘土、3層—にぶい赤褐色・暗褐色焼土、4・5層—褐色土、に分けている。各層ごとにサンプルをとり、分析したのが表1のA H 8～12であり、その結果A H 8・9、A H 10～12に分けられる。ということは、A H 8・9（1・2層）とA H 10～12（3～5層）は各々同じ土を使用していることになる。分析値を平均してみると次の通りになる。

第3表 S X 363 工房跡内炉中覆土分析値（%）

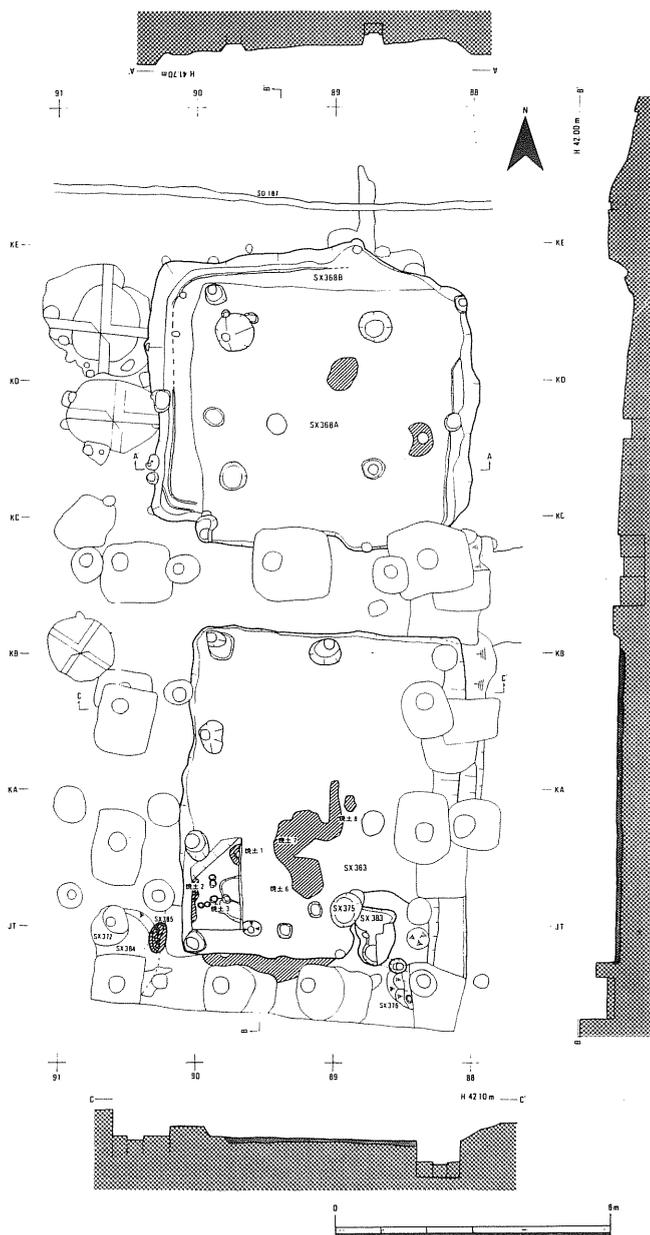
	SiO ₂	TiO ₂	ZrO ₂	Fe ₂ O ₃	Al ₂ O ₃	MgO	CaO	K ₂ O
A H T 1 (A H 8・9)	69.0	0.5	0.1	7.8	20.3	0.9	0.1	1.5
A H T 2 (A H 10～12)	58.7	1.2	0.1	10.3	26.8	1.4	0.2	1.2

これをみると、AHT 2は TiO_2 、 Fe_2O_3 、 Al_2O_3 、 MgO 、 CaO がAHT 1よりも多くみられる。AHT 1はむしろ $\text{SiO}_2 \cdot \text{K}_2\text{O}$ の値が大きい。これはAHT 1層、すなわち炉の直接火を受ける場所には、珪素とカリウムを多く含む粘土を使用したもので、AHT 2層はむしろ、埋土と同質で、防湿効果を得るためのものであろう。



第38図

S X 363 工房跡内焼土1 実測図



第39図 S X 363・368 工房跡実測図

第4表 鉄滓・砂鉄及び焼土の化学分析値一覧表 (%)

試料番号	試料名	SiO ₂	TiO ₂	ZrO ₂	Fe ₂ O ₃	Al ₂ O ₃	MgO	CaO	K ₂ O	Ti/Fe
A H—1	鉄 滓	23.2	0.5	tr	65.8	6.9	1.3	0.7	1.2	0.0065
A H—2	鉄 滓	4.7	0.1	tr	92.2	2.3	0.2	0.3	0.1	0.0009
A H—3	鉄 滓	14.7	5.9	tr	73.2	4.3	1.1	0.4	0.2	0.0690
A H—4	鉄 滓	13.4	3.2	tr	76.0	5.0	0.9	0.7	0.8	0.0361
A H—5	鉄 滓	14.0	0.3	tr	77.8	6.2	0.6	0.8	0.3	0.0033
A H—6	鉄 滓	10.7	0.3	tr	81.4	5.2	0.5	1.2	0.4	0.0032
A H—7	砂 鉄	9.0	8.3	tr	73.6	4.2	3.4	1.1	0.1	0.0967
A H—8	焼 土	68.8	0.5	0.1	8.0	20.3	0.8	0.1	1.5	—
A H—9	焼 土	69.2	0.4	0.1	7.5	20.3	0.9	0.1	1.5	—
A H—10	焼 土	59.6	1.1	0.1	10.2	26.1	1.4	0.2	1.2	—
A H—11	焼 土	57.4	1.3	0.1	10.4	27.9	1.3	0.2	1.2	—
A H—12	焼 土	59.0	1.2	0.1	10.2	26.5	1.4	0.2	1.2	—

鉄滓などの分析結果について

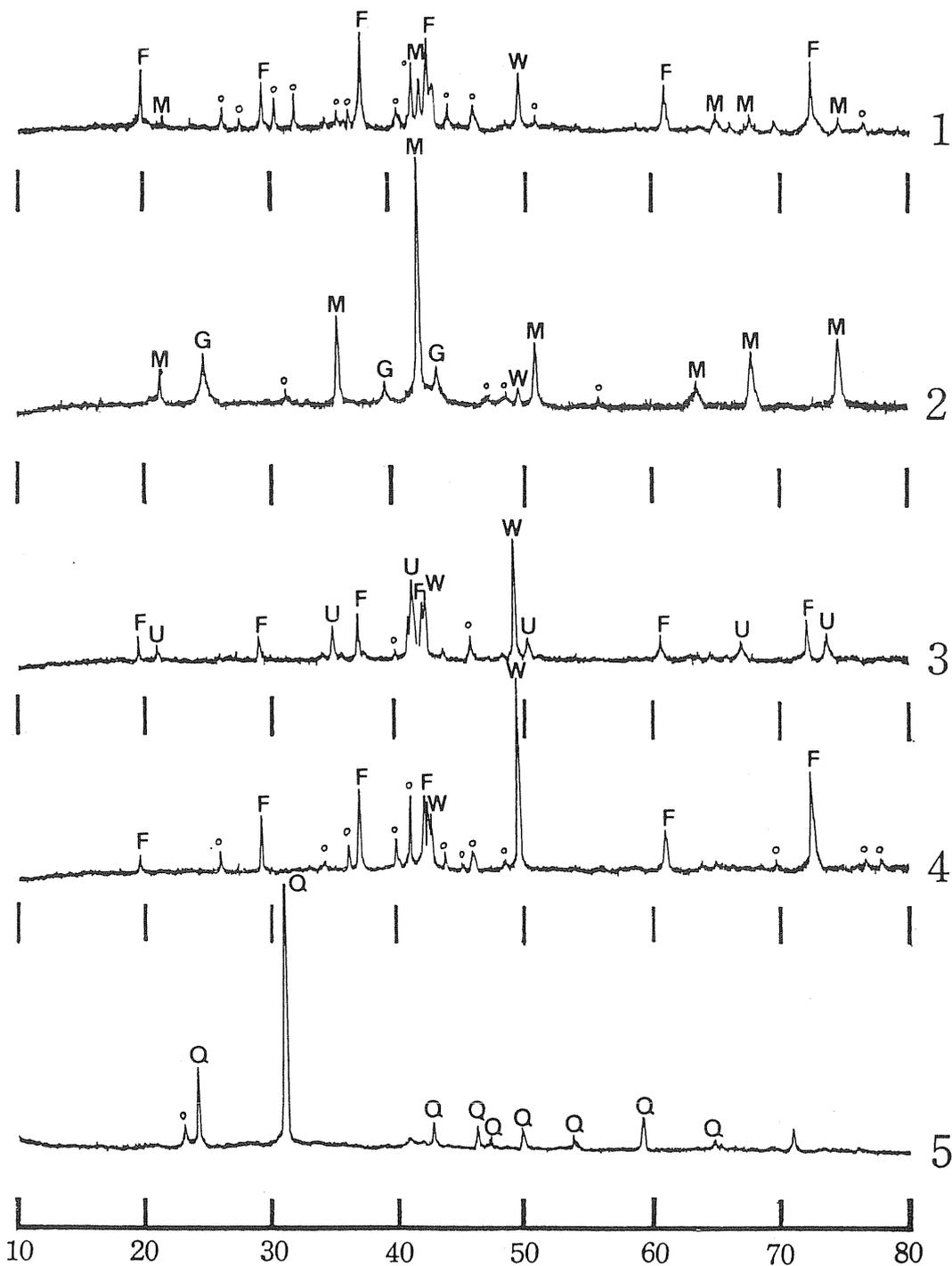
分析試料：S X 363 工房跡より採取した鉄滓 6 試料，炉付近で採取した砂鉄，同工房跡焼土 1 の第 1 層から第 5 層の各土層。

分析方法：粉末 X 線分析と蛍光 X 線分析による。

試料のうち，鉄滓はいずれも不定形であるが，平均 3 cm から 9 cm の大きさのもので，色調は赤錆色を呈している。

各試料ともこれを微粉末にし，CoK α 線を用いて，40KV-20mA，Tc=2秒の測定条件で，粉末 X 線分析を行った。更に，微粉末試料の一部を大気中，900℃，8時間加熱した後，ガラスビード法により蛍光 X 線分析を行った。

粉末 X 線分析結果は第 40 図に示す。表は下記の回折ピークを示す。F は Fayalite (2FeO · SiO₂)，W は Wüstite (FeO)，M は Magnetite (Fe₃O₄)，G は Goethite (FeOOH)，U は Ulvöspinel (2FeO · TiO₂)，あるいは Ulvöspinel と Magnetite との固溶体，○印は現在のところ帰属不明の結晶性物質である。帰属不明のピークについては検討中である。砂鉄は Magnetite (Fe₃O₄) の回折ピークのみを示した。



1 AH-1 2 AH-2 3 AH-4 4 AH-6 5 AH-8

第40图 粉末X線分析結果

蛍光X線分析の結果は第4表のとおりである。AH-2は鉄分のみから成っている。AH-3, AH-4は酸化チタンを3~6%含んでいるが、他のものはチタン含有量が非常に少ない。AH-2を除いて他の鉄滓は10%以上の比較的少量のシリカ(SiO_2)を含んでいる。

SX363 工房跡は、その遺存状態から考えて鍛冶工房跡と考えられるが、分析結果もその想定を支持している。もし、ここで分析に用いた砂鉄を原料として製鉄が行われたとするならば、砂鉄中のチタンは還元反応過程で濃縮されて鉄滓中に残るため、製鉄滓中のTi/Feの値は砂鉄中のTi/Feの値よりも大きくなるはずであるが、分析の結果はいずれの鉄滓においても砂鉄のTi/Fe値よりも小さな値を示している。このことはSX363 工房跡の鉄滓が鍛冶滓であることを示すものである。

しかし、鍛冶滓にしてはシリカ(SiO_2)の含量が多く、Fayaliteを含んでいる。このことは、他の遺跡の鍛冶滓と多少異なっており、硅素分の混入については検討を要する点である。

AH-2のX線分析に見られるGoethiteは鍛冶工程で生成したWüstiteが土中の水分及び空気によって酸化されてできた錆成分である。AH-1に見られるMagnetiteは未還元のスズ鉄ではなく、鍛冶工程で生ずる晶出マグネタイトと考えられる。AH-3はチタン含量も多く、その結果X線分析でもUlvöspinelが見られ、性格としては製鉄滓に近いものである。

以上の分析の結果からSX363 工房の性格を考えるとここで行われた鍛冶は近世に云うような完全に分業化された鍛冶工程ではなく、むしろ製鉄から鍛冶まで一貫性をもつものと思われる。もし分業化された鍛冶工程であれば精製された地金から道具を作るための製鉄滓に近い鉄滓はほとんど生成されないのである。これらの結果により当然近くに製鉄場をもち、しかもあまり精製されていない還元鉄を鍛冶工程に直接用いたものであったと想定できる。

Ⅷ 調査成果の普及と関連活動

1 諸団体主催行事への協力活動

月日	行事の名称	主 題	協力所員	主 催 者
5.19	研 修 会	弘田の柵が語る古代仙北の ロマン	船木義勝	仙北町教職員研究協議会
5.28	史跡見学	弘田柵遺跡の概要	船木義勝	秋田市立城東中学校
6.1	現地視察	弘田柵遺跡の概要	船木義勝	大曲市校長会
6.1	現地見学	弘田柵遺跡の概要	船木義勝	琴丘町郷土研究会
6.26	現地見学	弘田柵遺跡の概要	船木義勝	大曲市立大曲第二小学校 仙北町立仙北南小学校 仙北町立仙北中学校
7.3	現地見学	弘田柵遺跡の概要	小西秀典	大曲市立松倉小学校
7.7	現地見学	弘田柵遺跡の概要	小西秀典	東由利町教育委員会
7.22	現地見学	弘田柵遺跡の発掘調査の概要	船木義勝	秋田市東部公民館
8.3	現地見学	弘田柵遺跡の概要	山崎文幸	秋田県教育関係職員互助会
8.22	研 修 会	弘田柵遺跡の発掘調査の概要	船木義勝	社会科担当指導主事
8.31	研 修 会	弘田柵遺跡の発掘調査の概要	船木義勝	大曲市藤木の昔を語る会
9.11	現地見学	弘田柵遺跡の概要	船木義勝	太田町立太田中学校
10.8	現地見学	弘田柵遺跡の概要	山崎文幸	矢島町教育委員会
11.6	現地見学	弘田柵遺跡の概要	船木義勝	東京都立豊多摩高等学校

2 顧問会議の開催

第15回顧問会議 昭和57年2月24日

弘田柵跡調査事務所要項

1 組織規定

秋田県教育委員会行政組織規則

第6条 (地方機関の設置)

名 称	位 置
弘田柵跡調査事務所	仙北郡仙北町

第7条 文化課の所掌事務は、次のとおりとする。

8 弘田柵跡調査事務所に関すること。

第8条 第2項 弘田柵跡調査事務所の所掌事務は、次のとおりとする。

1 史跡弘田柵跡の発掘およびこれに伴う出土品の調査研究に関すること。

2 職員

(昭和57年3月現在)

職	氏 名	備 考
所 長	梶原忠郎	本務 文化課長
学 芸 主 事	船木義勝	兼務 文化課・埋蔵文化財センター
社会教育主事	大野憲司	本務 埋蔵文化財センター
主 事	古村武紀	本務 文化課
調 査 補 佐 員	栗沢光男	
仙北町派遣職員	山崎文幸	仙北町総務課主事補

3 顧問

弘田柵跡調査事務所の発掘・調査研究を適正に実施するため、顧問を委嘱した。

顧問 新野直吉 (秋田大学教育学部教授 古代史学)

第38次発掘調査
1 調査地区全景(南▶北)

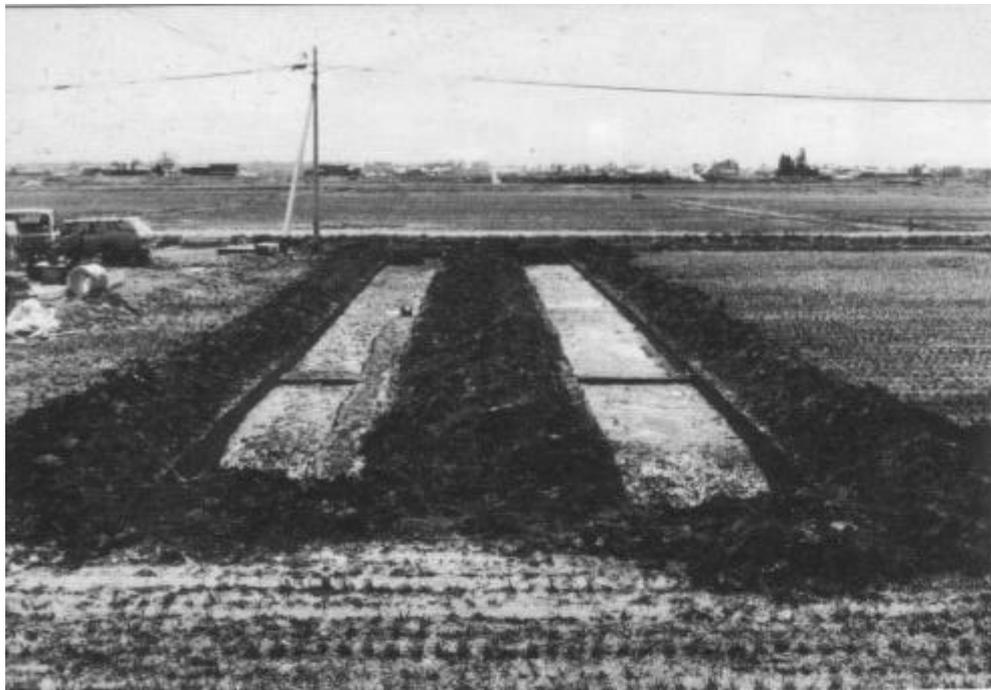


第39次発掘調査
2 調査区全景(西▶東)



3 SL 398河道跡
(南西▶北東)





第40次発掘調査
1 調査区全景(北▶南)



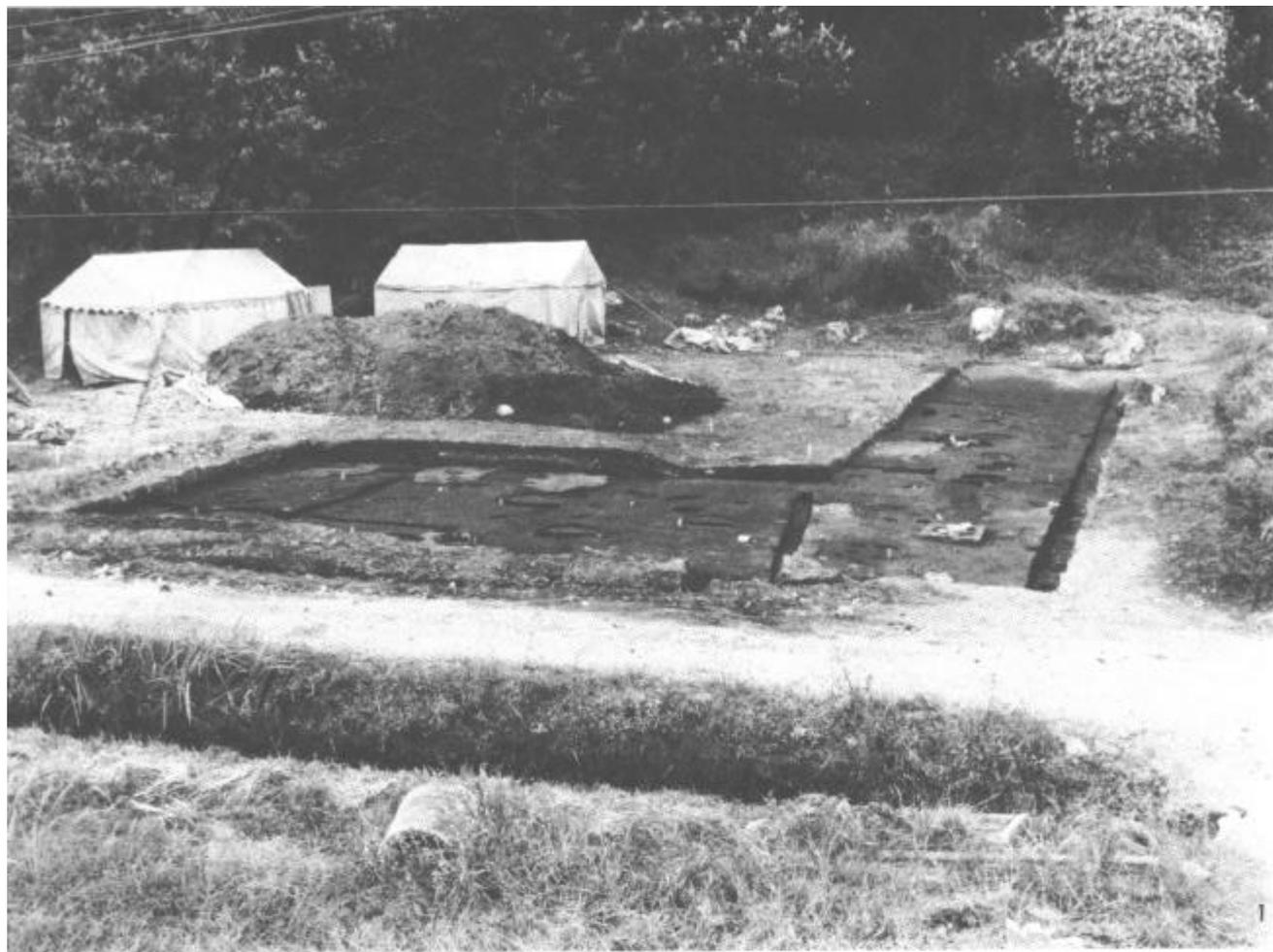
2 SL 401河道跡(南▶北)



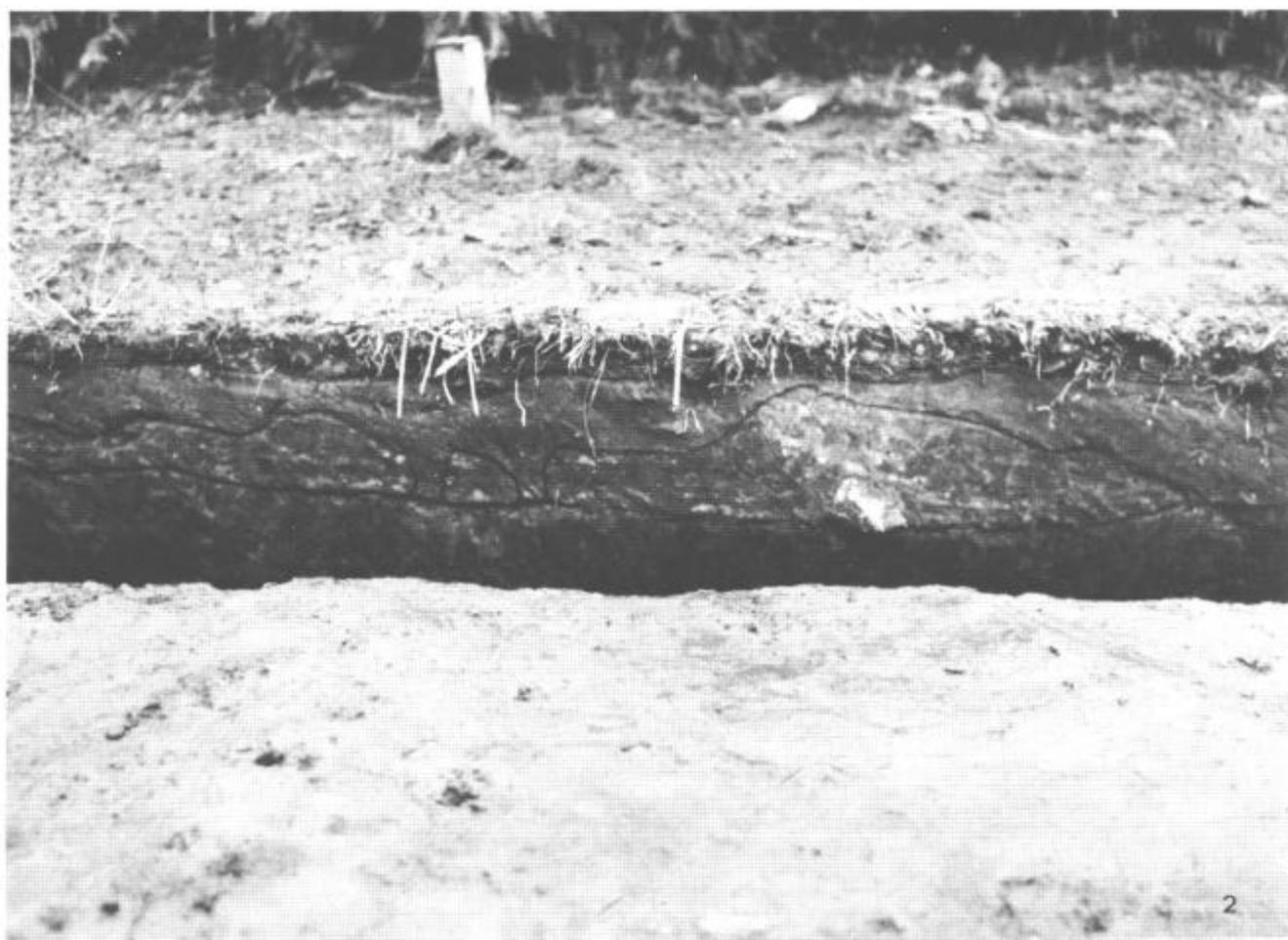
3 SL 402水路跡(北▶南)



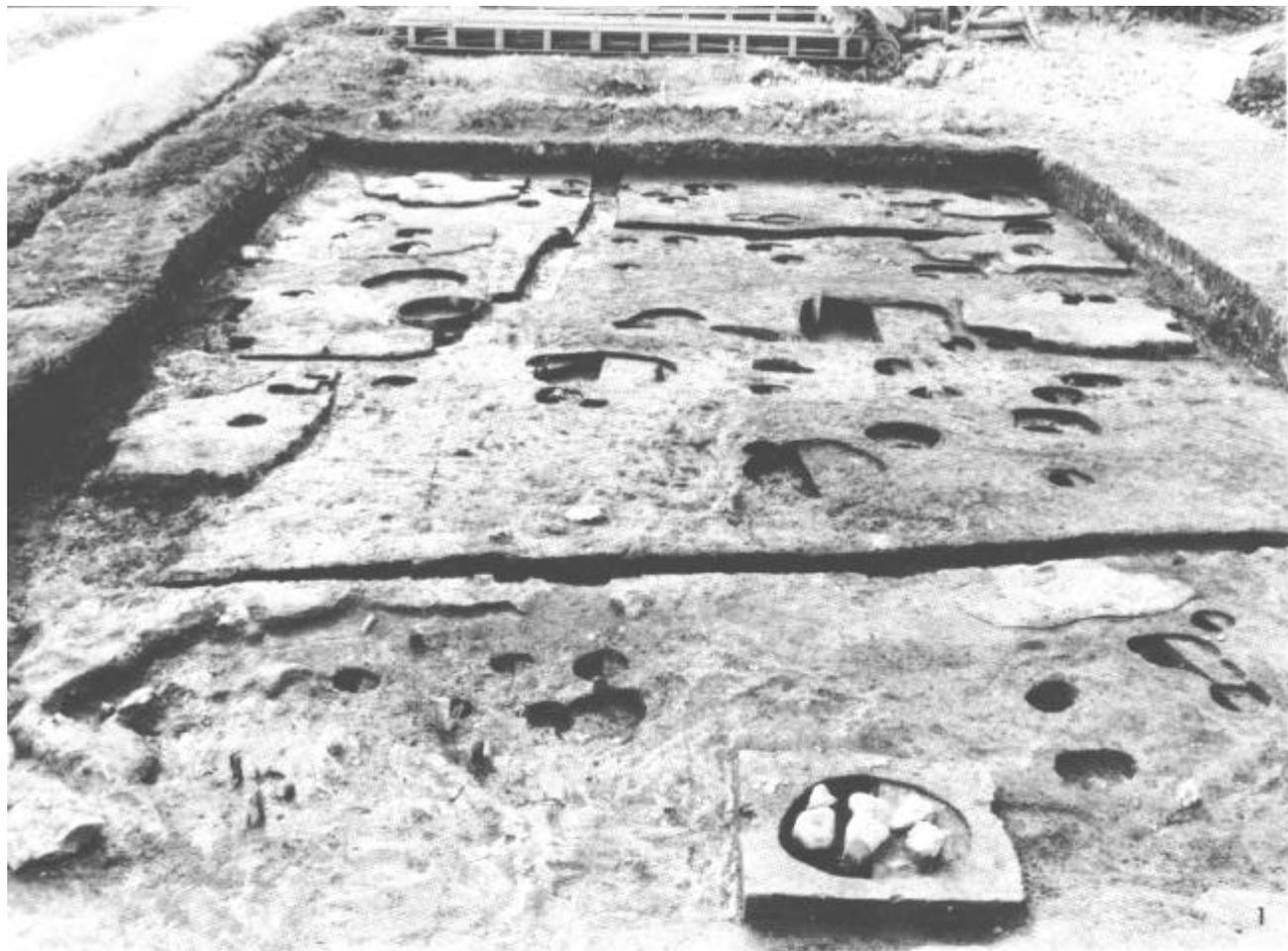
図版3 第41次発掘調査
1 調査区全景〔南▶北〕 2 同 〔北▶南〕



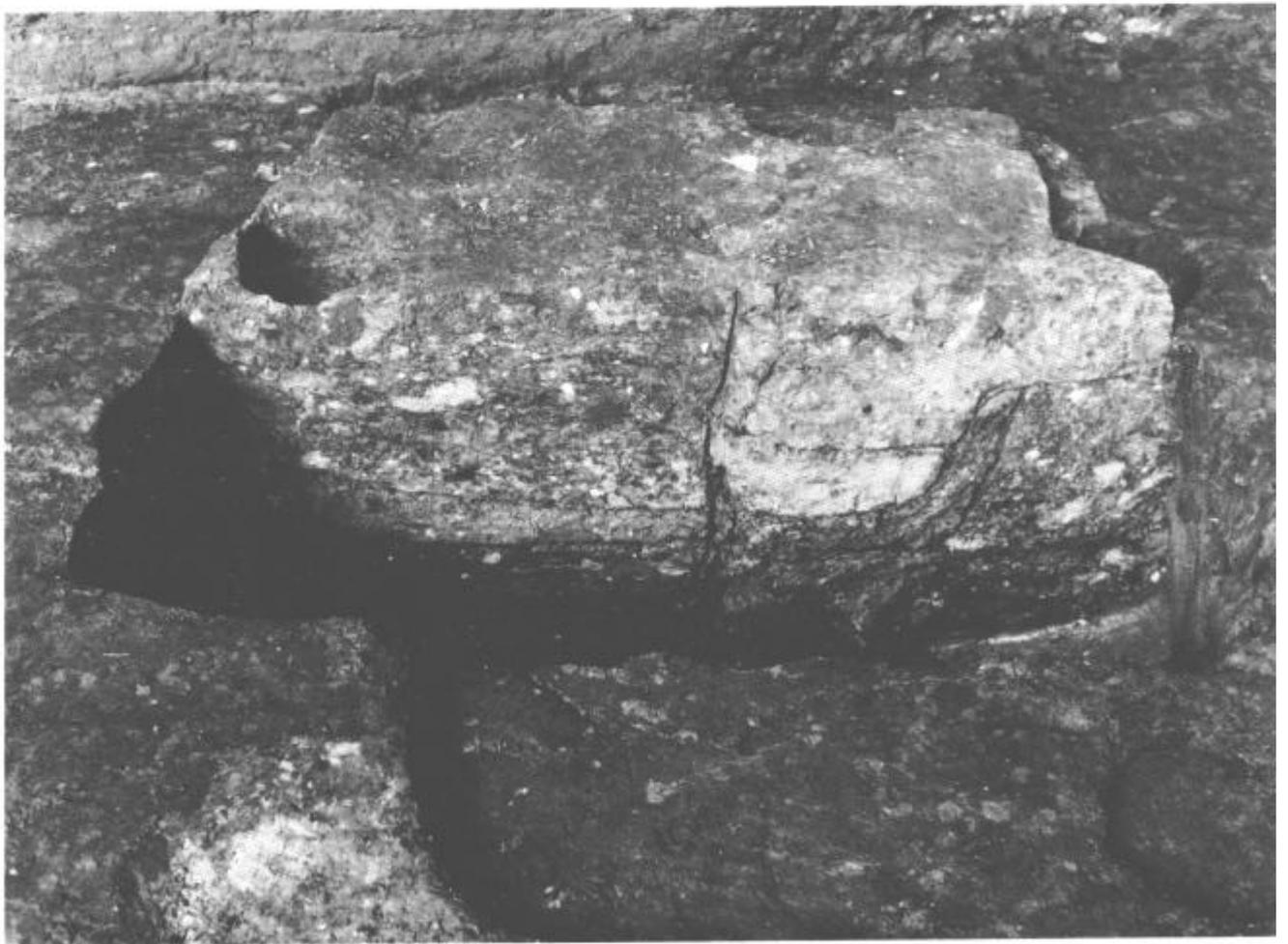
図版 4 第42次発掘調査
1 調査区全景〔南▶北〕 2 同 〔北▶南〕



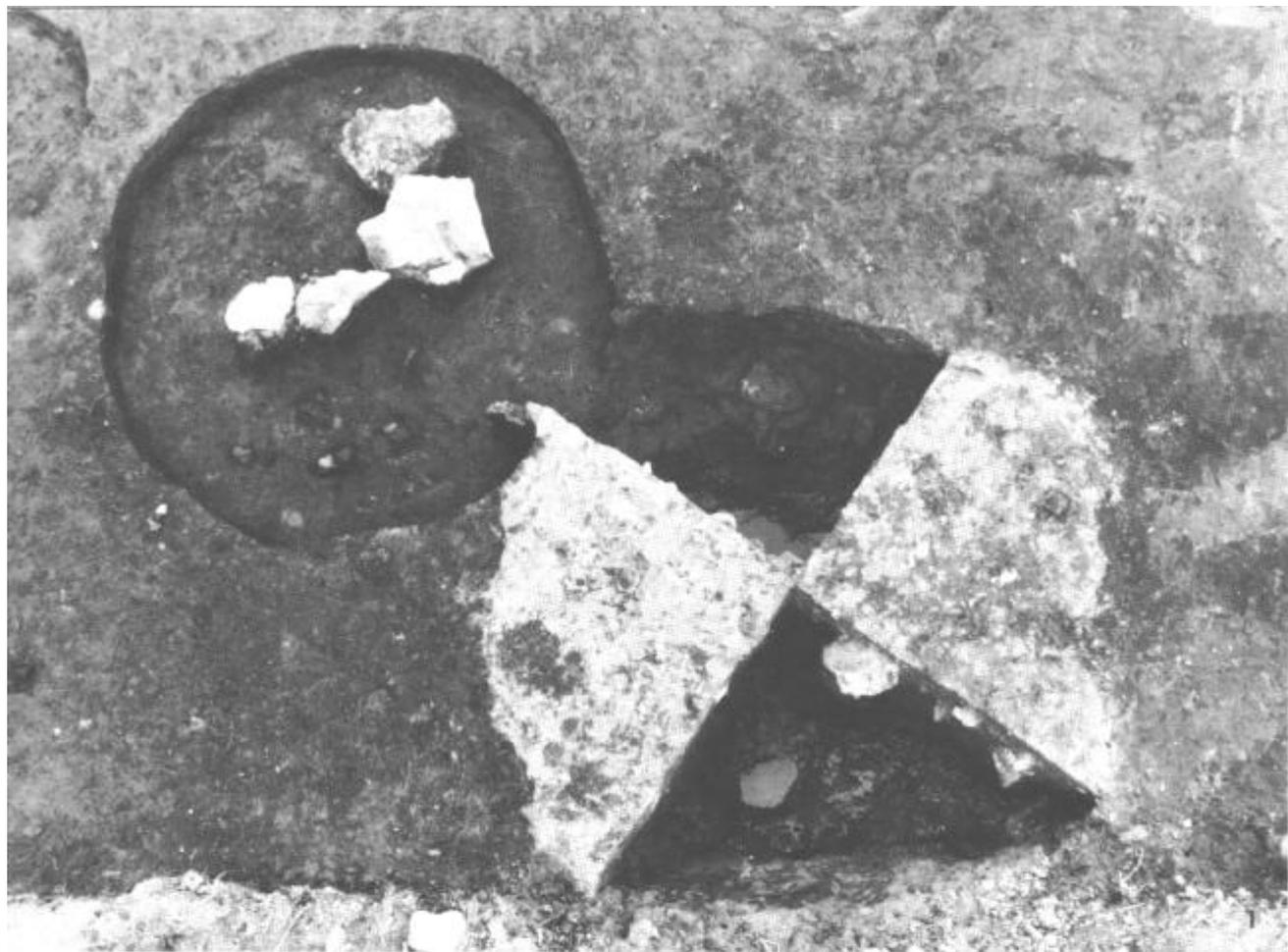
図版5 第42次発掘調査
1 SF 459築地跡〔東▶西〕 2 同 東壁土層〔西▶東〕



図版 6 第42次発掘調査
1 SB 458建物跡〔東▶西〕 2 同〔東▶西〕

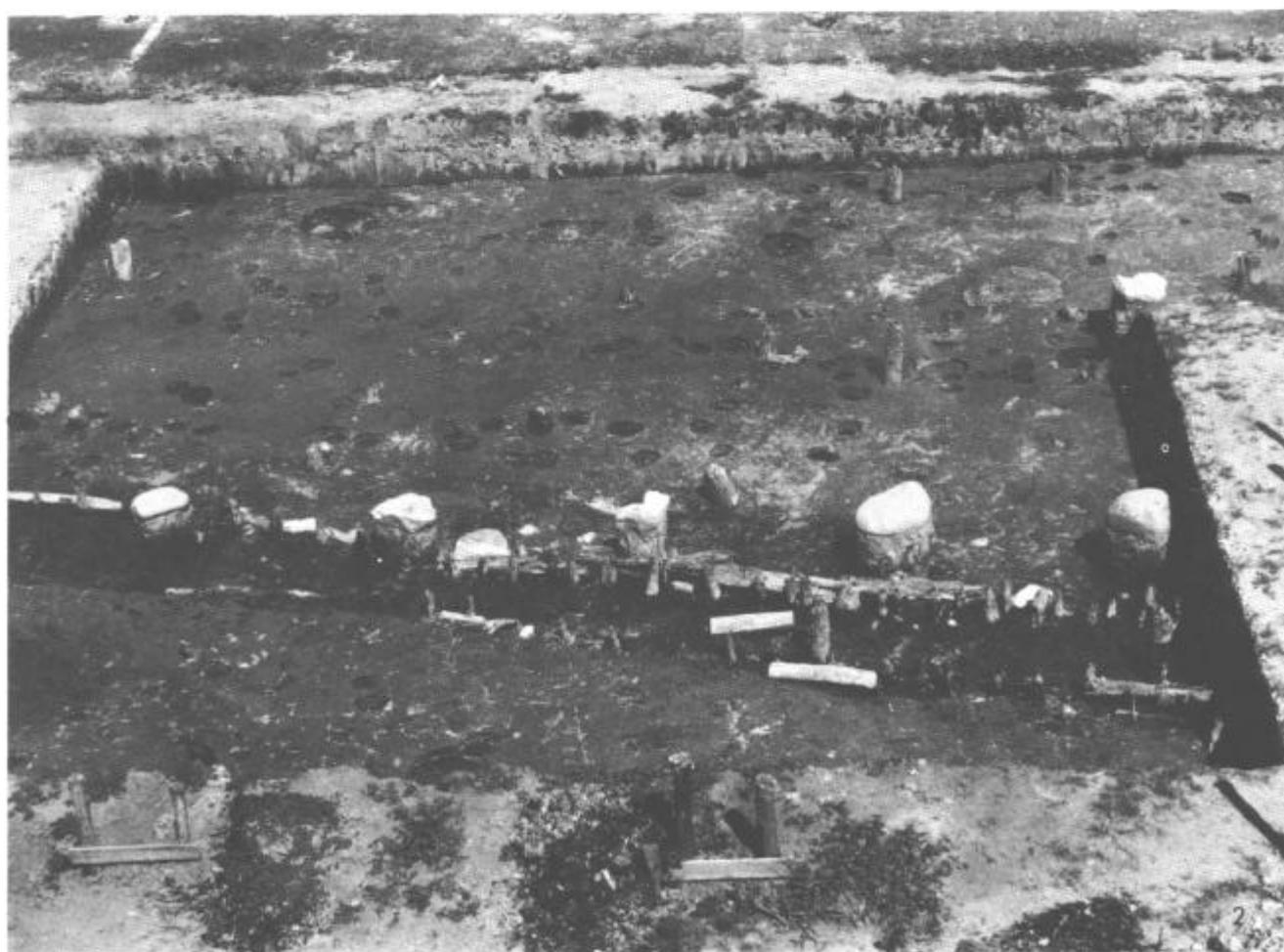


図版7 第42次発掘調査
1 SB 458-1建物・柱〔北▶南〕 2 同 土層〔南▶北〕

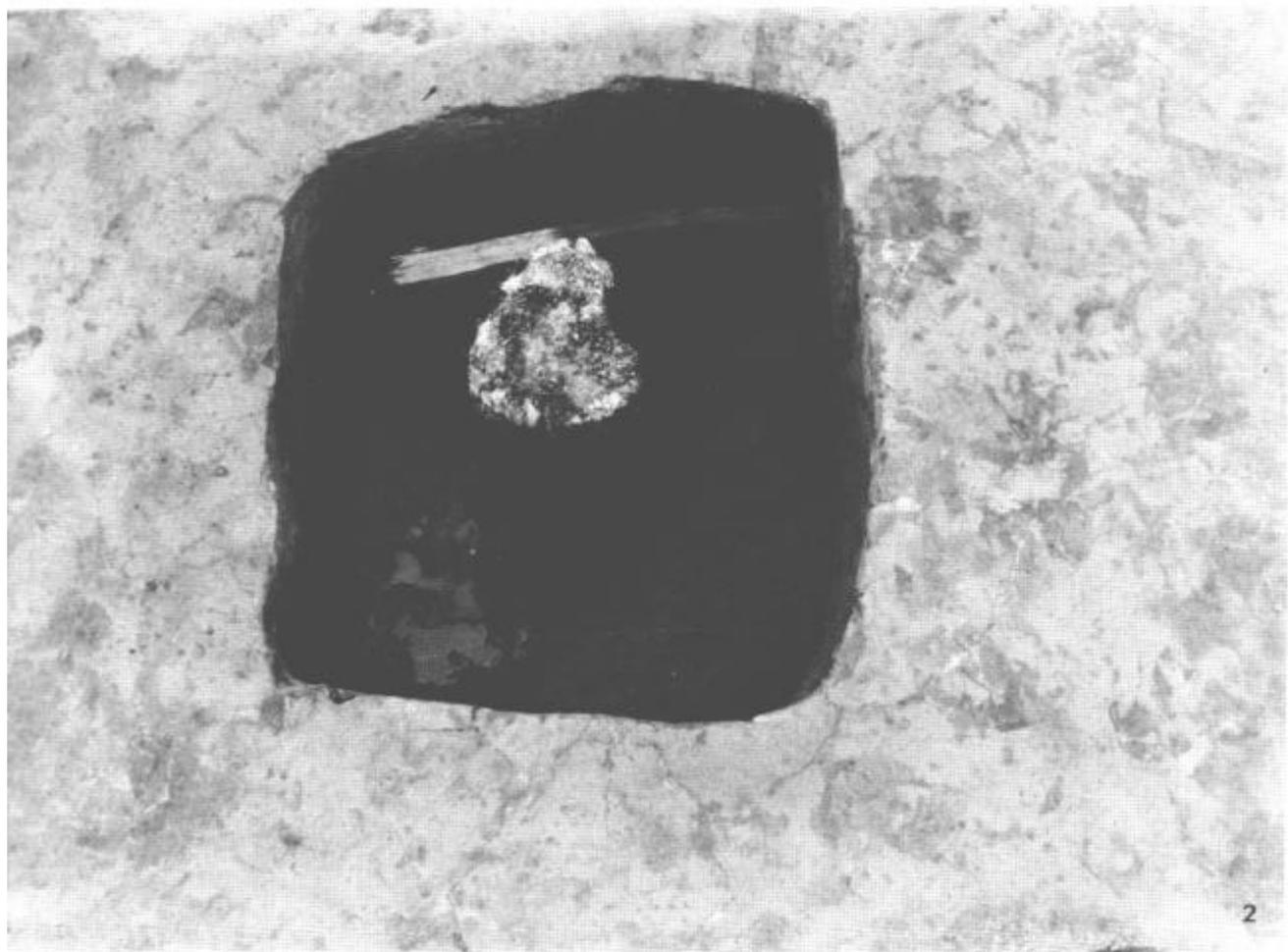


図版 8 第42次発掘調査

1 SK 455・457土壌〔西▶東〕 2 SK 457土壌土層〔北西▶南東〕

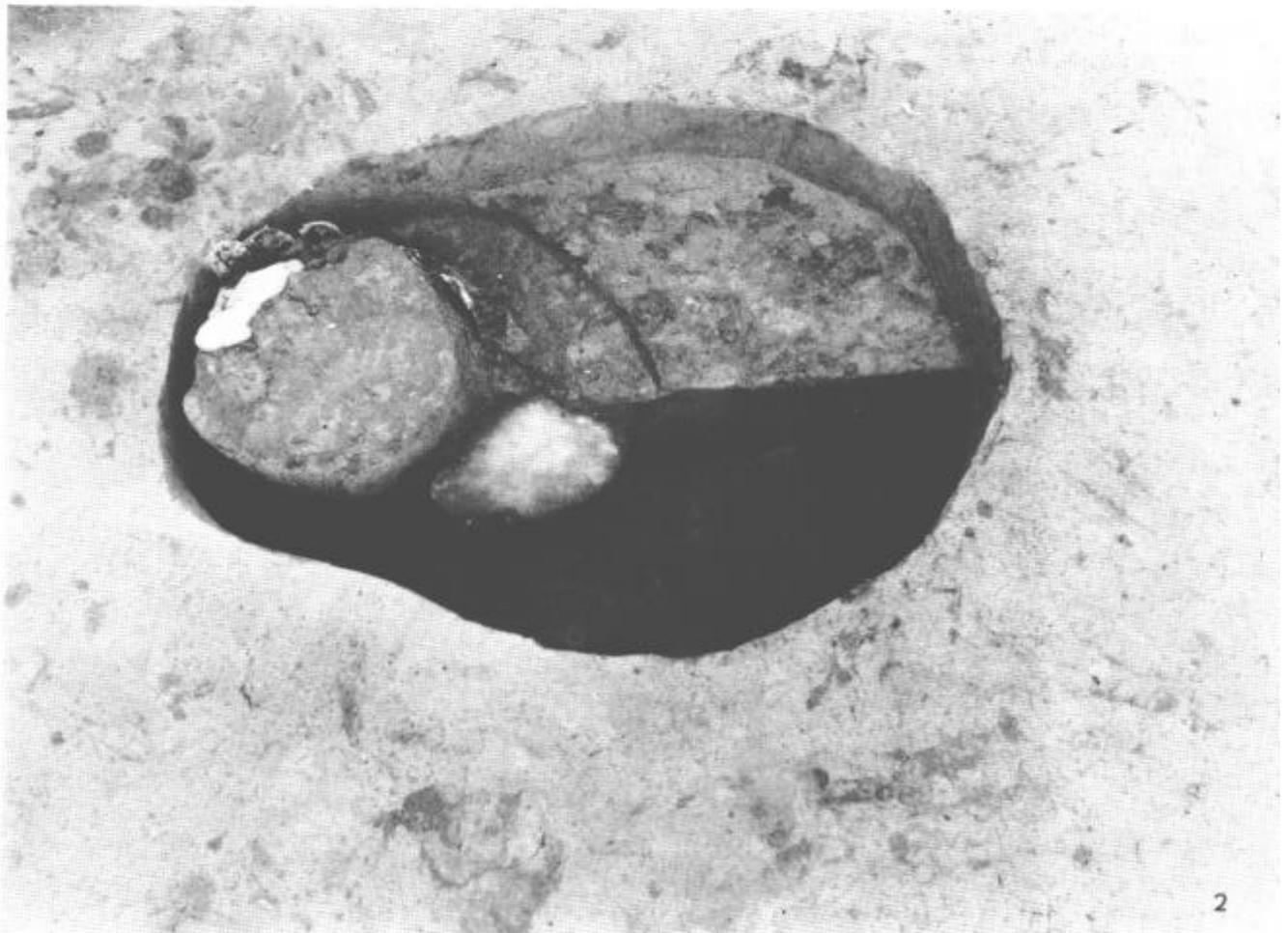


図版 9 第43次発掘調査
 1 調査区全景(北▶南) 2 SB 430建物跡(西▶東)



図版10 第43次発掘調査

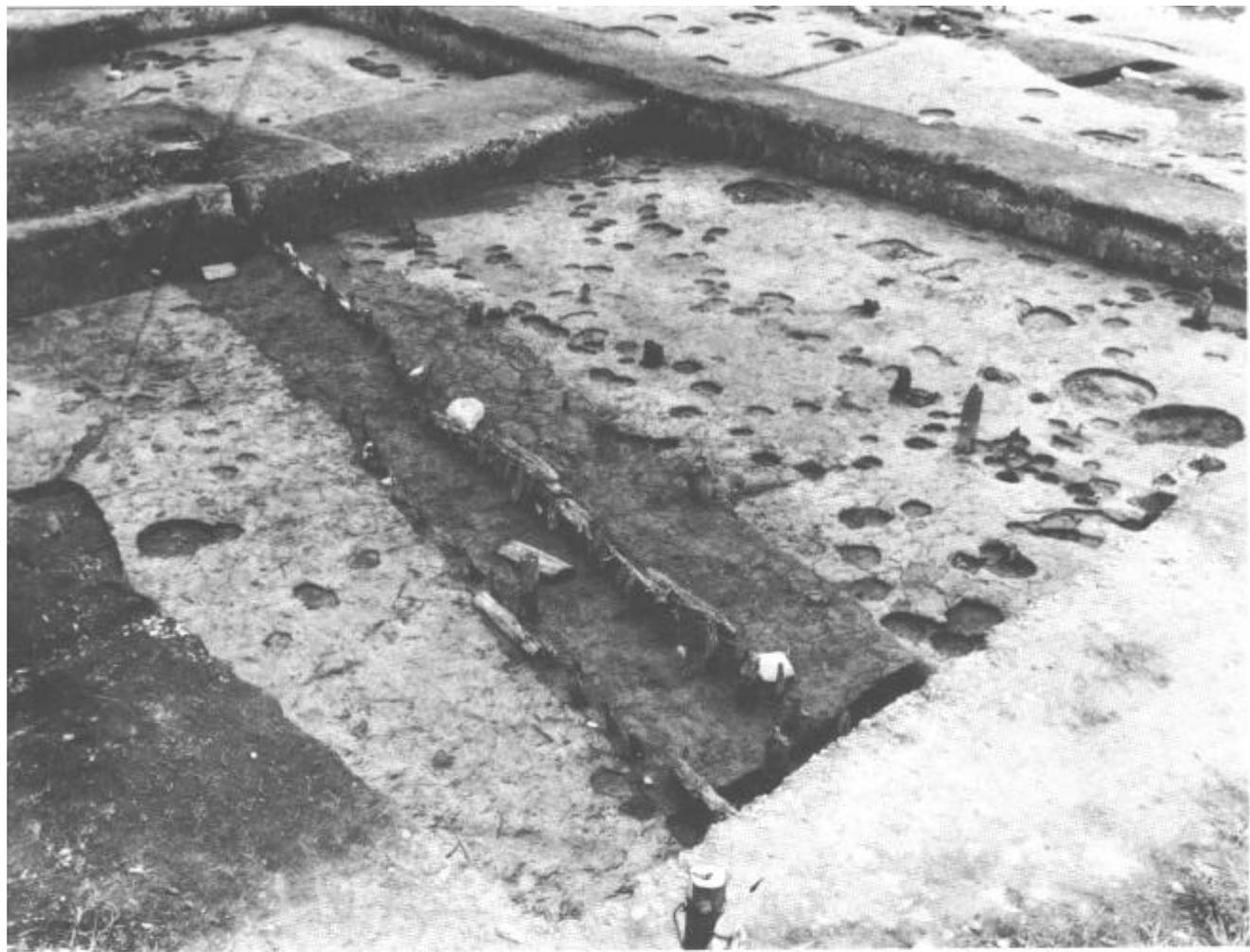
1 SB 444・445建物跡[南▶北] 2 SB 444-8 建物・柱[北▶南]



図版11 第43次発掘調査

1 SB 445-3 建物・柱〔南▶北〕

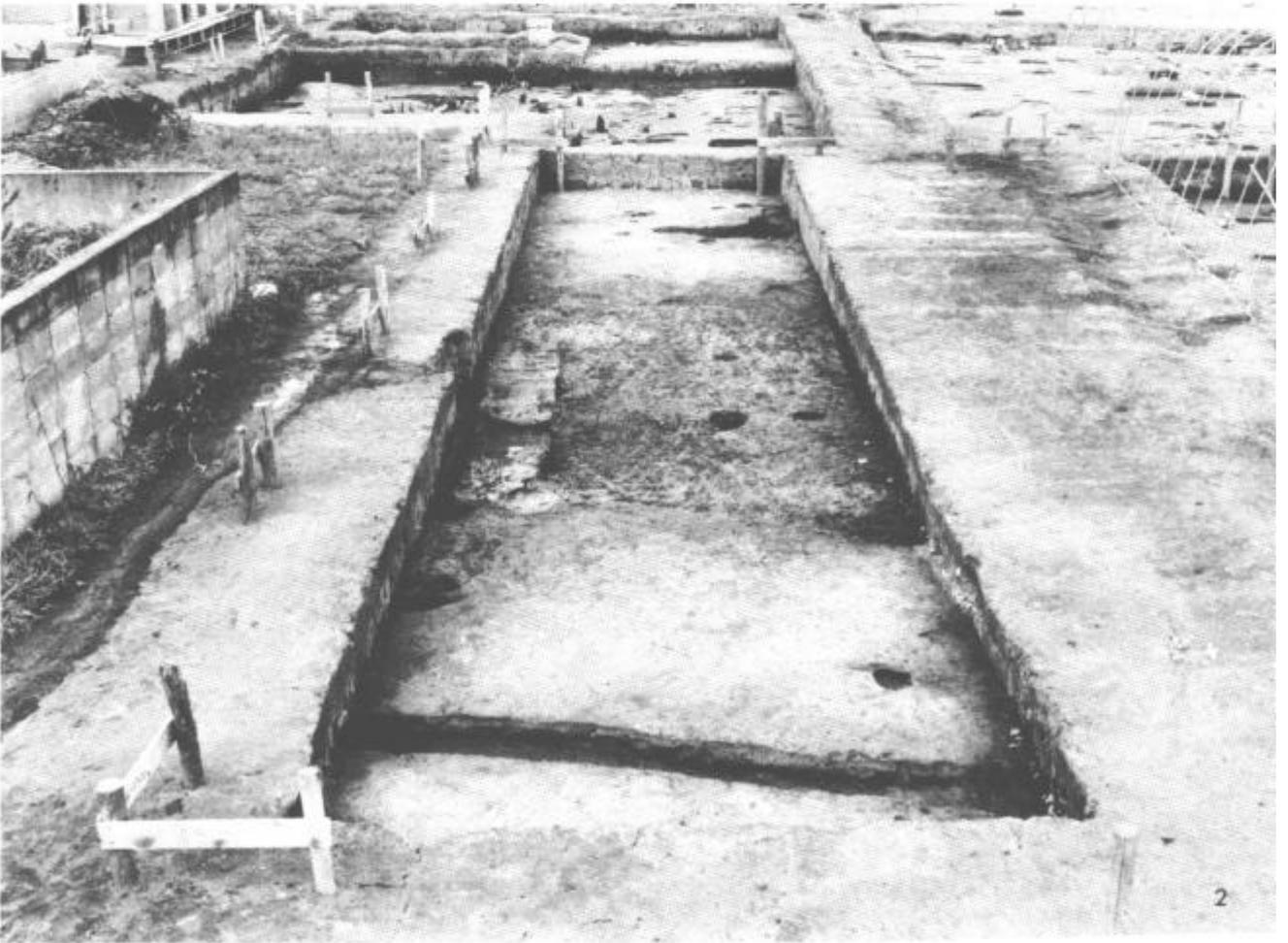
SB 446-5 建物・柱〔南▶北〕



図版12 第43次発掘調査

1 SD 433溝〔南西▶北東〕

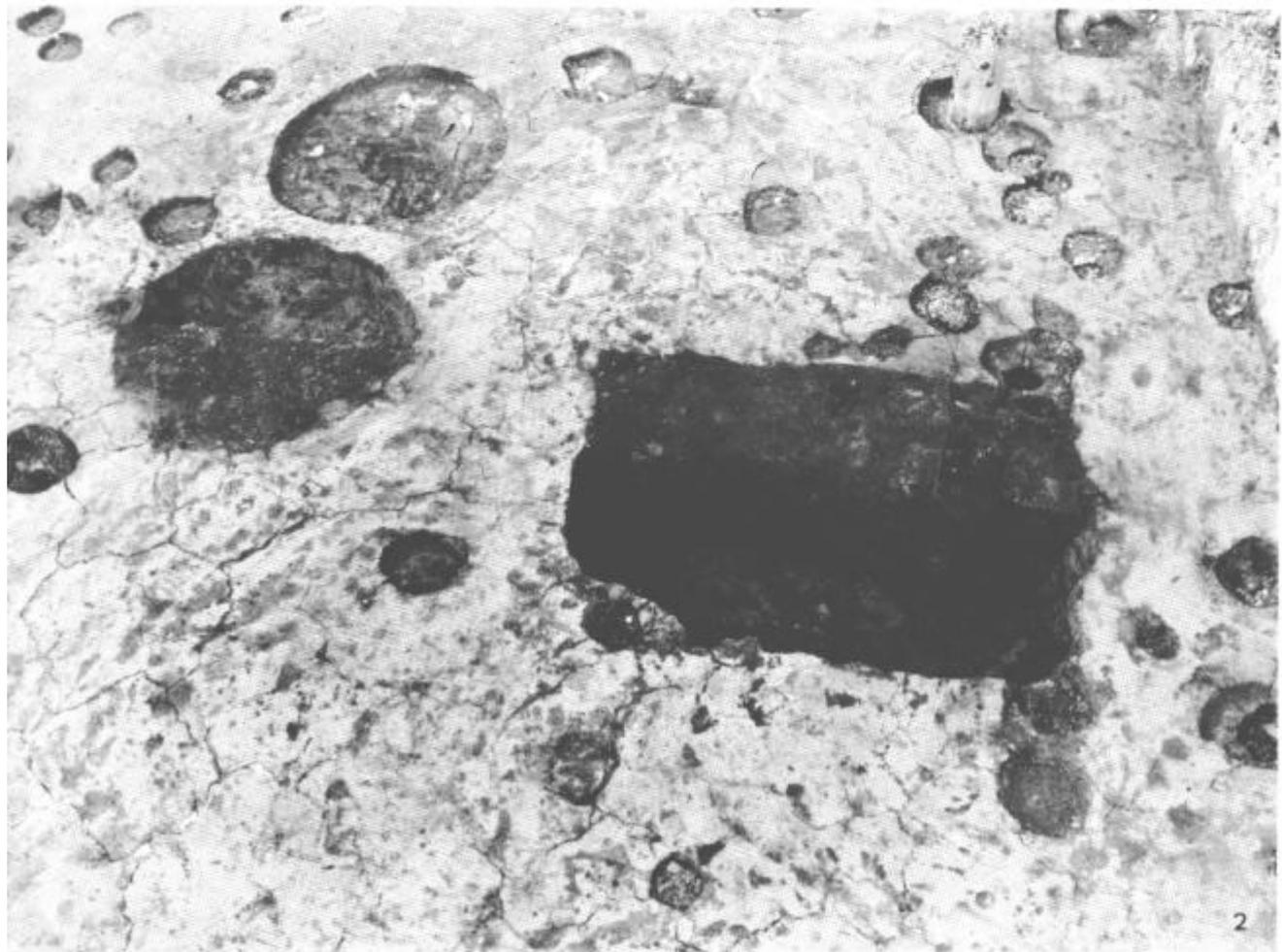
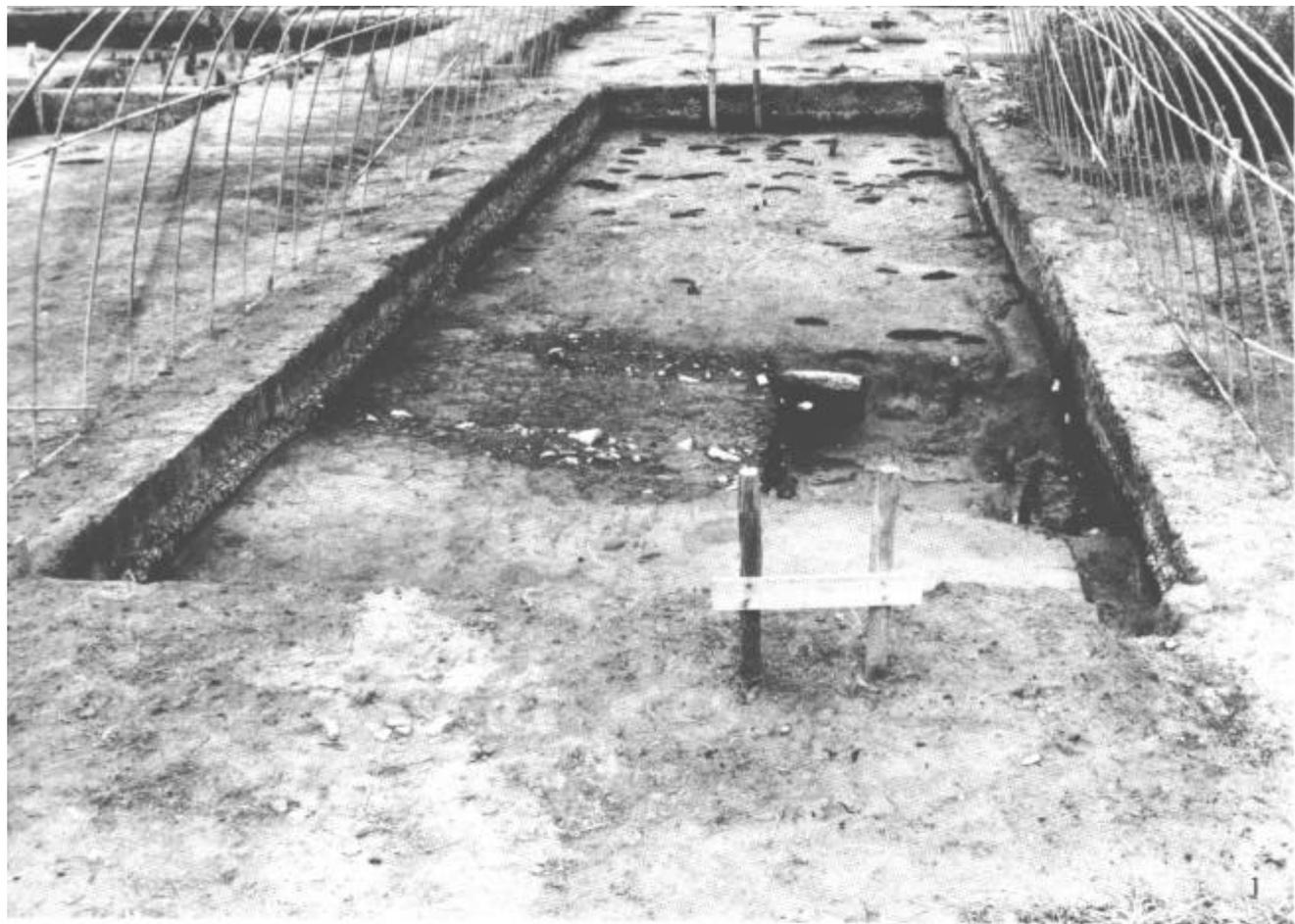
2 SD 433・442溝〔北▶南〕



図版13 第43次発掘調査

1 SD 434・443溝[北西▶南東]

2 SD 438・439溝[南▶北]



図版14 第43次発掘調査

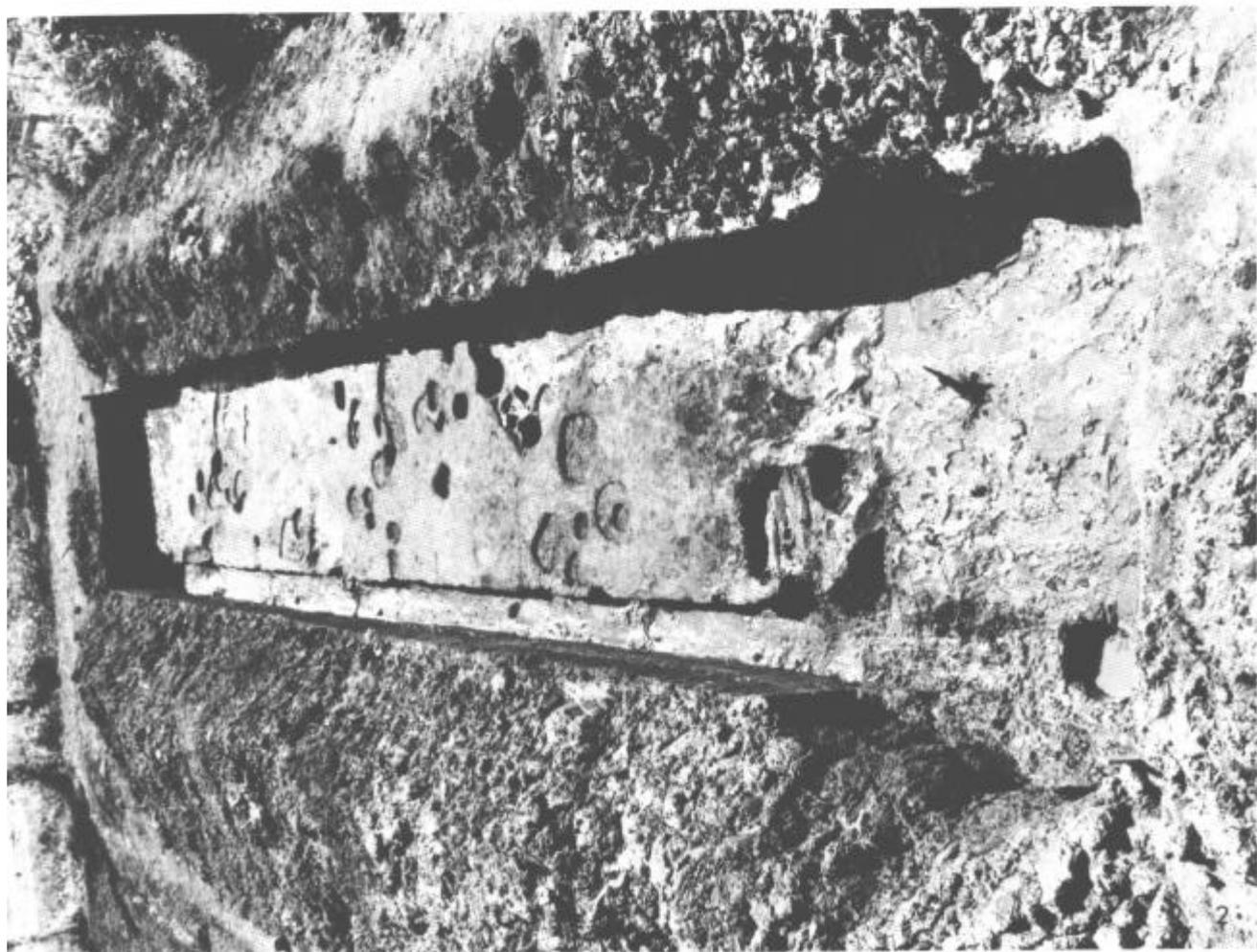
1 SD 439溝〔南▶北〕 2 SX 431・432〔南▶北〕



図版15 第43次発掘調査

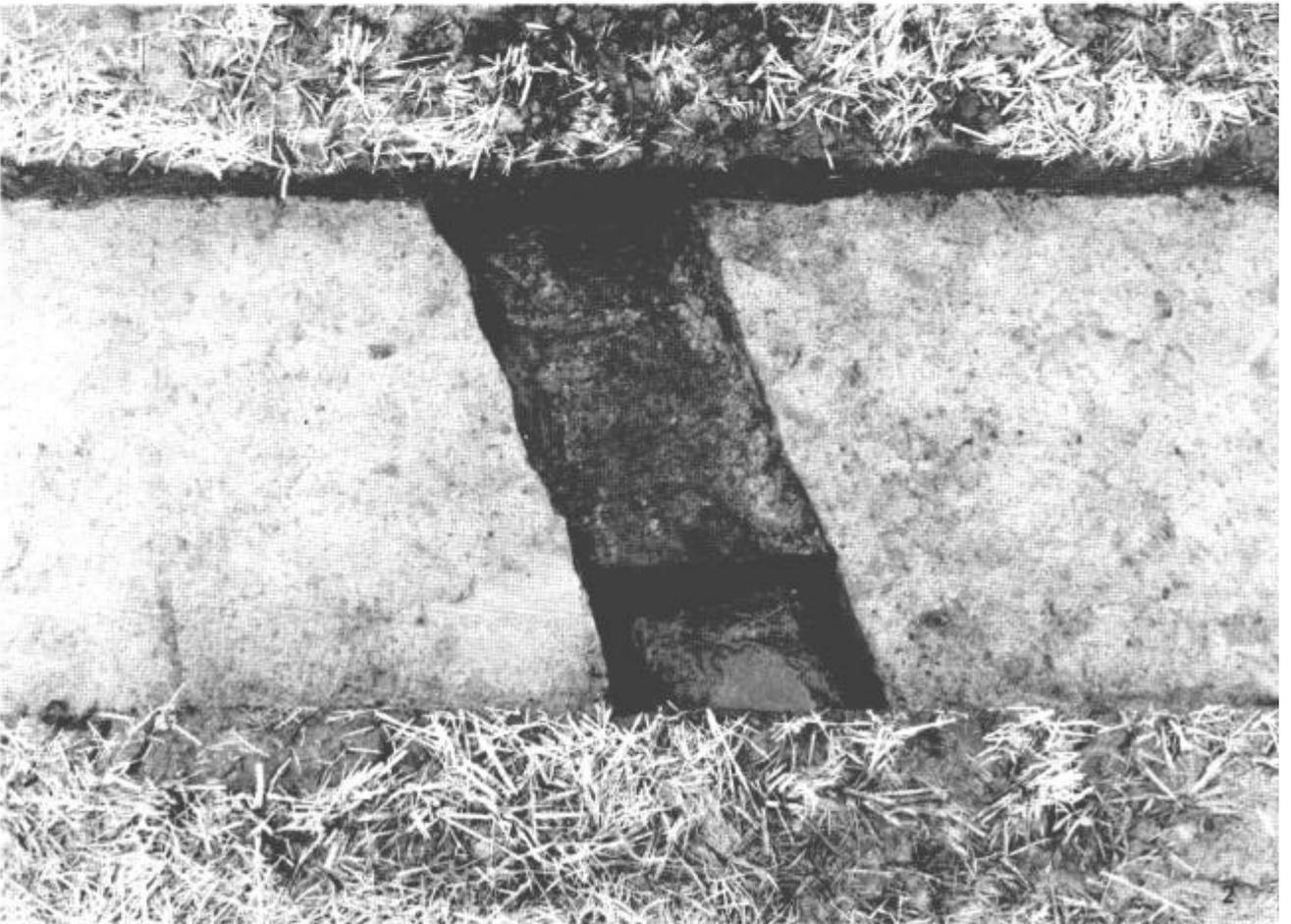
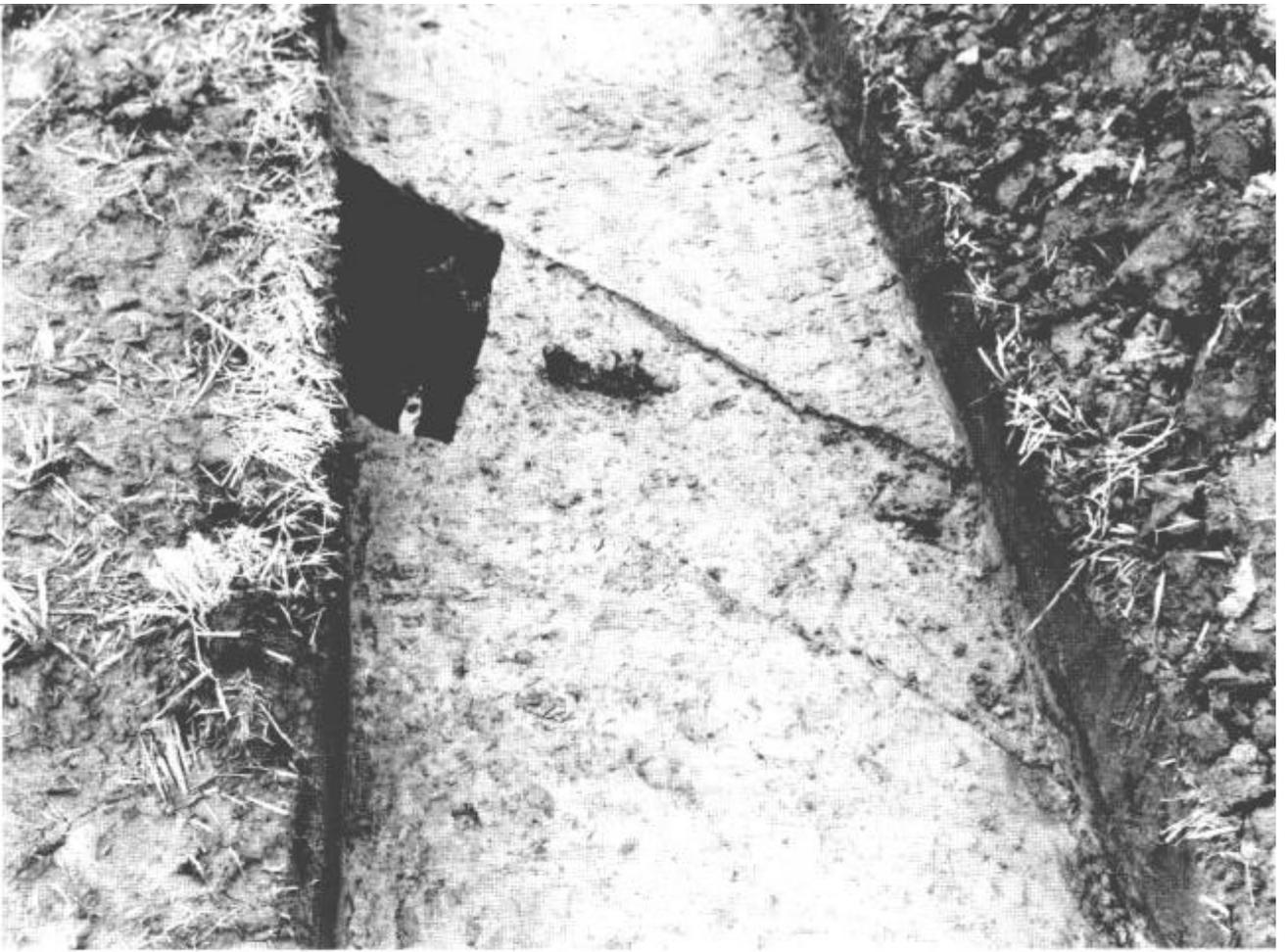
1 SX 437 [北西▶南東]

2 SX 441 [南東▶北西]

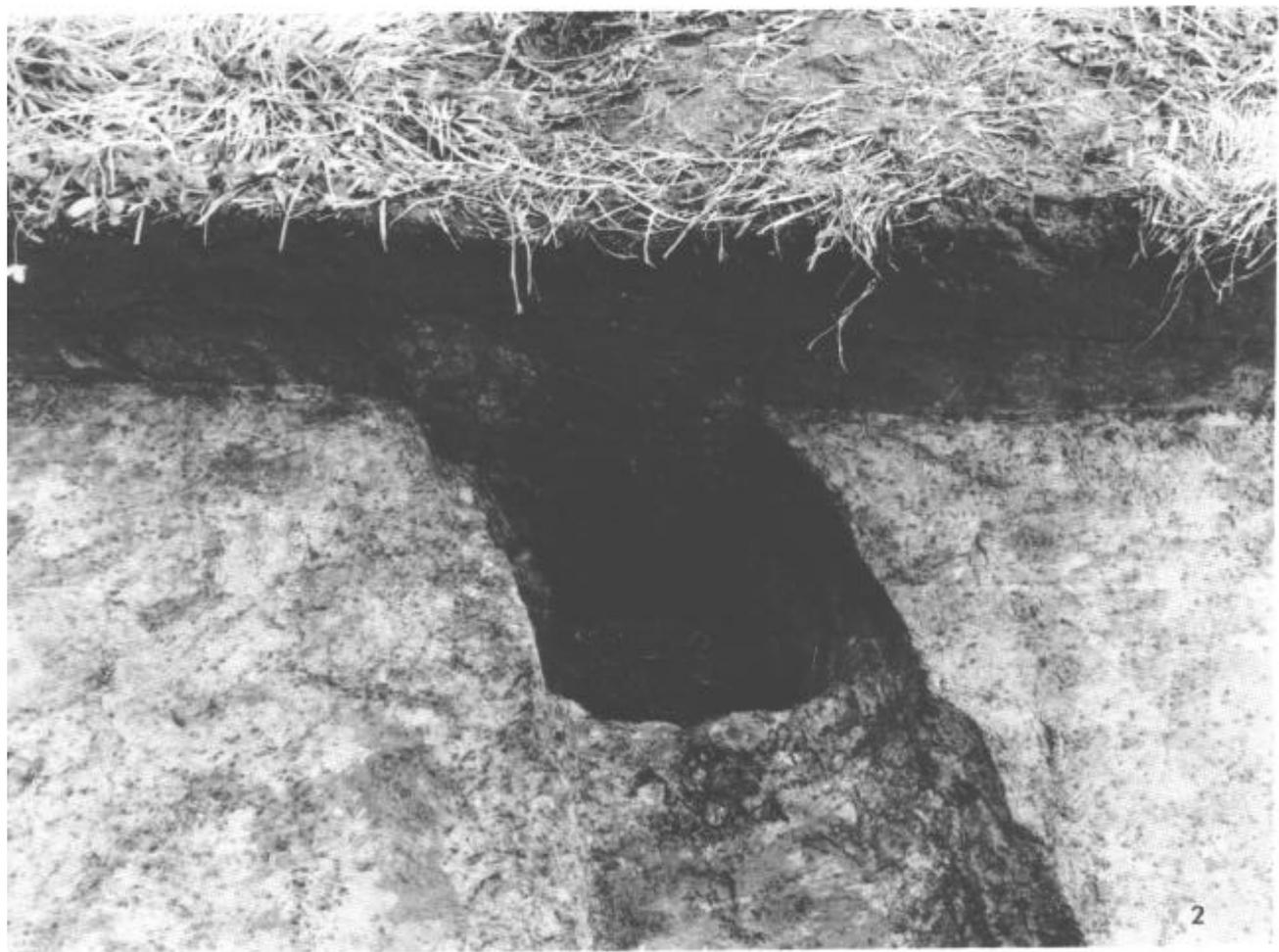
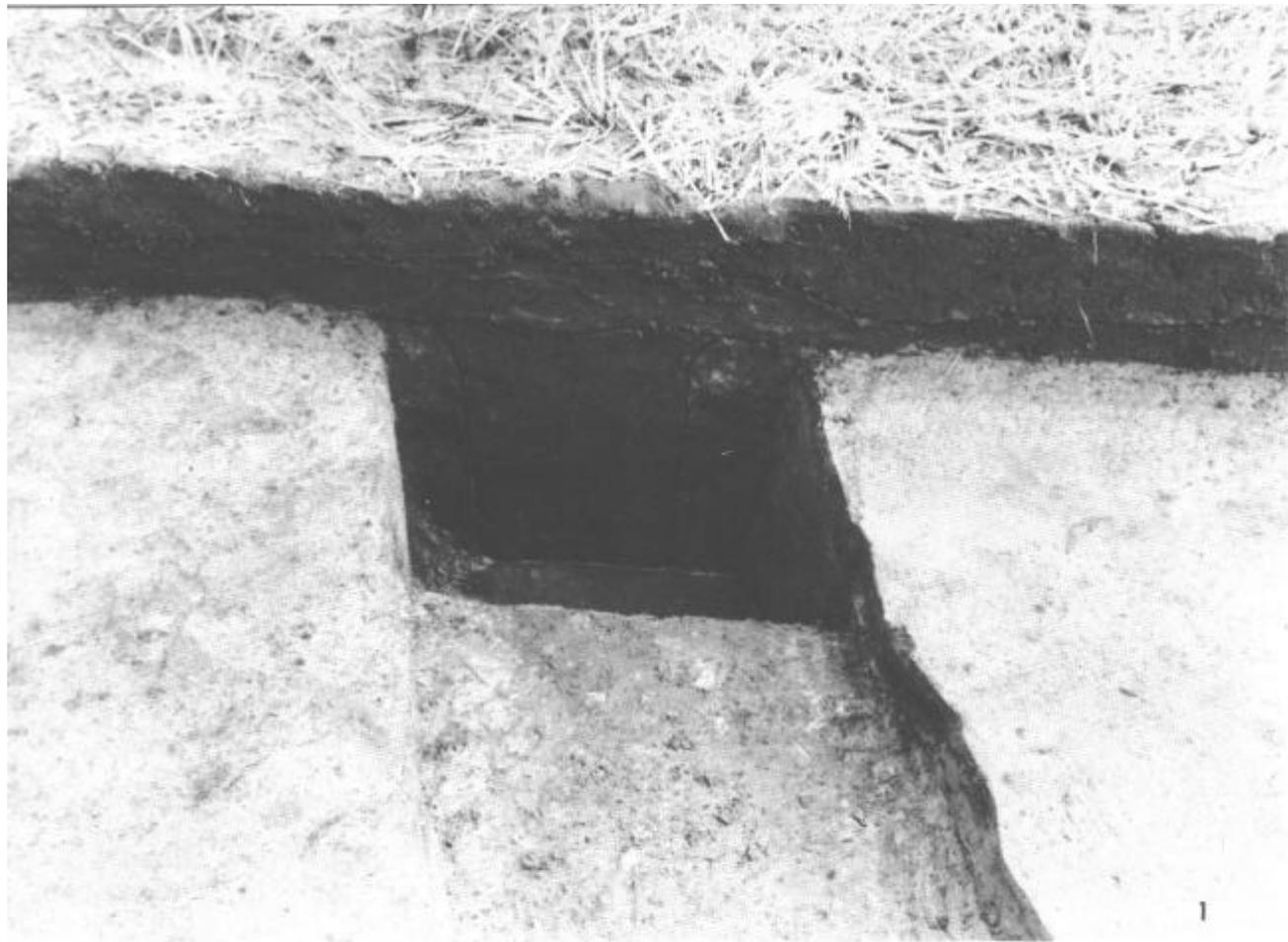


図版16 第43次発掘調査

1 Aトレンチ〔東▶西〕 2 Bトレンチ〔北▶南〕



図版17 第44次発掘調査 SA 460角材列
1 3Aトレンチ(西▶東) 2 6Bトレンチ(東▶西)



図版18 第44次発掘調査 SA460角材列
1 6Bトレンチ(西▶東) 2 6Cトレンチ(西▶東)



図版19

第44次発掘調査 SA 460角材列

1 土器出土状況〔東▶西〕



2 同 出土土器 (14)

2

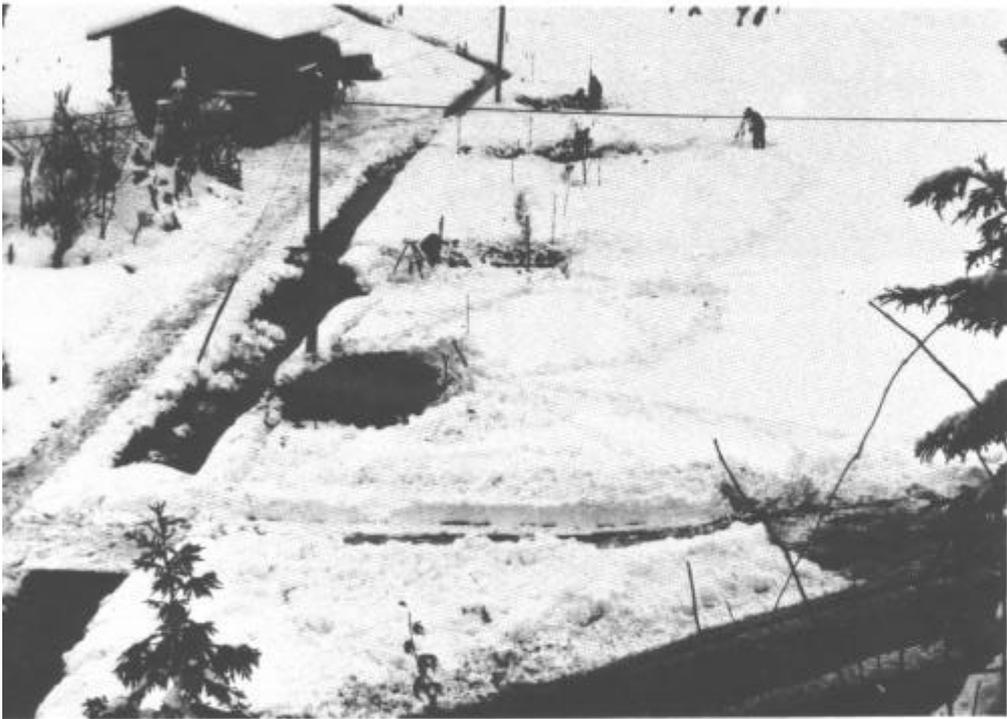


3 同 出土土器 (20)

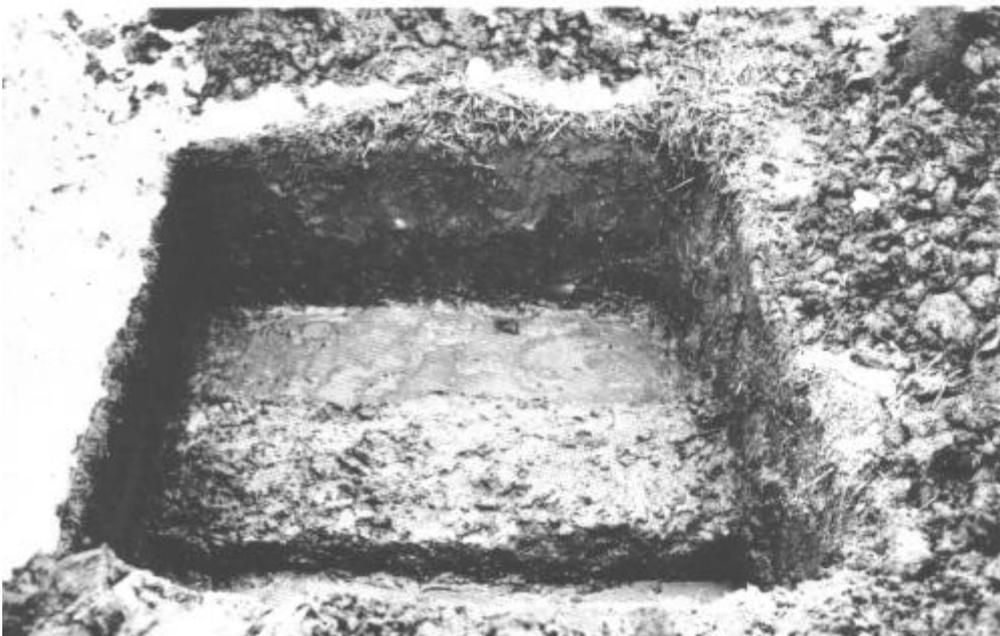
3



第45次発掘調査
1 調査前全景(西▶東)



2 調査区全景(西▶東)



3 同 Aトレンチ(東▶西)



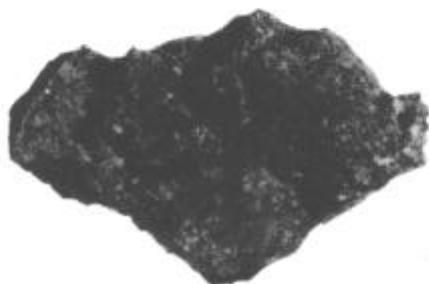
AH-1



AH-2



AH-3



AH-4



AH-5



AH-6



図版22 · 1 鉄滓分析資料 AH-5 · 6 2 SX 363工房跡内炉断面